

はま より じ かた
浜 寄 ・ 地 方 遺 跡

— 1 H ・ 1 I ・ 2 B ・ 2 D ・ 2 E 各区の調査 —

一般国道9号（益田道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4

2007年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

一般国道9号は、京都府京都市を起点として山口県下関市に至る総延長約670キロメートルの主要幹線道路であり、山陰地方諸都市を結び、沿線各地域における経済的・文化的活動に重要な役割を果たしています。

国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所においては、益田市内における一般国道9号の交通混雑の緩和、安全・円滑な交通の確保及び萩・石見空港へのアクセス強化を図ることを目的として、益田道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ、関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当益田道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の協力のもとに平成13年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成15・16年度に実施した浜寄・地方遺跡の発掘調査結果を取りまとめたものです。本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行われていることへの理解を深めるものとなれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力いただいた島根県教育委員会ならびに関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成19年3月

国土交通省中国地方整備局

浜田河川国道事務所

所 長 宮 原 慎

序

本報告書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、平成15年度から平成16年度に実施した益田道路建設予定地内の浜寄・地方遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

この調査では、古墳時代前半期の集落跡や平安時代末の木造仏手をはじめとして弥生時代以降の各時代にわたる遺構や遺物が確認され、この地域の歴史を解明していくうえで貴重な資料を得ることができました。

本報告書が、この地域における人々の暮らしやそれを取り巻く自然の営みを後世に伝える基礎的資料として、学校教育や生涯学習に役立てていただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の発刊にあたり御協力いただきました地元の方々ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

島根県教育委員会教育長

藤原義光

例 言

- 1 本書は、島根県教育委員会が平成15年度から平成16年度に実施した一般国道9号（益田道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告する遺跡は次のとおりである。

浜寄・地方遺跡 島根県益田市高津2丁目・3丁目
- 3 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

平成15年度 現地調査

[事務局] 宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（同副所長）
永島静司（同総務課長）、川原和人（同調査第2課長）

[調査員] 大庭俊次（同調査第6係長）、田原淳史（同主事）
川崎英司（同教諭兼文化財保護主事）、板倉芳朗（同教諭兼文化財保護主事）
渡辺 聡（同臨時職員）、世良 啓（同臨時職員）

平成16年度 現地調査

[事務局] 山根正巳（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、卜部吉博（同副所長）
永島静司（同総務グループ課長）、宮沢明久（同調査第2グループ課長）

[調査員] 大庭俊次（同主幹）、田原淳史（同文化財保護主事）、都田敬樹（同講師兼主事）
鳥屋孝太郎（同講師兼主事）、渡辺 聡（同臨時職員）、世良 啓（同臨時職員）

平成17年度 報告書作成（1A、1B、1C、1D、1F、2A、2C、2F、2G、2D各区）

[事務局] 卜部吉博（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（同総務グループ課長）、宮沢明久（同調査第2グループ課長）

[調査員] 田原淳史（同文化財保護主事）、谷 徹（同教諭兼主事）

平成18年度 報告書作成（1H、1I、2B、2D、2E各区）

[事務局] 卜部吉博（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）
坂本憲一（同総務グループ課長）、宮沢明久（同調査第2グループ課長）

[調査員] 大庭俊次（同主幹）、松崎恵美子（同臨時職員）
- 4 発掘調査（発掘作業員雇用、重機プレハブ等物品借り上げ、発掘用具調達、測量発注等）については島根県教育委員会から中国建設弘済会に委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会島根支部

[現場技術員] 齊藤義徒 藤井敏治 松下芳久

[事 務 員] 池野真由美
- 5 現地調査及び報告書の作成に際しては、以下の方々あるいは機関から有益な助言指導をいただいた。（役職名は当時のものである）

岩崎仁志（山口県埋蔵文化財センター文化財専門員）、小野正敏（国立歴史民俗博物館教授）、大庭康時（福岡市教育委員会文化財保護部主査）、岡野雅則（鳥取県埋蔵文化財調査センター）、亀山 将（浜寄自治会長）、木原 光（益田市教育委員会文化振興課文化財係長）、篠原和大（静岡大学人文学部助教授）、滝沢 誠（静岡大学人文学部教授）、田中義昭（島根県文化財保

護審議会委員)、中村唯史(島根県立三瓶自然館サヒメル学芸員)、村上 勇(広島県立美術館次長兼学芸課長)、山崎純男(福岡市教育委員会文化財保護部部長)、山田和芳(島根大学汽水域研究センター研究機関研究員)、益田市教育委員会、益田市立歴史民俗資料館

- 6 挿図方位は測量法の第Ⅲ座標系の軸方位を示す。レベルは海拔を示す。
- 7 第1図は、国土地理院発行の1/25,000(益田・石見横田)を使用した。第4図は同じく国土地理院発行の1/50,000(益田・日原)を使用した。
- 8 本書の執筆編集は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター職員の協力助言を得て、調査員が協議分担して行い、文責は目次に明示した。
- 9 本書に掲載した写真撮影は、現地調査においては大庭と田原をはじめ各調査区担当調査員が行った。室内での遺物撮影については1H、1I、2B、2E各区の遺物を大庭が担当し、2D区の遺物を大庭と谷が分担して行った。なお、浜寄・地方遺跡1H区出土仏手の室内撮影については、センター職員の松尾充晶が行った
- 10 本書掲載の実測図、出土遺物、写真等は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター(島根県松江市打出町33番地)で保管している。
- 11 浜寄・地方遺跡-1A・1B・1C・1D・1F・2A・2C・2F・2G各区の調査については平成18年度に当センターから報告書が刊行されている。

凡 例

- 1 本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。
 - (1) 遺構図 1/20, 1/30, 1/40, 1/60
 - (2) 遺物実測図 1/3, 1/4, 1/6
- 2 遺物実測図のうち、石器、土製品、木製品の一部には断面に斜線を入れた。
- 3 本文中、挿図中、写真図版中の遺物番号は一致する。
- 4 本報告書における遺構名のうち、いくつかのものについては現地調査でつけたものから変更している。報告書においては、新遺構名-(旧遺構名)の順に表示した。
- 5 遺物観察表の色調は『新版標準土色帖2002年版』を参考にした。
- 6 本報告書で用いた土器の分類および編年観は下記の各論文、報告書等を参考にした。

松本岩雄 「石見地域」『弥生土器の様式と編年-山陰・山陽編-』 木耳社 1992年

松山智弘 「小谷式再検討-出雲平野における新資料から-」 島根考古学会誌第17集 2000年

「神原神社古墳埋納坑出土の土器について」『神原神社古墳』 加茂町教育委員会 2002年

「出雲における古墳時代前半期の土器の様相-大東式の再検討-」 島根考古学会誌第8集 1991年

島根県教育委員会 『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』 1992年

太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』太宰府市の文化財 第49集 2000年

榊原博英 「石見の様相」『山陰における中世前期の貿易陶磁器』 第26回山陰考古学研究集会 1998年

中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995年

本文目次

第1章 調査に至る経緯	(田原・大庭) ...	1
第2章 遺跡の位置と環境	(田原・板倉・川崎) ...	3
第1節 地理的環境		3
第2節 歴史的環境		4
第3章 調査の概要と経過	(田原・大庭) ...	8
第1節 現地調査の概要		8
第2節 現地調査の経過		10
第3節 整理作業の概要		11
第4章 基本層序	(田原) ...	12
第5章 1区の調査	(大庭) ...	15
第1節 1H区の調査		15
第2節 1I区の調査		22
第6章 2区の調査	(田原・大庭) ...	47
第1節 2B区の調査	(大庭) ...	47
第2節 2D区の調査	(田原・大庭) ...	69
第3節 2E区の調査	(大庭) ...	166
第7章 総括	(田原) ...	173

挿 図 目 次

第 1 図	益田道路建設予定地内の遺跡 (S = 1/50,000)	2
第 2 図	浜寄・地方遺跡の位置	3
第 3 図	地形概念図	3
第 4 図	周辺の主な遺跡 (S = 1/75,000)	6
第 5 図	浜寄・地方遺跡周辺図・調査区配置図 (S = 1/4,000)	8
第 6 図	土層概念図 (1 区)	12
第 7 図	土層概念図 (2 区)	13
第 8 図	1 H 区遺構配置図 (S = 1/300)	15
第 9 図	1 H 区南壁土層断面実測図 (S = 1/80)	16
第 10 図	1 H 区主要部遺物出土状況平面図 (S = 1/100)	17
第 11 図	1 H 区出土遺物実測図 1 (S = 1/3)	18
第 12 図	1 H 区出土遺物実測図 2 (S = 1/3)	19
第 13 図	1 H 区出土遺物実測図 3 (1 ~ 3 は S = 1/3、4 は S = 1/6)	20
第 14 図	1 H 区出土銭貨拓影 (等倍)	20
第 15 図	1 I 区遺構配置図 (S = 1/300)	22
第 16 図	1 I 区主要部平面図 (S = 1/100)	23
第 17 図	1 I 区主要部東西方向土層断面実測図 (S = 1/80)	24
第 18 図	1 I 区土器出土状況及び集石遺構実測図 (S = 1/40)	25
第 19 図	1 I 区木製鋤 (未成品) 出土状況実測図 (S = 1/20)	25
第 20 図	1 I 区土坑 1 実測図 (S = 1/40)	25
第 21 図	1 I 区土坑 2 実測図 (S = 1/40)	26
第 22 図	1 I 区土師器供膳具坏列実測図 (S = 1/20)	26
第 23 図	1 I 区出土遺物実測図 1 (S = 1/3) (土師器高坏、小形丸底壺、製塩土器)	27
第 24 図	1 I 区出土遺物実測図 2 (S = 1/3) (土師器甕)	28
第 25 図	1 I 区出土遺物実測図 3 (S = 1/3) (土師器甑、移動式竈)	29
第 26 図	1 I 区出土遺物実測図 4 (S = 1/3) (移動式竈)	30
第 27 図	1 I 区出土遺物実測図 5 (S = 1/3) (須恵器蓋坏蓋)	31
第 28 図	1 I 区出土遺物実測図 6 (S = 1/3) (須恵器蓋坏身)	32
第 29 図	1 I 区出土遺物実測図 7 (S = 1/3) (須恵器有蓋高坏、甗、甕)	33
第 30 図	1 I 区出土遺物実測図 8 (S = 1/3) (須恵器蓋坏、坏)	34
第 31 図	1 I 区出土遺物実測図 9 (S = 1/3) (須恵器模倣品)	35
第 32 図	1 I 区出土遺物実測図 10 (S = 1/3) (土師器供膳具坏)	36
第 33 図	1 I 区出土遺物実測図 11 (S = 1/3) (陶磁器)	37
第 34 図	1 I 区出土遺物実測図 12 (S = 1/3) (土錘)	37
第 35 図	1 I 区出土遺物実測図 13 (S = 1/3) (石器、砥石)	38
第 36 図	1 I 区出土遺物実測図 14 (S = 1/3) (木製品柄ほか)	39

第 37 図	1 I 区出土遺物実測図15 (S=1/6) (木製品齋串、えぶり未成品ほか)	40
第 38 図	1 I 区出土遺物実測図16 (S=1/6) (木製鋤未成品)	41
第 39 図	2 B 区遺構配置図 (S=1/300)	48
第 40 図	2 B 区トレンチ 4 土層断面実測図 (S=1/40)	49
第 41 図	2 B 区柱穴群 (南東隅) 実測図 (S=1/80)	50
第 42 図	2 B 区柱穴群 (南壁沿い) 実測図 (S=1/80)	51
第 43 図	2 B 区柱穴群 (中央) 実測図 (S=1/80)	52
第 44 図	2 B 区土坑実測図 (S=1/40)	53
第 45 図	2 B 区遺物出土状況実測図 (S=1/20)	53
第 46 図	2 B 区完掘測量図 (S=1/300)	54
第 47 図	2 B 区出土遺物実測図 1 (S=1/3) (弥生土器)	55
第 48 図	2 B 区出土遺物実測図 2 (S=1/3) (弥生土器)	56
第 49 図	2 B 区出土遺物実測図 3 (S=1/3) (土師器甗、高坏)	57
第 50 図	2 B 区出土遺物実測図 4 (S=1/3) (土師器高坏、低脚坏)	58
第 51 図	2 B 区出土遺物実測図 5 (S=1/3) (土師器小形丸底壺、壺、器台)	59
第 52 図	2 B 区出土遺物実測図 6 (S=1/3) (土師器壺)	60
第 53 図	2 B 区出土遺物実測図 7 (S=1/3) (土師器甗)	61
第 54 図	2 B 区出土遺物実測図 8 (S=1/3) (須恵器、黒色土器、土師器供膳具、陶器)	62
第 55 図	2 B 区出土遺物実測図 9 (S=1/3) (土錘)	63
第 56 図	2 D 区土層図 (S=1/80)	70
第 57 図	2 D 区 P 1 実測図 (S=1/20)	71
第 58 図	2 D 区 P 1 出土土師器供膳具実測図 (S=1/3)	71
第 59 図	2 D 区 2・3 層遺構配置図 (S=1/300)	72
第 60 図	2 D 区 P 1 出土銭貨拓影 1 (等倍) (表のみ)	73
第 61 図	2 D 区 P 1 出土銭貨拓影 2 (等倍) (表のみ)	74
第 62 図	2 D 区 P 1 出土銭貨拓影 3 (等倍) (表のみ)	75
第 63 図	2 D 区 2・3 層出土遺物実測図 (S=1/3) (須恵器蓋坏、瓦質土器釜、挿鉢 陶器 土錘)	76
第 64 図	2 D 区 4 層出土遺物実測図 1 (S=1/3) (弥生土器)	81
第 65 図	2 D 区 4 層出土遺物実測図 2 (S=1/3) (土師器甗、壺、高坏、器台ほか)	82
第 66 図	2 D 区 4 層出土遺物実測図 3 (S=1/3) (土師器壺)	83
第 67 図	2 D 区 4 層出土遺物実測図 4 (S=1/3) (土師器甗、壺)	84
第 68 図	2 D 区 4 層出土遺物実測図 5 (S=1/3) (土師器甗)	85
第 69 図	2 D 区 4 層出土遺物実測図 6 (S=1/3) (土師器甗)	86
第 70 図	2 D 区 4 層出土遺物実測図 7 (S=1/3) (土師器甗)	87
第 71 図	2 D 区 4 層出土遺物実測図 8 (S=1/3) (土師器甗)	88
第 72 図	2 D 区 4 層出土遺物実測図 9 (S=1/3) (土師器甗、壺、低脚坏)	89
第 73 図	2 D 区 4 層出土遺物実測図10 (S=1/3) (土師器甗、低脚坏、高坏)	90

第74図	2 D区4層出土遺物実測図11 (S=1/3) (土師器高坏)	91
第75図	2 D区4層出土遺物実測図12 (S=1/3) (土師器高坏)	92
第76図	2 D区4層出土遺物実測図13 (S=1/3) (土師器高坏、器台、壺、鉢、手捏土器)	93
第77図	2 D区4層出土遺物実測図14 (S=1/3) (土師器鉢、土錘)	94
第78図	2 D区4層出土遺物実測図15 (S=1/3) (土師器低脚坏、壺、鉢、手捏土器)	95
第79図	2 D区4層出土遺物実測図16 (S=1/3) (須恵器蓋坏)	96
第80図	2 D区4層出土遺物実測図17 (S=1/3) (須恵器長頸壺、高坏、壺、甕)	97
第81図	2 D区4層出土遺物実測図18 (S=1/3) (陶器插鉢、土師器供膳具、土錘、土製支脚)	98
第82図	2 D区4層出土遺物実測図19 (S=1/3) (鉄斧)	99
第83図	2 D区5層遺構配置図 (S=1/300)	102
第84図	2 D区5層竪穴式建物跡土層堆積状況実測図 (S=1/40)	103
第85図	2 D区5層竪穴式建物跡遺物出土状況実測図 (S=1/40)	104
第86図	2 D区竪穴式建物跡出土遺物実測図 (S=1/3) (壺、甕、高坏、低脚坏、器台、鉢)	105
第87図	2 D区5層竪穴式建物跡完掘状況実測図1 (S=1/40)	106
第88図	2 D区土器溜りB-1出土遺物実測図 (S=1/3) (壺、甕、高坏、低脚坏)	107
第89図	2 D区土器溜りB-2出土遺物実測図 (S=1/3) (壺)	107
第90図	2 D区5層河道跡遺物出土状況 (遺構S=1/100, 遺物S=1/6)	109
第91図	2 D区5層河道跡出土遺物実測図1 (S=1/3)	110
第92図	2 D区5層河道跡出土遺物実測図2 (S=1/3)	111
第93図	2 D区5層河道跡出土遺物実測図3 (S=1/3)	112
第94図	2 D区5層出土遺物実測図1 (S=1/3) (弥生土器甕、壺、土師器甕)	114
第95図	2 D区5層出土遺物実測図2 (S=1/3) (土師器、甕、壺)	115
第96図	2 D区5層出土遺物実測図3 (S=1/3) (土師器甕)	116
第97図	2 D区5層出土遺物実測図4 (S=1/3) (土師器甕、鉢)	117
第98図	2 D区5層出土遺物実測図5 (S=1/3) (土師器壺、鉢)	118
第99図	2 D区5層出土遺物実測図6 (S=1/3) (土師器壺)	119
第100図	2 D区5層出土遺物実測図7 (S=1/3) (土師器壺)	120
第101図	2 D区5層出土遺物実測図8 (S=1/3) (土師器高坏、低脚坏)	121
第102図	2 D区5層出土遺物実測図9 (S=1/3) (土師器器台、低脚坏)	122
第103図	2 D区5層出土遺物実測図10 (S=1/3) (土錘、手捏土器)	123
第104図	2 D区6層遺構配置図 (S=1/300)	125
第105図	2 D区6層(土器溜り)遺物出土状況 (遺構S=1/100, 遺物S=1/6)	126
第106図	2 D区6層(土器溜り)出土遺物実測図1 (S=1/3) (土師器甕、鉢)	127
第107図	2 D区6層(土器溜り)出土遺物実測図2 (S=1/3) (土師器壺、高坏、鉢)	128
第108図	2 D区6層出土遺物実測図1 (S=1/3) (弥生土器甕、壺)	129
第109図	2 D区6層出土遺物実測図2 (S=1/3) (土師器壺)	131

第110図	2 D区 6層出土遺物実測図3 (S=1/3) (土師器甕)	132
第111図	2 D区 6層出土遺物実測図4 (S=1/3) (土師器甕)	133
第112図	2 D区 6層出土遺物実測図5 (S=1/3) (土師器甕、壺)	134
第113図	2 D区 6層出土遺物実測図6 (S=1/3) (土師器壺)	135
第114図	2 D区 6層出土遺物実測図7 (S=1/3) (土師器甕)	136
第115図	2 D区 6層出土遺物実測図8 (S=1/3) (土師器壺、鉢)	137
第116図	2 D区 6層出土遺物実測図9 (S=1/3) (土師器高坏、器台)	138
第117図	2 D区 6層出土遺物実測図10 (S=1/3) (土師器低脚坏、器台、鉢)	139
第118図	2 D区 6層出土遺物実測図11 (S=1/3)	140
第119図	2 D区 6層出土遺物実測図12 (S=1/3)	141
第120図	2 D区 6層出土遺物実測図13 (S=1/3) (土錘、鉢、手捏土器)	142
第121図	2 D区 6層出土遺物実測図14 (S=1/3) (木器、木製品)	143
第122図	2 E区遺構配置図 (S=1/300)	166
第123図	2 E区北壁土層断面実測図 (S=1/80)	167
第124図	2 E区南壁土層断面実測図 (S=1/80)	167
第125図	2 E区製炭窯実測図 (S=1/40)	168
第126図	2 E区出土遺物実測図1 (S=1/3) (弥生土器、石鎌)	168
第127図	2 E区出土遺物実測図2 (S=1/3) (甕、壺、高坏)	169
第128図	2 E区出土遺物実測図3 (S=1/3) (土製支脚)	170

表 目 次

第 1 表	益田道路建設予定地内の遺跡一覧表	1
第 2 表	浜寄・地方遺跡周辺の遺跡	7
第 3 表	1 H区出土遺物観察表	21
第 4 表	1 I区出土遺物観察表	42
第 5 表	2 B区出土遺物観察表	65
第 6 表	2 D区出土遺物観察表	144
第 7 表	2 E区出土遺物観察表	172

写真図版目次

- 図版 1 1 H区出土木造仏手
- 図版 2 浜寄・地方遺跡 調査前の風景
浜寄・地方遺跡 遠景（上空西から）
- 図版 3 1 H区調査着手前（東から）
1 H区 5 層上面検出状況（北東から）
1 H区 6 層土器溜り発掘状況（南東から）
- 図版 4 1 H区調査区西側 3 層祥符元寶出土状況
1 H区調査区西側 6 層土器溜り発掘状況
1 H区調査区西側 6 層土器溜り人形出土状況
- 図版 5 1 H区調査区西側 5 層木造仏手出土位置と土層堆積状況
1 H区調査区西側 5 層木造仏手出土状況
1 H区調査区西側 5 層遺物（土師器供膳具）出土状況
- 図版 6 1 I区調査着手前（東から）
1 I区調査区西側土器溜り等発掘状況
- 図版 7 1 I区調査区中央部表土下土層堆積状況
1 I区調査区南壁表土下土層堆積状況
1 I区調査区中央部 6 層以下土層堆積状況
- 図版 8 1 I区SK02検出状況
1 I区SK02遺物（土師器供膳具）出土状況
1 I区SK02発掘状況
- 図版 9 1 I区 5 層上面検出状況
1 I区調査区西端土坑等遺構検出状況
1 I区SK01発掘状況
- 図版10 1 I区調査区西端遺物（土師器供膳具坏列）出土状況
1 I区SK01検出状況
1 I区土器溜り発掘状況
1 I区土器溜り発掘状況
- 図版11 1 I区調査区西側配石等遺構検出状況
1 I区調査区西側土師器甕埋設遺構発掘状況
1 I区 6 層以下土器溜り中の木製鋤未成品出土状況
- 図版12 1 H区出土遺物 土師器、須恵器、青磁、白磁、陶磁器
- 図版13 1 H区出土遺物 土師器供膳具、漆器、人形（木製）、棒状木製品
- 図版14 1 H区出土遺物 木造仏手 1 I区出土遺物 土師器
- 図版15 1 I区出土遺物 土師器、移動式竈
- 図版16 1 I区出土遺物 土師器甕、須恵器模倣坏、須恵器蓋坏
- 図版17 1 I区出土遺物 須恵器蓋坏

- 図版18 1 I区出土遺物 須恵器高坏、甗、壺、甕
- 図版19 1 I区出土遺物 須恵器甕、蓋坏、坏
- 図版20 1 I区出土遺物 土師器供膳具
- 図版21 1 I区出土遺物 土師器供膳具、青磁、陶磁器、土錘
- 図版22 1 I区出土遺物 打製石斧、砥石、木製鋤（未成品）
- 図版23 1 I区出土遺物 木器、木製品
- 図版24 1 I区出土遺物 木器、木製品
- 図版25 2 B区調査前（東から）
2 B区調査前（東から）
- 図版26 2 B区調査前（西から）
2 B区完掘（西から）
- 図版27 2 B区土層堆積状況
2 B区調査区南東隅遺構検出状況
2 B区調査区東側南辺遺構検出状況
- 図版28 2 B区調査区南東隅遺構配置
2 B区調査区東側南辺遺構配置
2 B区調査区中央部遺構配置
- 図版29 2 B区調査区東側遺構配置
2 B区柱穴65検出面遺物出土状況
2 B区ピット75底面遺物出土状況
- 図版30 2 B区SK01検出状況
2 B区SK01遺物出土状況
2 B区SK01完掘
- 図版31 2 B区遺物出土状況（甗と土師器高坏） 1
2 B区遺物出土状況（甗と土師器高坏） 2
2 B区遺物出土状況（土師器広口壺）
- 図版32 2 B区遺物出土状況（土師器甕、検出面）
2 B区遺物出土状況（土師器甕、第2面）
2 B区遺物出土状況（土師器甕）
- 図版33 2 B区出土遺物 弥生土器
- 図版34 2 B区出土遺物 弥生土器 土師器甗、高坏
- 図版35 2 B区出土遺物 土師器高坏、低脚坏
- 図版36 2 B区出土遺物 土師器丸底壺
- 図版37 2 B区出土遺物 土師器壺、器台
- 図版38 2 B区出土遺物 土師器甕
- 図版39 2 B区出土遺物 須恵器 黒色土器
- 図版40 2 B区出土遺物 土師器壺 土師器供膳具 陶器 土錘
- 図版41 2 E区（手前） 2 D区（奥）着手前（西から）

- 2 E区(手前) 2 D区(奥) 調査前(西から)
- 図版42 2 D区P 1 遺物出土状況
2 D区2・3層遺物出土状況(63-11)
2 D区2・3層ピット群
- 図版43 2 D区5層上面河道跡堆積状況
2 D区土層(北壁)
2 D区5層上面河道跡(西から)
- 図版44 2 D区5層遺物出土状況
2 D区5層河道跡遺物出土状況
2 D区6層河道跡(西から)
- 図版45 2 D区B-1土器溜り検出状況
2 D区B-1土器溜り第2面
2 D区B-2土器溜り検出状況
- 図版46 2 D区竪穴式建物跡検出面86-7土師器壺出土状況
2 D区竪穴式建物跡遺構検出状況
2 D区竪穴式建物跡埋土中の焼土検出状況
- 図版47 2 D区竪穴式建物跡発掘状況
2 D区竪穴式建物跡遺物出土状況
2 D区竪穴式建物跡床面検出状況
- 図版48 2 D区P 1出土土師器供膳具 2・3層出土遺物
- 図版49 2 D区竪穴式建物跡出土遺物 土師器
- 図版50 2 D区土器溜りB-1・B-2出土遺物 土師器 2 D区4層出土遺物 土師器
- 図版51 2 D区4層出土遺物 土師器甕、壺、高坏、器台
- 図版52 2 D区4層出土遺物 土師器壺
- 図版53 2 D区4層出土遺物 土師器甕、壺
- 図版54 2 D区4層出土遺物 土師器甕、壺
- 図版55 2 D区4層出土遺物 土師器甕
- 図版56 2 D区4層出土遺物 土師器甕
- 図版57 2 D区4層出土遺物 土師器甕
- 図版58 2 D区4層出土遺物 土師器甕、壺、低脚坏、鉢
- 図版59 2 D区4層出土遺物 土師器低脚坏、高坏
- 図版60 2 D区4層出土遺物 土師器高坏
- 図版61 2 D区4層出土遺物 土師器高坏、鉢 手捏土器
- 図版62 2 D区4層出土遺物 土師器鉢 手捏土器 土錘 鉄斧
- 図版63 2 D区4層出土遺物 弥生土器 土師器壺、低脚坏、鉢、手捏土器
- 図版64 2 D区4層出土遺物 須恵器蓋坏、高坏、甕、壺
- 図版65 2 D区4層出土遺物 陶器播鉢 瓦質播鉢 土師器供膳具 土錘、土製支脚
2 D区5層出土遺物 土師器甕

- 図版66 2 D区5層出土遺物 土師器甕、壺
- 図版67 2 D区5層出土遺物 土師器甕、壺、高坏、器台、鉢
- 図版68 2 D区5層出土遺物 弥生土器甕、壺 土師器甕、壺
- 図版69 2 D区5層出土遺物 土師器甕、壺
- 図版70 2 D区5層出土遺物 土師器壺、鉢
- 図版71 2 D区5層出土遺物 土師器高坏、低脚坏
- 図版72 2 D区5層出土遺物 土師器器台、低脚坏
- 図版73 2 D区5層出土遺物 土師器器台、鉢 土錘
- 図版74 2 D区5層出土遺物 土師器甕、高坏
- 図版75 2 D区5層出土遺物 土師器鉢、壺
- 図版76 2 D区6層出土遺物 弥生土器甕、土師器甕、壺
- 図版77 2 D区6層出土遺物 土師器甕
- 図版78 2 D区6層出土遺物 土師器甕
- 図版79 2 D区6層出土遺物 土師器甕、壺
- 図版80 2 D区6層出土遺物 土師器甕、壺
- 図版81 2 D区6層出土遺物 土師器高坏、低脚高坏、低脚坏
- 図版82 2 D区6層出土遺物 土師器高坏、低脚坏、器台、鉢
- 図版83 2 D区6層出土遺物 土師器低脚坏、鉢 弥生土器壺
- 図版84 2 D区6層出土遺物 弥生土器壺
- 図版85 2 D区6層出土遺物 弥生土器壺 土製品 土錘 手捏土器
- 図版86 2 E区中央南辺上層製炭窯跡検出状況（北から）
2 E区製炭窯跡検出状況（西から）
2 E区製炭窯跡床面直上炭、灰堆積物検出状況
- 図版87 2 E区製炭窯跡床面直上炭、灰堆積状況
2 E区製炭窯跡焼成室床面炭材痕検出状況
2 E区製炭窯跡完掘（西から）
- 図版88 2 E区遺物出土状況（土師器甕）
2 E区遺物出土状況（土師器甕）
2 E区遺物出土状況（弥生時代中期土器片）
- 図版89 2 E区流路跡検出状況（南から）
2 E区流路跡完掘（南から）
- 図版90 2 E区出土遺物 弥生土器 石鎌 土師器甕、壺、高坏 土製支脚

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号は京都市から山口県下関市に至る総延長670kmの主要幹線道路である。この道路はまた、山陰諸都市間を結ぶ唯一の幹線道路でもあり、経済的・文化的活動に重要な役割を果たしている。

しかし、近年の交通量の増加と沿線の市街化の影響もあり、主に市街地を中心にしばしば交通渋滞が発生している。このため都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、その様相は益田市においても例外ではない。さらに益田市においては、一般国道9号及び191号が市内中心部で交差するという地理的要因もあって交通混雑が慢性的に発生し、都市機能に支障をきたし始めていた。

こうした状況のもと、交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するために、平成8年度に建設省（現国土交通省）により益田道路（延長7.8km、益田市遠田町～須子町）の建設が計画・事業化されることになった。

この計画・事業化にあたり、建設省から島根県教育委員会に対して、益田道路建設予定地内の遺跡の存否について照会があった。これを受けて、益田市教育委員会の協力のもと、平成10年度に予定地内において遺跡の分布調査が実施されることになった。分布調査は平成11年3月に実施され、その結果、27か所の遺跡及び遺跡推定地（最終的にはルート上から外れるものを含んでいたため24か所の遺跡及び遺跡推定地）を確認し、建設省に回答した。

第1表 益田道路建設予定地内の遺跡一覧表

	遺跡名	所在地	遺跡の種類	時代	現状（施工前）	調査年度
1	流松遺跡	益田市遠田町	集落跡	古墳～	水田、山林	平成17年度
2	流松南遺跡	益田市遠田町	集落跡		山林	平成17年度
3	原浜遺跡	益田市遠田町	集落跡	弥生時代	山林	平成18年度
4	久城西Ⅱ遺跡	益田市久城町	散布地		山林	平成18年度
5	久城西Ⅰ遺跡	益田市久城町	集落跡	古墳時代	山林	平成18年度
6	若葉台遺跡	益田市久城町	集落跡	古墳時代	山林	平成18年度
7	久城東遺跡	益田市久城町	近世の石囲墓、集落跡、散布地	古墳～	宅地、畠、墓地	平成17年度
8	城角遺跡	益田市久城町	城館跡	中世～	宅地	
9	堂ノ上遺跡	益田市久城町	集落跡	弥生時代	宅地	平成18年度
10	迫ノ谷古墳群	益田市久城町	古墳、城館跡、散布地	古墳～	宅地、山林、畠	平成17年度
11	専光寺脇古墳群	益田市久城町	墳丘墓、古墳、城館跡	弥生、古墳、中世	山林、墓地	平成17年度～18年度
12	沖手遺跡	益田市久城町	集落跡、散布地	弥生時代中世	水田	平成16年度～17年度
13	中河原遺跡	益田市中島町	散布地、低湿地遺跡	中世～	水田、畠、宅地	平成14年度
14	浜遺跡	益田市高津町	神社跡、散布地	中世～	畠、宅地	平成13年度～16年度
15	浜寄・地方遺跡	益田市高津町	集落跡、散布地	弥生時代 古墳～	畠、宅地	平成14年度～16年度
16	沖田遺跡	益田市高津町	散布地	弥生～古墳	山林、水田	平成13年度
17	廿子Ⅰ遺跡	益田市飯田町	弥生時代集落跡	弥生・古墳	山林	平成13年度
18	廿子Ⅱ遺跡	益田市飯田町	散布地	弥生・古墳	山林	平成13年度
19	廿子Ⅲ遺跡	益田市飯田町	弥生時代集落跡	弥生・古墳	山林	平成14年度
20	やばらⅠ遺跡	益田市飯田町	散布地・近世以降の墓地	古墳・近世～	山林、墓地	平成13年度
21	やばらⅡ遺跡	益田市飯田町	古墳、城館跡、散布地	古墳～	山林	平成13年度
22	じんだ遺跡	益田市飯田町	散布地	古墳～	山林	平成13年度
23	恵比寿Ⅰ遺跡	益田市飯田町	散布地	古墳	山林	平成13年度
24	恵比寿Ⅱ遺跡	益田市飯田町	散布地	古墳	山林	平成13年度

※網かけは調査の終了した遺跡

以後この結果をもとに建設省と島根県教育委員会との間で協議が適時行われ、予定地内遺跡の埋蔵文化財発掘調査について具体的に検討が行われた。

その結果、平成13年度から予定地内遺跡の現地調査を開始することとなり、平成13・14年度には飯田町地内8遺跡の調査を実施した。平成14年度には同じく工事の先行する高津町地内の浜寄・地方遺跡においても、調査を行う上での環境が整ってきたため、9月から実施することとなった。



第1図 益田道路建設予定地内の遺跡 (S = 1/50,000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

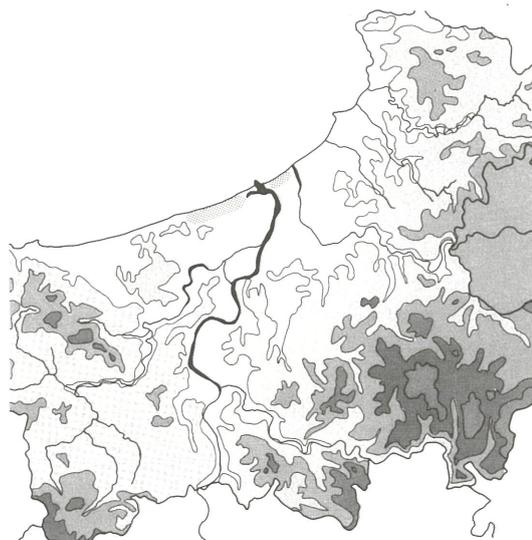
浜寄・地方遺跡は益田市高津（浜寄・地方）に所在する遺跡である。遺跡は、中国山地に源を發し日本海に向けて北流する高津川と日本海に沿って形成された広大な砂丘、そして南西に広がる低丘陵に囲まれた低地に、広範囲にわたって展開している。周辺には柿本人麻呂をまつた柿本神社や万葉公園、県立自然公園蟠竜湖などがあり、ここを訪れる観光客も多い。

（概況）益田市は島根県の西部、山口県との県境に位置する、人口約53,000人の地方都市である。現在でもJR山陰線と山口線、国道9号線と191号線の分岐点となり、広島・山口へと通じているように、その地理的位置により、古くから広島県・山口県との結びつきが強く、民俗・文化や風土の面でも県東部とは異なった様相を見せている。

（地形）益田市は北部の平野部（益田平野）とそれを取り囲むようにある周辺の丘陵部・山間部からなっている。益田平野は美都・匹見町境の春日山に源を發して北流する益田川と、六日市町（現吉賀町）に源を發し、支流の津和野川・匹見川を合わせながら北流する高津川的作用によって形成された複合三角州であり、石見部で最大の規模を誇る平野である。これまでの研究によれば、約6,000年前までは「古益田湖」と称される湖が広がっていたものが、両河川による堆積作用の結果徐々に陸化していったと考えられている⁽¹⁾。平野の東側と南側は丘陵部で、中国山脈から伸びる支脈の先端部にあたり、東側の丘陵を開削している沖田川・津田川・遠田川の周辺には小規模な氾濫原や河岸段丘が見られる。また、平野の北西側は海岸の砂が季節風によって吹き上げられた浜堤を形成し、南側は標高400m級の山々が連なり中国山地の中でも高い地点となるなど、変化に富んだ地形となっている。



第2図 浜寄・地方遺跡の位置



第3図 地形概念図

第2節 歴史的環境

石見部で最大規模の平野を有する益田市及びその周辺では、数多くの遺跡の存在が知られている。本節ではそれらのうち、旧益田市域⁽²⁾に存在する遺跡で代表的なものを取上げて記述することを基本に、一部旧美都町・匹見町の状況にも触れることとしたい。

旧石器時代

現在までのところ旧石器時代に関する遺跡や遺物は確認されていない。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、安富王子台遺跡、三宅御土居跡、土居後遺跡など数か所で確認されているものの多くはない。安富王子台遺跡は高津川中流域にあり、縄文後期から晩期にかけての土器や石器など多くの遺物が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、安富王子台遺跡、羽場遺跡、井元遺跡、松ヶ丘遺跡、サガリ遺跡、専光寺脇古墳群のうちの弥生墳丘墓など数十か所が知られている。縄文時代の遺跡の数からかなり増加しており、人々がこの地に広く住み始めたことを窺わせている。本格的に調査が行われた遺跡は少ないが、安富王子台遺跡の北側に位置する羽場遺跡からは、長さ50mにも及ぶV字形の大型の溝（環濠）が確認されている。遺構内からは突帯文や櫛描文など装飾性に富んだ中期の土器が大量に出土しており、規模の大きな集落が存在したと考えられている。

古墳時代

古墳時代に入るとさらに遺跡数も増加する。古墳は石見の中では最も多く築かれていると考えられ、また大型古墳も早い時期から造られている。主要なものとしては、三角縁神獣鏡が出土した四塚山古墳（前期）、全長89mを測り前期では県内最大規模の前方後円墳・大元1号墳（前期）、埴輪列や葺き石を伴い二段築成の墳丘をもつスクモ塚古墳（中期）、墳丘52mで周囲に周濠と外堤を持ち、馬具等も出土した小丸山古墳（後期）、50基以上の古墳で構成された鶴ノ鼻古墳群（後期）などがある。横穴墓も多く造られており、北長迫・南長迫両横穴墓群では合わせて50基近くが確認されている。

これらの古墳は、市内南西部にある横穴式石室を持った白上古墳を除けば、基本的に益田平野の東から南にかけての丘陵に築かれており、現状では東半分に偏在する傾向にある。しかし、近年高津川左岸地域においても一基のみではあるが、横穴墓が確認されていることから、市内西側においても存在している可能性が考えられるようになってきている。こうした古墳の築造と不可分の関係を持つ集落については、これまでのところほとんど明らかになっていないが、それ以外のものとしては、市内北東部で後期の須恵器窯（芝窯跡・中塚窯跡など）がまとまって確認されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は大溢遺跡、庄屋東遺跡、サガリ遺跡、石塔寺権現経塚などが知られているが、数は少ない。大溢遺跡は日本海に面した丘陵にある遺跡で建物跡のほか製塩土器や須恵器がまとまって出土している。また石塔寺権現経塚からは中国製褐釉四耳壺を含む優品が出土している。

鎌倉・室町時代

鎌倉・室町時代の遺跡は、七尾城跡、三宅御土居跡、中世今市船着場跡などこの時代に活躍した

益田氏と関わるものを中心に多く知られている。七尾城跡は、益田平野の南東の丘陵に位置し、本丸跡や二の段の主郭部分を中心に曲輪や土塁等の防御施設を持ち、戦国時代の前期の山城として稀にみる整った構えを残している。瓦や土師器のほか、貿易陶磁器など多種多様なものも多量に出土している。三宅御土居跡は、七尾城跡から約700mの距離にあり、益田川の対岸に位置している。戦国期の地方豪族居館として、堀と大規模な土塁で守られた東西約185mに及ぶ屋敷跡で多様な遺物も出土しており、益田氏の強い軍事力・経済力が窺える。このほか大谷土居跡や上九々茂土居跡など、城館跡だけでも50か所近くが残っている。

市内には、雪舟作の庭園を持つ医光寺・万福寺、益田氏の菩提寺である妙義寺など中世に由来する史跡も多い。

また、近年益田川右岸河口近くで沖手遺跡が調査され、中世の集落跡のようすが明らかになりつつあり注目される。

江戸時代以降

江戸時代以降の遺跡としては、仁右エ門山遺跡や相生遺跡など瓦や日常雑器などを焼いた石見焼き窯跡が認められる。また磁器を焼いた白上焼の窯跡も知られている。

註

(1) 林 正久「益田平野の古地理の変遷」『中世今市船着場跡文化財調査報告書』益田市教育委員会 2000

(2) 平成16年10月 美都・匹見両町と合併

(主要参考文献)

矢富熊一郎『益田市史』

益田市誌編纂委員会『益田市誌』上巻1975

益田市教育委員会『安富王子台遺跡発掘調査概報』1981

益田市教育委員会『鶴ノ鼻古墳群発掘調査概報』1984

益田市教育委員会『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅰ』1986

益田市教育委員会『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅱ』1987

益田市教育委員会『益田市遠田地区遺跡分布調査報告書Ⅲ』1988

益田市教育委員会『小丸山古墳発掘調査報告書』1990

益田市教育委員会『三宅御土居跡Ⅰ』1991

益田市教育委員会『益田市関連遺跡群Ⅰ－勝達寺・七尾城跡－』1993

益田市教育委員会『益田市関連遺跡群Ⅱ』1994

益田市教育委員会『益田市関連遺跡群Ⅲ』1995

益田市教育委員会『益田拠点工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1996

益田市教育委員会『七尾城跡・三宅御土居跡－益田市関連遺跡群発掘調査報告書』1998

益田市教育委員会『中世今市船着場跡文化財調査報告書』2000

益田市教育委員会『身近なまちづくり支援街路事業 歴史的環境整備地区沖田七尾線街路事業に伴う暁音寺発掘調査報告書』2001

益田市教育委員会『自動車・携帯電話基地局益田高津基地局新設に伴う浜寄遺跡発掘調査報告書』2002

益田市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ（七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中世石造物分布調査）』2003

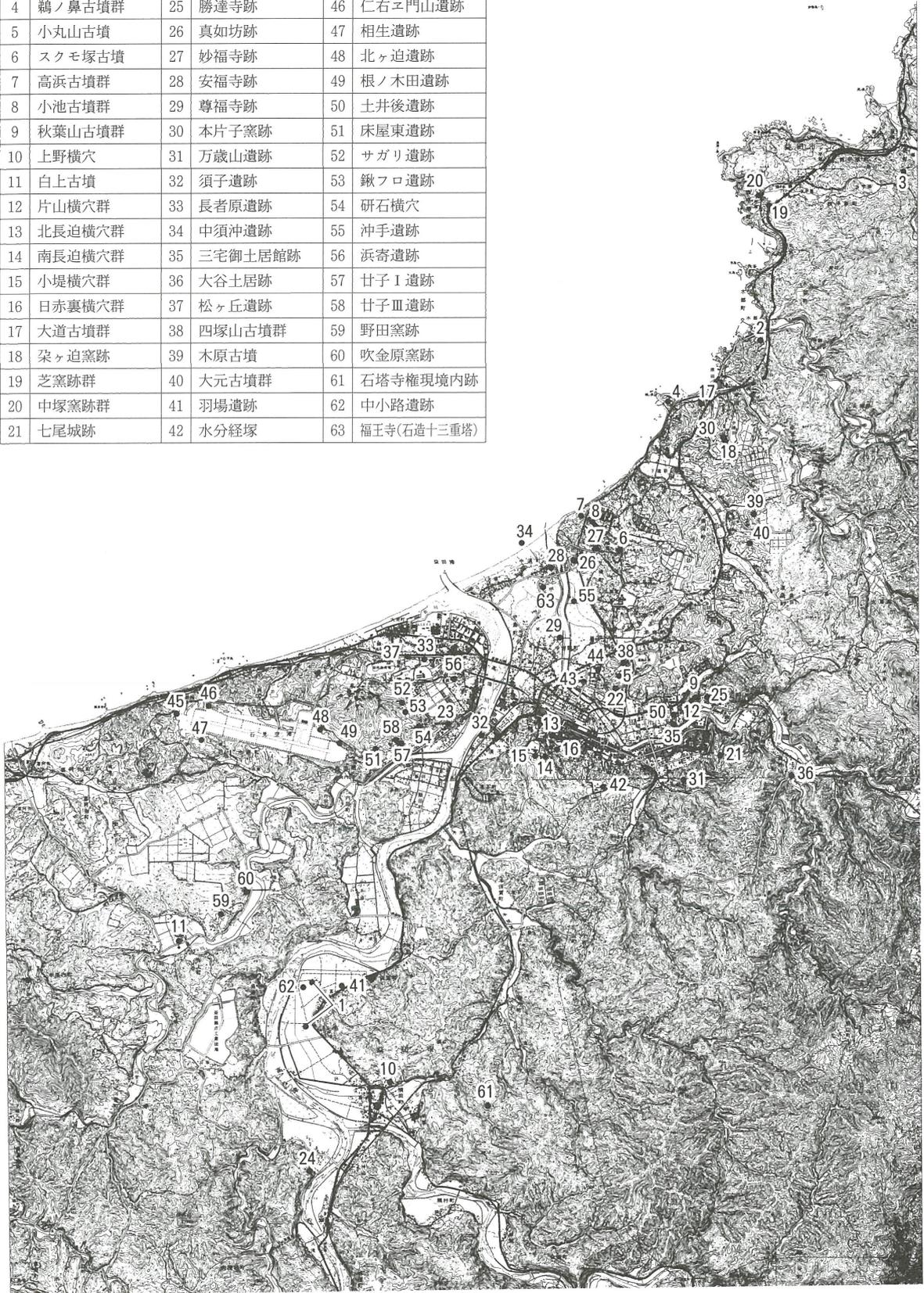
益田市教育委員会『中小路遺跡－平成15年度ふるさと能動整備事業横田安富地区埋蔵文化財発掘調査報告書』2004

島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』1992

島根県教育委員会『上久々茂土居跡・大峠遺跡』1994

島根県教育委員会『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』2002

1	安富遺跡	22	鶯ヶ松城跡	43	日赤敷地遺跡
2	井元遺跡	23	高津城跡	44	中世今市船着場
3	鎌手丸山古墳	24	向横田城跡	45	大溢遺跡
4	鶴ノ鼻古墳群	25	勝達寺跡	46	仁右エ門山遺跡
5	小丸山古墳	26	真如坊跡	47	相生遺跡
6	スクモ塚古墳	27	妙福寺跡	48	北ヶ迫遺跡
7	高浜古墳群	28	安福寺跡	49	根ノ木田遺跡
8	小池古墳群	29	尊福寺跡	50	土井後遺跡
9	秋葉山古墳群	30	本片子窯跡	51	床屋東遺跡
10	上野横穴	31	万歳山遺跡	52	サガリ遺跡
11	白上古墳	32	須子遺跡	53	鍬フロ遺跡
12	片山横穴群	33	長者原遺跡	54	研石横穴
13	北長迫横穴群	34	中須冲遺跡	55	冲手遺跡
14	南長迫横穴群	35	三宅御土居館跡	56	浜寄遺跡
15	小堤横穴群	36	大谷土居跡	57	廿子Ⅰ遺跡
16	日赤裏横穴群	37	松ヶ丘遺跡	58	廿子Ⅲ遺跡
17	大道古墳群	38	四塚山古墳群	59	野田窯跡
18	朶ヶ迫窯跡	39	木原古墳	60	吹金原窯跡
19	芝窯跡群	40	大元古墳群	61	石塔寺権現境内跡
20	中塚窯跡群	41	羽場遺跡	62	中小路遺跡
21	七尾城跡	42	水分経塚	63	福王寺(石造十三重塔)



第4図 周辺の主な遺跡 (S=1/75,000)

第2表 浜寄・地方遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	備考	遺跡地図
1	安富遺跡	散布地		Q 1
2	井元遺跡	散布地		Q 2
3	鎌手丸山古墳	古墳		Q 3
4	鶴ノ鼻古墳群	古墳		Q 9
5	小丸山古墳	古墳		Q 17
6	スクモ塚古墳	古墳		Q 24
7	高浜古墳群	古墳		Q 26
8	小池古墳群	古墳		Q 27
9	秋葉山古墳群	古墳		Q 32
10	上野横穴	横穴		Q 38
11	白上古墳	古墳		Q 39
12	片山横穴群	横穴		Q 44
13	北長迫横穴群	横穴		Q 46
14	南長迫横穴群	横穴		Q 47
15	小堤横穴群	横穴		Q 48
16	日赤裏横穴群	横穴		Q 49
17	大道古墳群	古墳		Q 51
18	朶ヶ迫窯跡	窯跡		Q 54
19	芝窯跡群	窯跡		Q 55
20	中塚窯跡群	窯跡		Q 56
21	七尾城跡	城跡		Q 57
22	鷲ヶ松城跡	城跡		Q 58
23	高津城跡	城跡		Q 67
24	向横田城跡	城跡		Q 77
25	勝達寺跡	寺院跡		Q 90
26	真如坊跡	寺院跡		Q 91
27	妙福寺跡	寺院跡		Q 92
28	安福寺跡	寺院跡		Q 93
29	尊福寺跡	寺院跡		Q 94
30	本片子窯跡	窯跡		Q 99
31	万歳山遺跡	散布地		Q100
32	須子遺跡	散布地		Q106

番号	遺跡名	種別	備考	遺跡地図
33	長者原遺跡	散布地		Q107
34	中須沖遺跡	鏡出土地		Q115
35	三宅御土居館跡	館跡		Q136
36	大谷土居跡	館跡		Q137
37	松ヶ丘遺跡	散布地		Q142
38	四塚山古墳群	古墳		Q143
39	木原古墳	古墳		Q145
40	大元古墳群	古墳		Q149
41	羽場遺跡	散布地		Q150
42	水分経塚	経塚		Q153
43	日赤敷地遺跡	散布地		Q191
44	中世今市船着場	その他		Q200
45	大溢遺跡	集落跡		Q204
46	仁右エ門山遺跡	窯跡		Q205
47	相生遺跡	窯跡		Q206
48	北ヶ迫遺跡	窯跡		Q207
49	根ノ木田遺跡	散布地		Q208
50	土井後遺跡	散布地		Q215
51	床屋東遺跡	散布地		Q258
52	サガリ遺跡	散布地		Q259
53	鋤フロ遺跡	散布地		Q260
54	研石横穴	横穴墓		Q261
55	沖手遺跡	散布地		Q271
56	浜寄遺跡	散布地		Q274
57	廿子Ⅰ遺跡	集落跡他		Q283
58	廿子Ⅲ遺跡	集落跡他		Q285
59	野田窯跡	窯跡		Q318
60	吹金原窯跡	窯跡		Q320
61	石塔寺権現境内跡	神社跡		Q342
62	中小路遺跡	集落跡		
63	福王寺(石造十三重塔)			

第3章 調査の概要と経過

第1節 現地調査の概要

今回の調査は、遺跡のほぼ中央を東西に貫くように計画された益田道路の建設に先立って行われたものである。

調査は、平成14年9月の開始から平成16年12月の終了まで、約2年4か月にわたって行われた(詳細は第2節参照)。



第5図 浜寄・地方遺跡周辺図・調査区配置図 (S=1/4,000)

本調査は、工事主体である国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所と適時協議を行いながら実施した。また、調査の成果については現地説明会・発掘調査日より『石見路の言伝』等により周辺住民の方々に公開したほか、広く市民にも還元するため、益田市立歴史民俗資料館において「調査速報展」も開催している。

調査を実施するにあたってはできる限り面的に行うことを基本としたが、工事工程その他の諸条件が必ずしもそれに合致しないこともあり、全体を浜寄側（2区）、地方側（1区）の2つの大調査区に分け、さらにそれを7と9の小調査区（計16の調査区）に分割して行うこととなった（第5図）。

また、調査対象地隣接部分では、水田耕作が行われている場所に近い調査区や民家に隣接している調査区もあったことから、用地境から3～5m前後の控地を設定して掘削を行った。

その結果、1区からは水田跡や建物跡のほか弥生時代から江戸時代に至る多くの遺物を、また2区からは建物跡や溝状遺構（流路跡）のほか同じく弥生時代から江戸時代に至る多くの遺物を検出した。

なお、浜寄・地方遺跡では、益田道路建設本体工事以外にもそれに関連してさまざまな事業が実施されたが、それらに関連した調査については、益田市教育委員会によって行われ、すでに調査成果も公表されている。

第2節 現地調査の経過

調査は平成14年度に1A・1B・1C・1D・2Aの各調査区、平成15年度に1C・1F・2B・2D・2Eの各調査区、平成16年度には残る1H・1I・2C・2D・2E・2F・2Gの各調査区で実施した。これらの調査の経過について概略を記す。

平成14年度

- 9月2日 浜寄・地方遺跡調査開始
- 中旬 1A区より調査を開始
順次1B区・1D区の調査にかかる。
- 下旬 1B区において水田跡検出
- 10月30日 山崎純男氏による調査指導（水田跡）
- 10月31日 田中義昭氏による調査指導（水田跡、出土遺物）
- 11月16日 現地説明会開催（150名の見学者）
- 12月5日 1B区プラント・オパール分析及び簡易ボーリングによる資料採取（文化財調査コンサルタント）
- 1月31日 平成14年度現地調査終了（1C区は翌年度継続調査）

平成15年度

- 4月8日 1C区、2B区調査開始
- 4月13日 1C区畦畔検出
- 5月28日 田中義昭氏による調査指導（水田跡）
- 6月4日 1C区・1B区現場空中撮影・現地説明会開催
- 6月5日 1F区調査開始
- 6月16日 中村唯史氏による調査指導（地質学）
- 6月23日 1C区プラント・オパール分析資料採取（文化財調査コンサルタント）
- 7月5日 益田道路発掘調査展開催（益田市立歴史民俗資料館）～9月30日
- 7月7日 島根県立益田養護学校地域交流学習による遺跡発掘体験
- 7月8日 益田公民館講座（益田市本町益田公民館 講師 川原調査第二課長）
- 7月15日 2B区調査終了
- 7月16日 1C区プラント・オパール分析資料採取（文化財調査コンサルタント）
- 8月7日 1F区調査終了
- 8月18日 2D区調査開始
- 9月29日 益田市高齢者大学発掘体験
- 11月26日 2E区調査開始
- 1月28日 田中義昭氏による調査指導（検出遺構・出土遺物）
- 1月31日 平成15年度調査終了

平成16年度

- 4月12日 2D区、2E区調査再開
- 5月26日 益田市立高津中学校 発掘体験学習（2D区）
- 5月27日 地方地区自治会長遺跡現地見学
- 6月1日 山田和芳氏による調査指導（地質学）
- 6月15日 2E区流路跡水底から石鎌（第126図2図版90）出土
- 6月24日 2E区調査終了
- 6月29日 1H区、1I区調査開始
- 7月3日 「平成15年度発掘調査速報展」開催（益田市立歴史民俗資料館）～8月31日
- 7月23日 2F区調査開始
- 7月30日 国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所職員現地見学
- 7月31日 2D区現場空中撮影
- 8月3日 2F区、2C区、2G区掘り下げ
- 8月28日 2D区遺跡現地説明会開催
- 9月9日 2D区現地調査終了
- 9月22日 1H区で木造仏手（第13図3図版1、14）出土
- 11月7日 1H区、1I区遺跡現地説明会開催
- 12月17日 1I区木製鋤未成品出土（第19図及び第38図1図版22）
- 12月22日 浜寄・地方遺跡現地調査終了
- 2月3日、2月7日、2月14日ののべ3回にわたって浜寄・地方遺跡砂丘上住宅地部分（益田市高津三丁目）工事中立会調査実施。遺構遺物等検出されず。

第3節 整理作業の概要

整理作業及び報告書の作成は、平成17・18年度に行った。注記作業と種別ごとの分類については、現地調査と並行してできたものもあったが、島根県松江市打出町33番地に所在する島根県教育庁埋蔵文化財調査センターに持ち帰った遺物について以下の整理作業を行った。

出土遺物の大半は土器・陶磁器類で、各区ごとに未注記のものについては注記を行い、注記済みの遺物から種別、器種ごとに分類し、接合作業を行った。接合したもののうち補強が必要なものについては補強剤を用いて補強を施し、復元可能なものについては復元作業を行った。

実測にあたっては、小破片であったり、全体の器形が復元できないもの以外は、特徴的なものの抽出を行い、それらについて基本的に実測を行うこととしたが、時間の関係上それらすべての実測には至っていない。また、特徴的な文様や調整を施したもの、実測図において明瞭に表現できないものなど数点については拓本をとり拓影を掲載した。完成した実測図については、トレース作業を行い、実測が終了した遺物については実測番号を付し、調査区ごとに遺物観察表を作成した。

実測を終えた時点で、完形もしくは接合、復元できたもの、あるいは特徴的なものについては、必要に応じて写真撮影を行った。

上記の一連の作業を終えた遺物については、最終的に実測台帳に記載して収蔵した。

第4章 基本層序

基本層序

ここでは浜寄・地方遺跡で確認された基本的な層序について述べたい。

本遺跡における層序は、調査区の分断によって各区画の土層堆積状況の関連が不明確な部分が存在するものの、次のように考えられる。以下、主な土色、出土遺物の傾向について、上層から基本1層、基本2層の順に概略を記す。なお、浜寄側と地方側とでは基本的な層序に違いが見られることから、ここではそれぞれに分けて記述することとする。

－地方側（1区）の基本層序－

1区の基本層序は以下のとおりである。ただし、1A区についてはその状況が若干異なっており、該当しない。

基本1層－主に灰色系の粘質土

約30～40cmほど堆積している。色調の違いから上層（現在の水田耕作土）と下層（圃場整備以前の層か）とに分層が可能である。肥前系の陶器・磁器類及びそれ以降のものが出土しており、近世から現代にかけての層と考えられる。基本的に1層については重機により掘削した。

基本2層－主に灰白色系の粘質土

約20～30cmほど堆積している。キメの細かい砂を含んでおり、過去の洪水に由来すると考えられる層である。奈良・平安～近世にかけての遺物が出土しているが、中世前半までの遺物の割合が高く、そうした時期の層と判断される。

基本3層－主に黒色系の土

約20～30cmほど堆積している。2層に比べてかなり黒味がかっており、土壌化を窺わせている層である。3層からは弥生時代～古墳時代にかけての遺物が出土しているが、特に古墳時代の遺物が多く出土している。

基本4層－主に灰色系の砂

約10～20cmほど堆積している。この層も2層と同様に過去の洪水に由来する層と考えられる。なお、1C・1D区ではこの層の存在が確認できない場所も存在した。基本的に4層からは遺物が出土していない。

基本5層－主に黄色系の土

約10～15cmほど堆積している。上面では酸化マンガンや鉄分の沈着がみられる。水田検出面に当たる。なお、1F区ではこの層の存在が確認できない場所も存在した。5層以下の層については遺構・遺物とも検出されなかったため調査を行っていない。これより以下は基本的に6層（暗褐色系の土）、7層（黄褐色系の土）と続き、標高1.1m地点で非常に粘性の強い層となる。

基本1層
主に灰色系の粘質土
基本2層
主に灰白色系の粘質土
基本3層
主に黒色系の土
基本4層
主に灰色系の土
基本5層
主に黄色系の土
基本6層
主に暗褐色系の土
基本7層
主に黄褐色系の土
基本8層
粘土

第6図 土層概念図（1区）

—浜寄側（2区）の基本層序—

2区の基本的な層序は以下のとおりである。

基本1層—主に褐色系の土

約20cm堆積している。肥前系の陶器・磁器類及びそれ以降のものが出土しており、近世～現代にかけての層と考えられる。調査前は畑などとして利用されていた。基本的に1層については重機により掘削した。

基本2層—主に暗褐色系の土

最大で20cm堆積している。ところどころに小礫を含む層で、中世～近世にかけての遺物が出土しているが、中世の遺物の割合が高く、中世頃の層と判断される。

基本3層—主に暗褐色系の土

最大で20cm堆積している。ところどころに小礫を含む層で、中世～近世にかけての遺物が出土している。2層同様中世の遺物の割合が高く、中世頃の層と判断される。なお、2層・3層は、調査当初土色の違いから別のものとして認識していたが、両層の内容に大差はなくほぼ同時代と考えられる。以下、2区においては2・3層として記す。

基本4層—主に灰色系の砂質土、礫、砂

約50～60cmほど堆積している。過去の洪水に由来すると考えられる層で、礫と砂から構成される。場所によっては約1m堆積しているところもあった。主に古墳時代～平安時代にかけての遺物が出土している。

基本5層—主に黒褐色系の砂質土

約20～30cmほど堆積している。キメの細かな砂質状の土で、土壌化がやや進んだ状況を示す層である。古墳時代の遺物を多く含むが、須恵器は認められず、基本的に古墳時代前期～中期にかけての層と判断できる。

基本6層—主に黒色系の土

約10～20cmほど堆積している。調査当初は1つの別の層と判断していたが、実際には流路跡を覆う埋土部分に相当する。年代的には5層と大差のない層と判断できる。

以上1区・2区における基本的な層序について概要を示したが、実際には、細部は各区によってそれぞれ異なっている。したがって、それぞれの調査区における土層については別途記述している。

基本1層 主に褐色系の土
基本2層 主に暗褐色系の土
基本3層 主に暗褐色系の土
基本4層 主に灰色系の砂質土、礫、砂
基本5層 主に黒褐色系の砂質土
基本6層 主に黒色系の土
基本7層 礫層

第7図 土層概念図（2区）

第5章 1区の調査

第1節 1H区の調査

1H区の遺構について

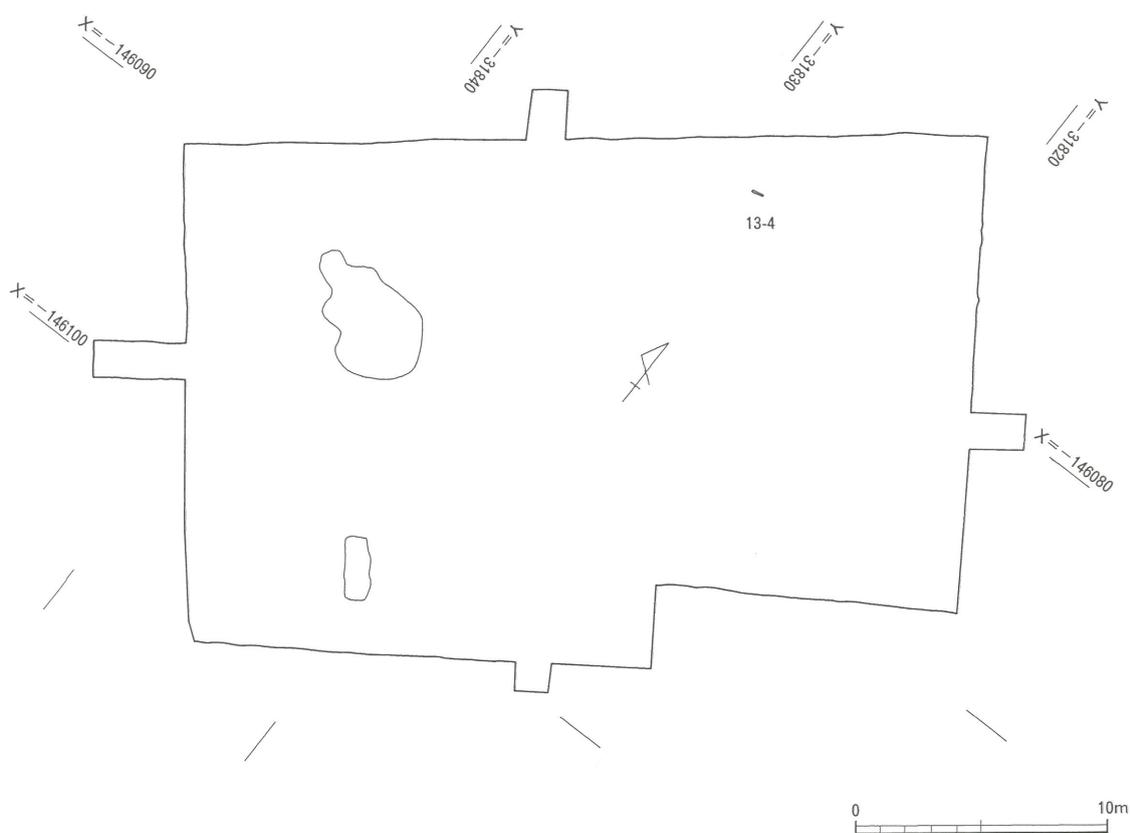
H区で調査区内の東寄りでは南北方向に連なる幅の広い流路跡のような落ち込みが検出された（写真図版3）。また、西寄りでは古墳時代中期のものと思われる土器溜りが2か所検出された。第8図及び第10図において実線で示したものが土器溜りの範囲である。大きいほうは長さ6m、幅3.5m、小さいほうは長さ2.5m、幅1mをそれぞれ測る。層位としては第9図土層図の7層以下、第6図土層概念図（1区）では基本3層にあたる。出土遺物は第11図2～5に挙げた土師器である。1C区及び1D区で検出されたものと同種の土器溜りと思われる。

1H区の出土遺物について

弥生土器（第11図1 図版12） 複合口縁の甕が1点出土している。口縁部は長く外傾し、外面には櫛状工具による平行文が施されている。石見V-3様式と考えられる。

土師器（第11図2～5 図版12） 2は単純口縁の甕で、口縁部は外反し、肩部が張る。4は高杯で、脚端部が大きく開く。5は口縁部が内湾する碗である。口縁部付近はヨコナデ調整だが、以下は粗い削り調整が施される。内面には工具の圧痕がある。これらは、古墳時代中期と考えられる。

3は底部に円形の台を付ける小形土器で、器種不明である。口縁部は逆円錐形に開くと思われる。時期不詳だが、胎土・焼成等が2・4・5に似ており、古墳時代の可能性がある。



第8図 1H区遺構配置図（S=1/300）

須恵器（第11図6 図版12） 壺の胴部から底部にかけての破片である。底部は平底で、内外面ともに叩き痕などはみられない。胴部外面には間隔が疎の平行叩き痕が斜方向に、内面には幅広で疎な同心円当て具痕が、比較的丁寧な付けられている。平安時代のもと考えられる。

白磁（第11図7 図版12） 碗IV類が1点出土している。11～12世紀頃のものである。

青磁（第11図9～11 図版12） いずれも外面に鎬連弁を描く龍泉窯碗I類である。13世紀前半のものである。

瓦質土器（第11図12 図版12） 口縁部が玉縁状に肥厚する鉢である。硬質だが、下半に若干土師質を残す。

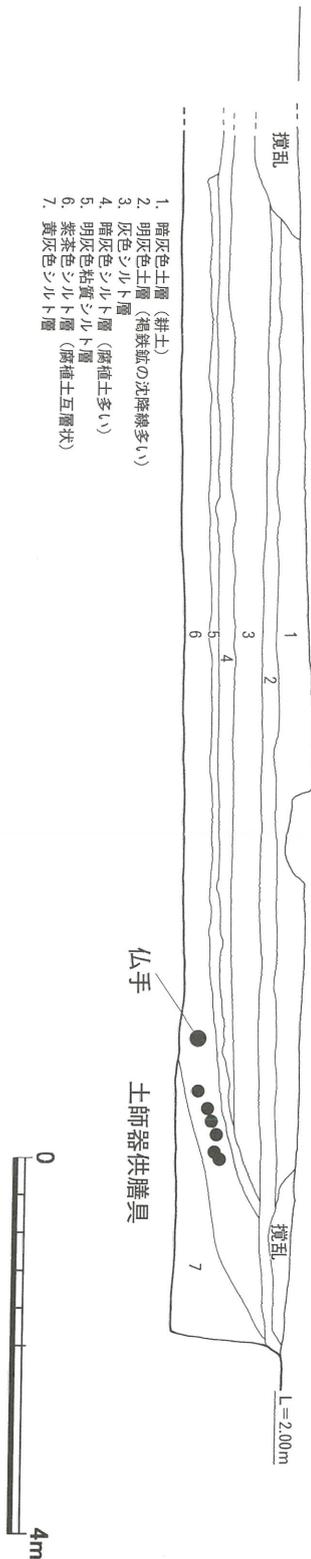
近世陶磁器（第11図8・13～16 図版12）

13は陶器甕、8は陶器碗、14は磁器碗、15～16は磁器皿で、いずれも肥前系の陶磁器である。13は胴部内外面に格子叩き痕を残し、底部は無釉。16は内面全面に釉がかかることから17世紀と考えられる。14・15は内面の釉を一部掻き取っており、17～18世紀のもと考えられる。8は胎土がきめ細かで、やはり17～18世紀のものと思われる。

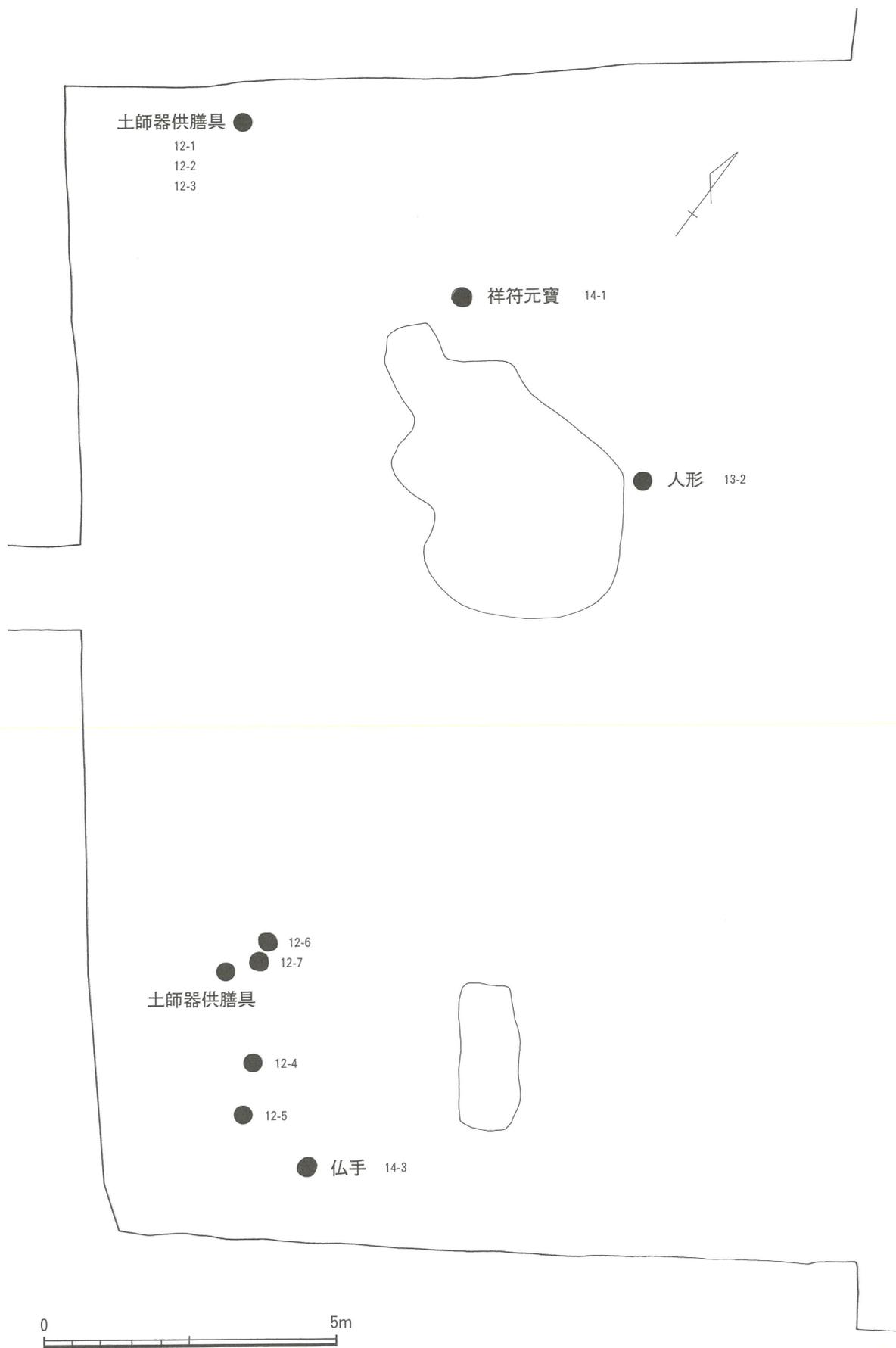
土師器供膳具（第12図 図版13） 1～6は無高台の坏で、いずれも口縁下半は内湾・上半は外反する器形である。底部はいずれも回転糸切り痕を残す。6は回転糸きり痕の後に平行線状の痕跡がみられる。これは、簾状の調度の上に置かれた時点についての圧痕と観察される。

7・8は足高高台の坏である。7の底部外面には糸切り痕（静止？）が観察されるが、8の切り離しは不明である。7の口縁部は直線的に大きく開き、外面には沈線が5～6条付けられている。12世紀中葉～後葉のもと考えられる。

木製品（第13図 図版1及び13～14） 1は漆塗りの碗である。口縁部は内湾し、内外面とも漆が塗られている。底部外面は剥落痕があ

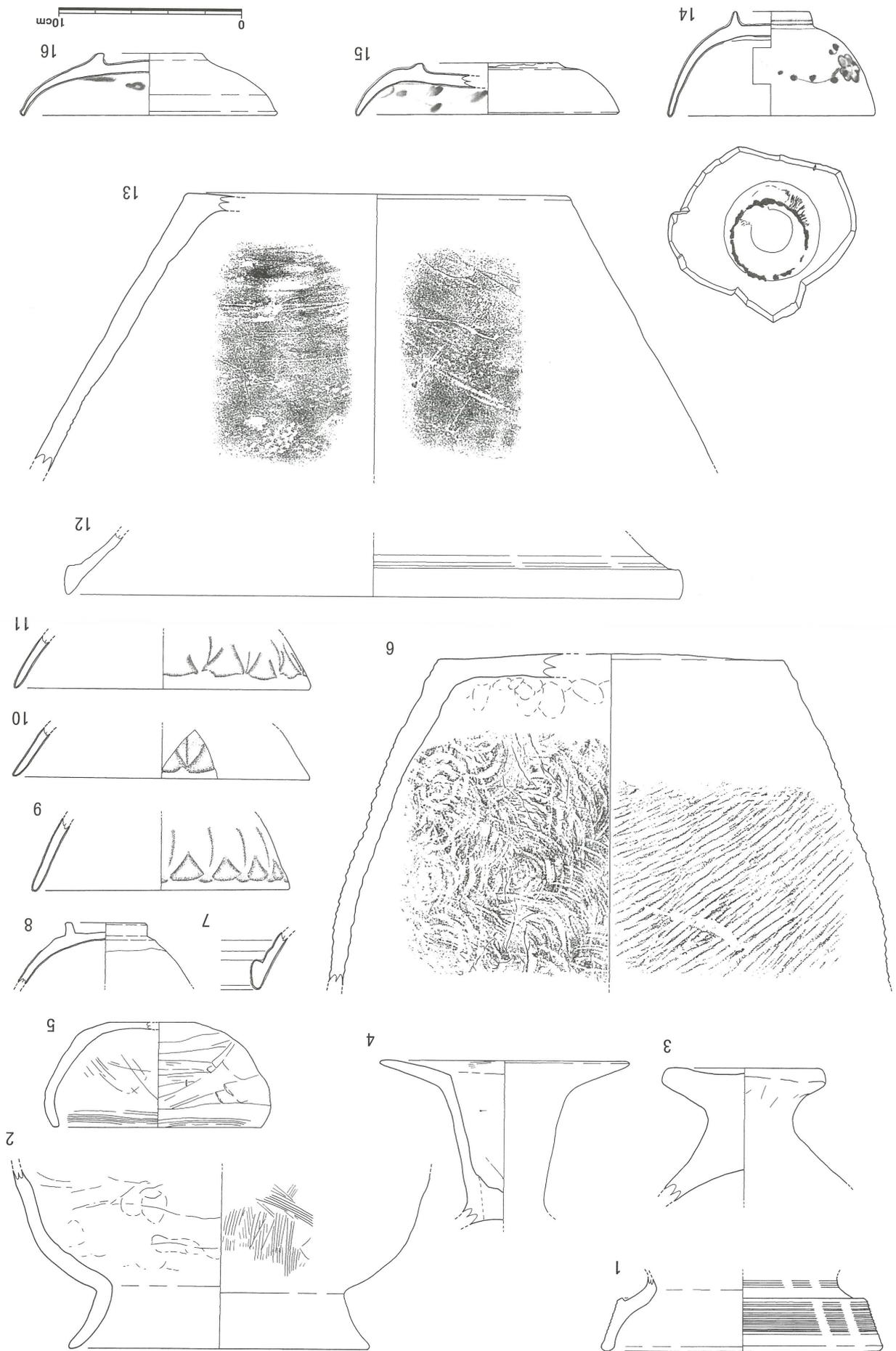


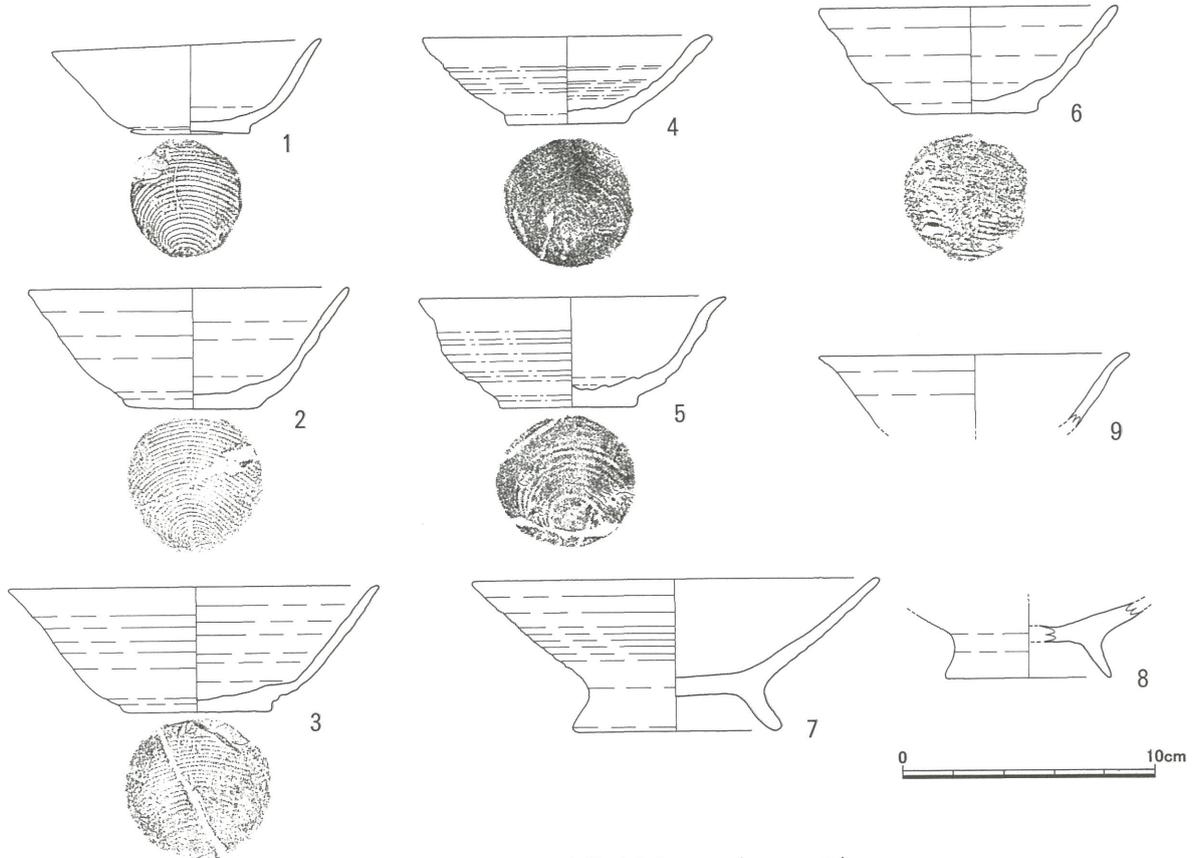
第9図 1H区南壁土層断面実測図 (S=1/80)



第10図 1H区主要部遺物出土状況平面図 (S=1/100)

第11图 1H区出土遺物実測図1 (S=1/3)





第12図 1H区出土遺物実測図2 (S=1/3)

り、本来は高台が付けられていたと推定される。口縁内外面にロクロ目が観察される。

2は人形と考えられる。図示した面は平坦に加工され、この反対の面は凸レンズ状に膨らんでいる。上部と下部に挟りが入れており、図の左側縁は緩やかに曲線を描く。同右側縁は若干欠損しているように観察され、本来は左右対称の形だったと推定される。図示した面の上部挟り部分には2条の線刻が施されている。反対面と下端小口面は摩滅が著しく、木目が浮き出ている。

3は仏像の左手の部分である。親指と中指の先端を結び、他の指を伸ばすように形作られている。手首には腕釧が表現されていることから、菩薩形の可能性が高いという。また、下端には臍が作り出されており、ここで接合されるべき部位であることがわかる。本例は腕釧や指先、掌など、細部の表現が仕上げ切れていないことから、未成品と考えられる。

古銭 (第14図) 「祥符元寶 (初鑄1008年)」、「元祐通寶 (初鑄1086年)」、「嘉祐元寶 (初鑄1056年)」が各1点出土している。

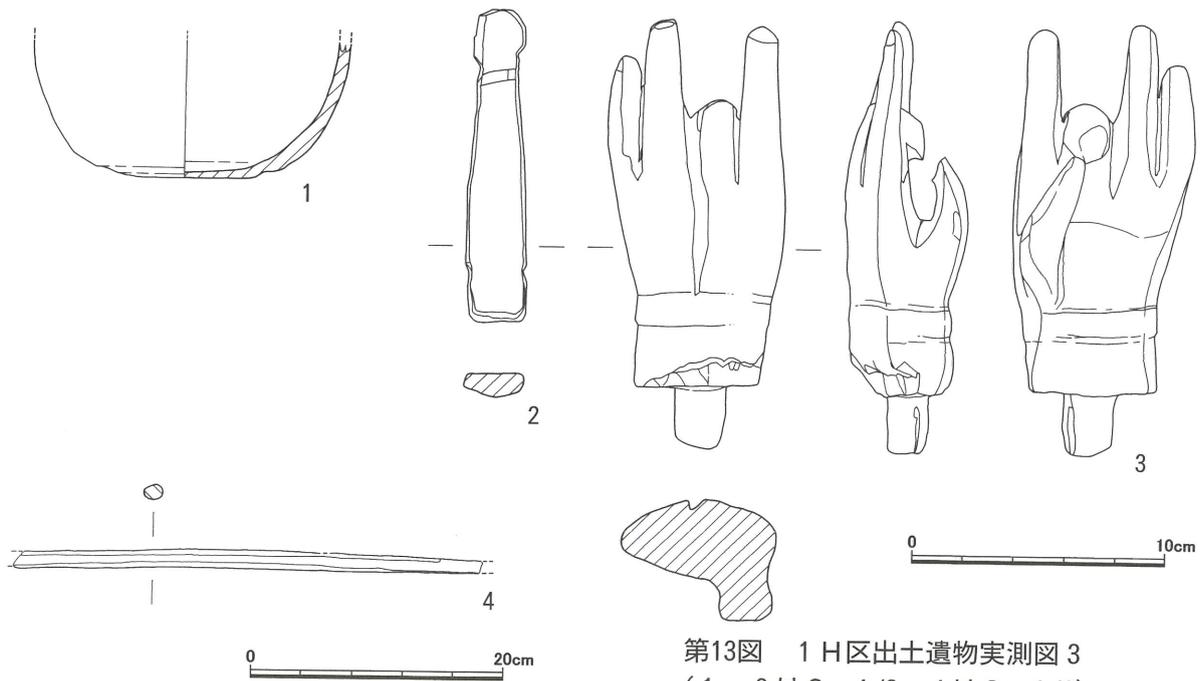
1H区出土木造仏手の出土について

木造の仏手が出土している。遺構には伴っていない。1H区6層 (基本2層) から出土している。

同じ土層から出土した土器は12世紀中葉から12世紀後半のものと考えられるので仏手の埋没時期もそれ以後のことと考えられる。

木造仏手の概要

- ・第1指と第3指で輪を作る仏像の手先である。ただし第3指は第1関節から先を失っている。
- ・腕の先にはめ込むためのほぞがある。
- ・全長はほぞも含めると17.3cm (ほぞの長さは2.4cm)、幅約6.7cm、厚さ4.8cmを測る。
- ・腕釧 (わんせん=プレスレット) が表現されていることから菩薩像の手先であると考えられる。



第13図 1H区出土遺物実測図3
(1～3はS=1/3、4はS=1/6)

・指は細く表現されており、第2指に明瞭な爪の表現が見られる。掌は肉厚に彫出されている。
この木造仏手からわかること

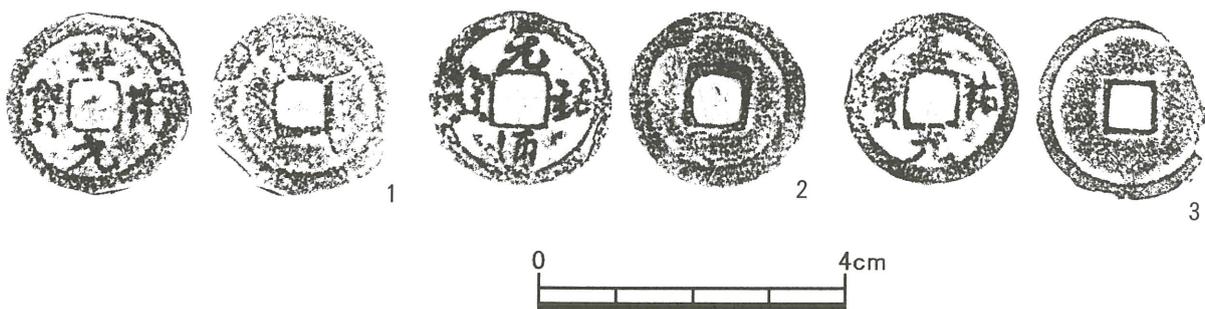
手の甲側の腕釦の立体的な表現が完遂されていない形跡があり、腕釦を制作する過程で何かがおこり、仏手自体の制作を中止した可能性がある。指が細く、掌（たなごころ）が肉厚に表現されていることから、木造仏手が鎌倉時代前後の作風と大きくは異なることがうかがえる。仏像において手先はしばしば欠失してしまい、後の時代に新しいものが取り付けられることがあるが、この仏手も補修のために制作された可能性もある。

木造仏手出土の意義

指が細く掌が厚いなど製作の様式からうかがわれる製作年代と、出土状況から推定できる年代が平安時代末～鎌倉時代にかけてということでおおむね一致している。また、技法的には表現がかなり硬く、中央で活躍していた仏師達の作る手先とは感覚が異なるなど、地方（ちほう）で活動する仏師の存在がうかがわれる。益田市大草町東陽庵^{とうようあん}には、地方仏師とされる蓮法作延慶四年（1311年）銘木造薬師如来坐像があり、鎌倉時代の仏像彫刻が現在に伝えられている。もとより、今回の木造仏手とこの仏像との関係はうかがいしれないが、浜寄・地方遺跡で木造仏手が出土したことにより、益田の地で地方仏師の手による仏像の製作が行われていたことが裏付けられた⁽¹⁾。

註

(1) 木造仏手の鑑定等については島根県芸術文化センター学芸グループ課長の野克之氏の指導、教示を得た。



第14図 1H区出土銭貨拓影（等倍）

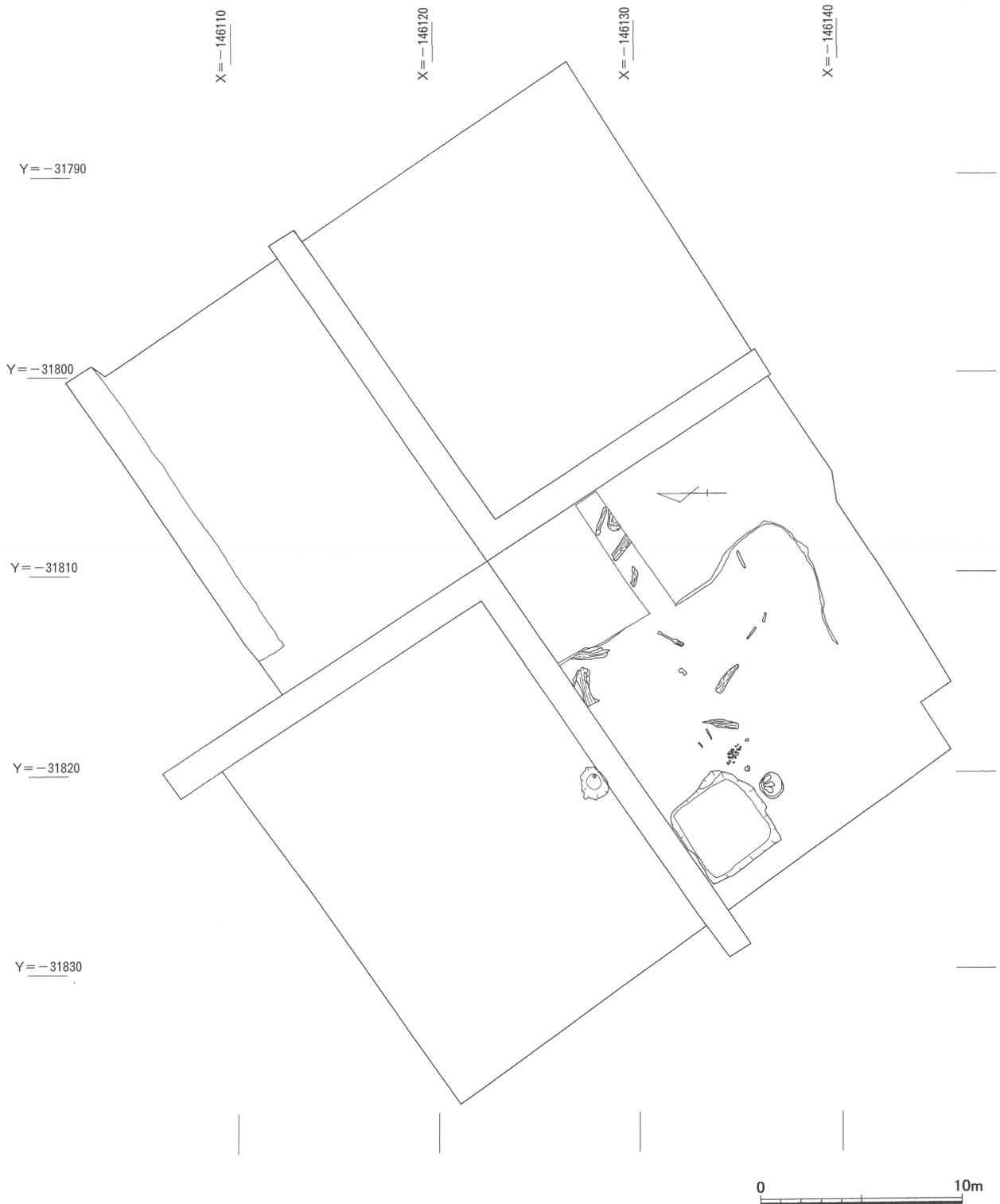
第3表 1H区出土遺物観察表

挿図番号	図版番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
11-1	12	弥生土器	甕	1H区	6層	14.8	(4.1)		口縁部、頸部に擬凹線文	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ケズリ	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	外 におい黄橙～褐灰 内 におい黄橙	石見V-3
11-2	12	土師器	甕	1H区	4層	16.2	(9.8)			外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、指押圧の後指ナデ	1mm程度の砂粒を多く含む	やや不良	外 におい褐～灰褐～黒褐 内 におい褐～灰褐	古墳時代中期
11-3	12	土師器	台付鉢	1H区 土器溜り	6層		(7.3)	8.2	円形台	外：ナデ 内：ナデ、ハケメ	1mm未満の砂粒を僅かに含む	やや不良	外 におい褐～灰黄褐 内 におい黄橙～赤	底部外面に赤彩 古墳時代
11-4	12	土師器	高坏	1H区 土器溜り	6層		(9.0)	13.6		外：ヨコナデ 内：ナデ、ヘラケズリ、ハケメ	1mm未満の砂粒を含み、1～3mmの砂粒を僅かに含む	やや不良	外 淡橙～浅黄橙～橙 内 浅黄橙～橙	古墳時代中期
11-5	12	土師器	碗	1H区	6層	11.2	5.8	4.6	口縁内湾	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	1mm程度の砂粒を多く含む	良好	におい橙	古墳時代中期
11-6	12	須恵器	壺	1H区	3・4層		(18.3)	19.0		外：同心円状タタキ、ナデ 内：タタキ、ナデ、ナデ後指押圧痕	1mm程度の砂粒を多く含む	良好	灰白	平安時代
11-7	12	白磁	碗	1H区	3層				口縁部は玉縁状	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰白	IV類 断片資料
11-8	12	陶器	碗	1H区			(3.9)	4.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	外 におい黄橙～灰白～橙 内 灰白	外面に灰白色の釉薬
11-9	12	青磁	碗	1H区		15.9	(4.0)		鎬蓮弁文	外： 内：回転ナデ	密	良好	灰オリーブ	龍泉窯系 青磁碗I類
11-10	12	青磁	碗	1H区	3層	16.2	(2.7)		鎬蓮弁文	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密。2mmの砂粒を僅かに含む	良好	灰オリーブ	龍泉窯系 青磁碗I類
11-11	12	青磁	碗	1H区		16.0	(2.9)		鎬蓮弁文	外： 内：回転ナデ	密	良好	明緑灰	龍泉窯系 青磁碗I類
11-12	12	瓦質土器	鉢	1H区	3層	33.4	(3.4)			外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm未満の砂粒を含み、2mmの砂粒を僅かに含む	良好	黄灰～黒	口縁のみ
11-13	12	陶器	甕	1H区			(15.4)	20.8		外：タタキ後ナデ、ナデ 内：タタキ後ナデ、ナデ	1mm程度の砂粒を僅かに含む	良好	外 褐灰～橙 内 褐灰	肥前系
11-14	12	磁器	碗	1H区		11.1	5.8	4.1	外面に梅花文様	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰白	内面に釉薬をかきとったような銀珠と碗を重ねて焼いた痕跡あり、肥前系
11-15	12	磁器	高台付皿	1H区	3層	14.2	2.9	7.6	内面に文様	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	外 明緑灰～橙 内 明緑灰～灰白	肥前系
11-16	12	磁器	高台付皿	1H区		13.8	3.5	5.8	内面に文様	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	明緑灰	肥前系
12-1	13	土師器	坏	1H区	6層	10.6	3.9	4.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密。2mmの砂粒を含む	良好	外 灰黄 内 浅黄	底部は回転糸切り 12C中～後葉
12-2	13	土師器	坏	1H区	6層	12.6	4.9	5.3		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	外 灰黄 内 におい黄橙	底部は回転糸切り 12C中～後葉
12-3	13	土師器	坏	1H区	6層	14.5	5.1	5.9		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mmの砂粒を僅かに含む	良好	浅黄	底部は回転糸切り。 内面に赤彩 12C中～後葉
12-4	13	土師器	坏	1H区	6層	11.6	3.6	4.7		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	におい黄白	底部は回転糸切り 12C中～後葉
12-5	13	土師器	坏	1H区	6層	12.2	4.5	5.3		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1～2mmの砂粒を含む	良好	におい黄褐	底部は回転糸切り 12C中～後葉
12-6	13	土師器	坏	1H区	6層	11.6	4.3	5.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mmの砂粒を少量含む	良好	外 灰黄褐 内 におい黄橙	底部は回転糸切り、 圧痕あり 12C中～後葉
12-7	13	土師器	高台付坏	1H区	6層	15.9	6.1	7.8		外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ	1mmの砂粒を僅かに含む	良好	におい黄橙～灰黄	静止系糸切？ 12C中～後葉
12-8	13	土師器	高台付坏	1H区	6層		(2.9)	6.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mmの砂粒を僅かに含む	良好	におい黄橙	
12-9	13	土師器	坏	1H区	6層	12.2	(2.9)			外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	淡黄	外面に煤付着
13-1	13	木製品	漆碗	1H区	3層		(5.5)	5.5	樹種					内外面に漆
13-2	13	木製品	人形	1H区	7層	長さ 12.5	幅 2.4	厚さ 2.0	樹種					
13-3	1,14	木製品	仏手	1H区	6層	長さ 17.3	幅 6.7	厚さ 4.8	樹種					仏像の手先
13-4	13	木製品	棒状	1H区	6層	長さ 36.9	幅 1.5	厚さ 1.3	樹種 ヒノキ					棒状

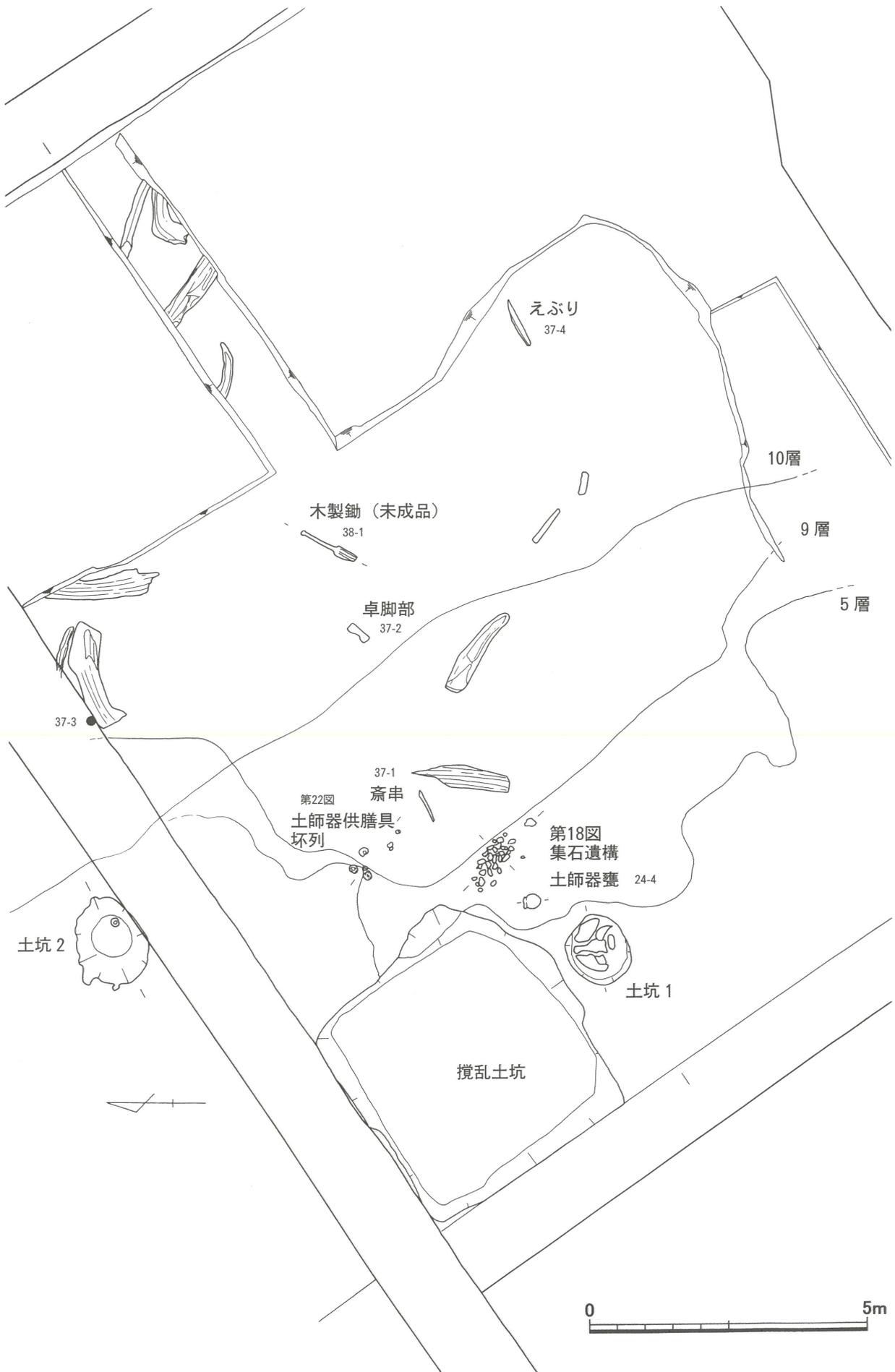
第2節 1 I 区の調査

1 I 区の様相について

調査区の東寄りに南北に延びる流路跡と思われる落ち込みが1 H区から続いている。この落ち込みは第17図に示す土層図の5層以下、基本3層を引き込んでいると見られ、沼沢地あるいは流路の痕跡をとどめているものと思われる。基本2層以上は平行に堆積する様相を見せているが、基本3



第15図 1 I 区遺構配置図 (S=1/300)



第16図 1 I 区主要部平面図 (S = 1/100)

層以下はこの流路あるいは落ち込みに向かって弛んでいく様相を見せている。この沼沢地の波打ち際あるいは浅瀬に遺構、遺物が集中する傾向にある。中世のある時期を境にこの沼沢地が陸地化されるなどして地形が大きく変化したようすが読み取れるのではないだろうか。

1 | 区の遺構について

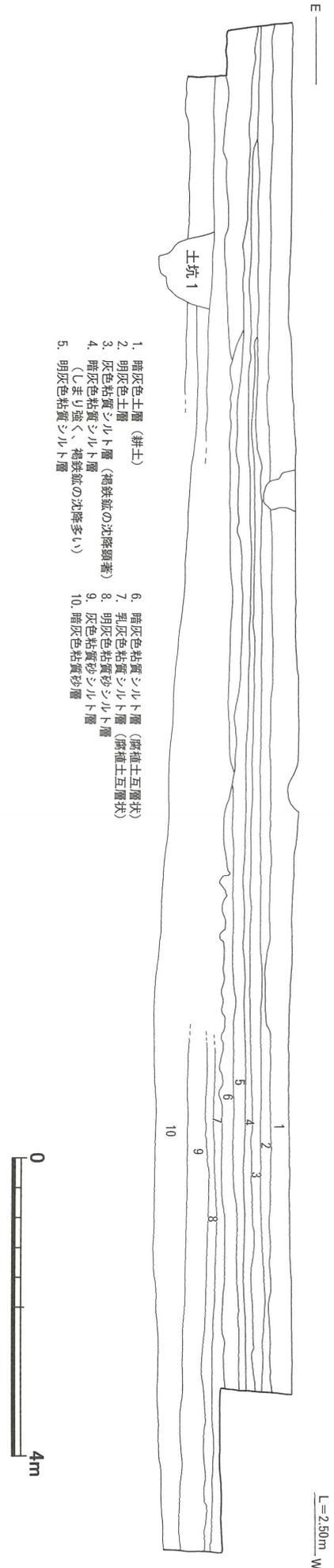
古墳時代から奈良時代までのものと思われる不定形な土器溜り1か所、古墳時代後期のものと思われる集石遺構1基、11世紀から12世紀前半のものと考えられる土坑1基（土坑2）、その他の土坑1基（土坑1）などを検出した。

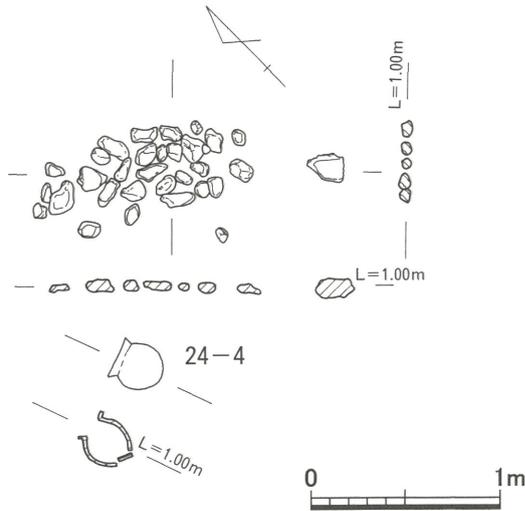
土器溜り（第15～16図及び第19図 図版6下及び10～11） 調査区の南西部分で不定形な土器溜り1か所を検出した。第16図に示した範囲である。湧水が激しく正確な様相を確認することは困難と思われた。1 C区、1 D、1 H区で検出された土器溜りと同じく祭祀跡とみられる。古墳時代中期から奈良時代までのものと思われる遺物を含んでおり、1 C区、1 D、1 H区で検出された土器溜りより存続期間が長いのではないかと考えられる。土師器甕壺類、甌、移動式竈などの容器貯蔵調理に関わる遺物、高坏等供膳関係、その他土師器、あるいは製塩土器、土錘等土製品、木器木製品など量、種類とも非常に豊富な遺物が出土している。倒木等が散在しており、洪水等で一気に埋没したようすがうかがえるのではないだろうか。

集石遺構（第16図及び第18図 図版11）

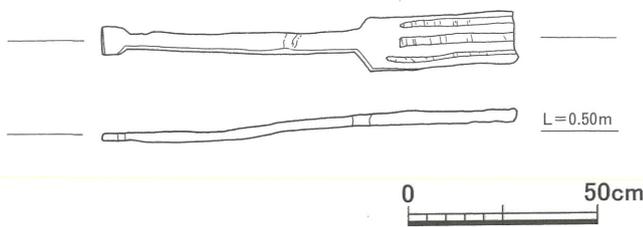
土器溜りの範囲のすぐ東側で古墳時代後期のものと思われる集石遺構を検出した。長さ1.65m、幅0.6mを測る。集石の下には土坑等は伴っていなかった。この集石遺構から0.6m東に第24図4に挙げた土師器甕が埋設され

第17図 1 | 区主要部東西方向土層断面実測図 (S=1/80)

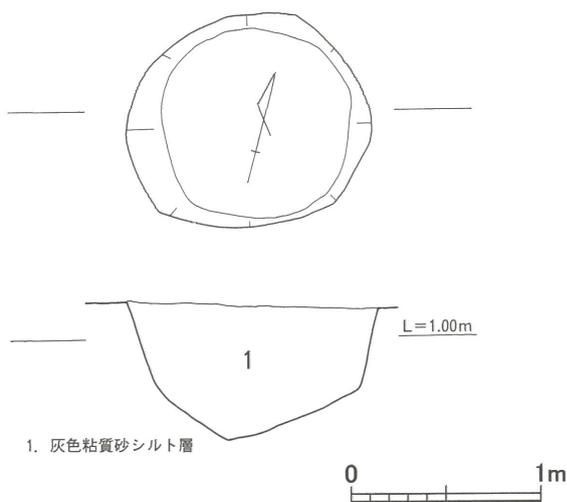




第18図 1 I 区土器出土状況及び集石遺構実測図
(S=1/40)



第19図 1 I 区木製鋤（未成品）出土状況実測図
(S=1/20)



第20図 1 I 区土坑1実測図 (S=1/40)

ていた。何かの関連があるものと思われる。

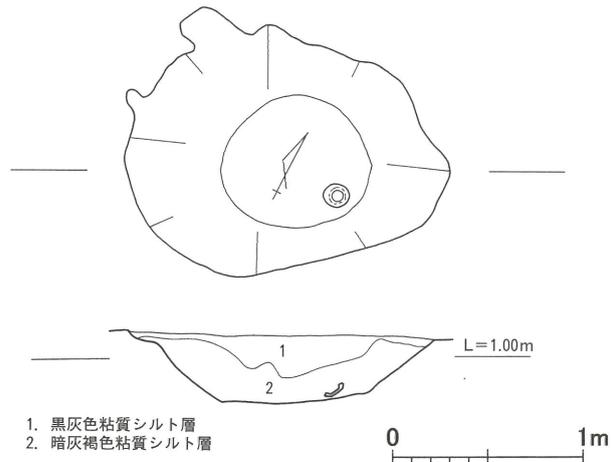
土坑1（第16図及び第20図 図版9）

土坑1は近接して埋め立てられていたような近年の農地に関わる造成の攪乱土坑とは違い、遺構であると思われるが、全く遺物が出土していない。規模や平面形状から見れば土坑2と同種のものと思われる。

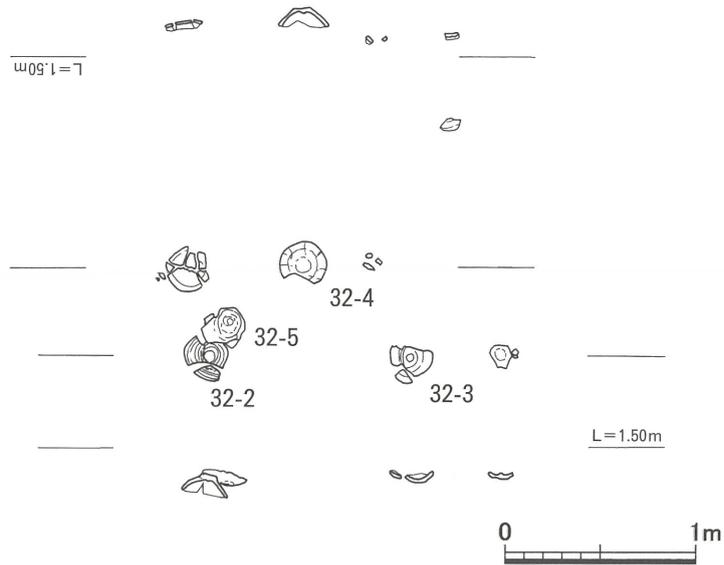
土坑2（第16図及び第21図 図版8）

土坑2の平面形は長径1.7m、短径1.35mを測るやや不整形な楕円形である。断面形は逆台形を呈する。底近くで第32図1に示した土師器坏が出土している。無高台の坏で、底部は回転糸切り痕が残る。口縁部が内湾する器形で、外面に凹線が施されないものである。この土師器坏は焼成が良好で、胎土中の砂粒が目立たない。色調についても他が白色系の中においてこの土器だけが赤色系であり、他の土器と様相が大きく違う。ほかの土師器坏が1 I 区5層以上の坏列や包含層から出土していることから比べると、これらの坏よりも古相を示していると思われる。土坑の時期もこれに従うものと考えられる。

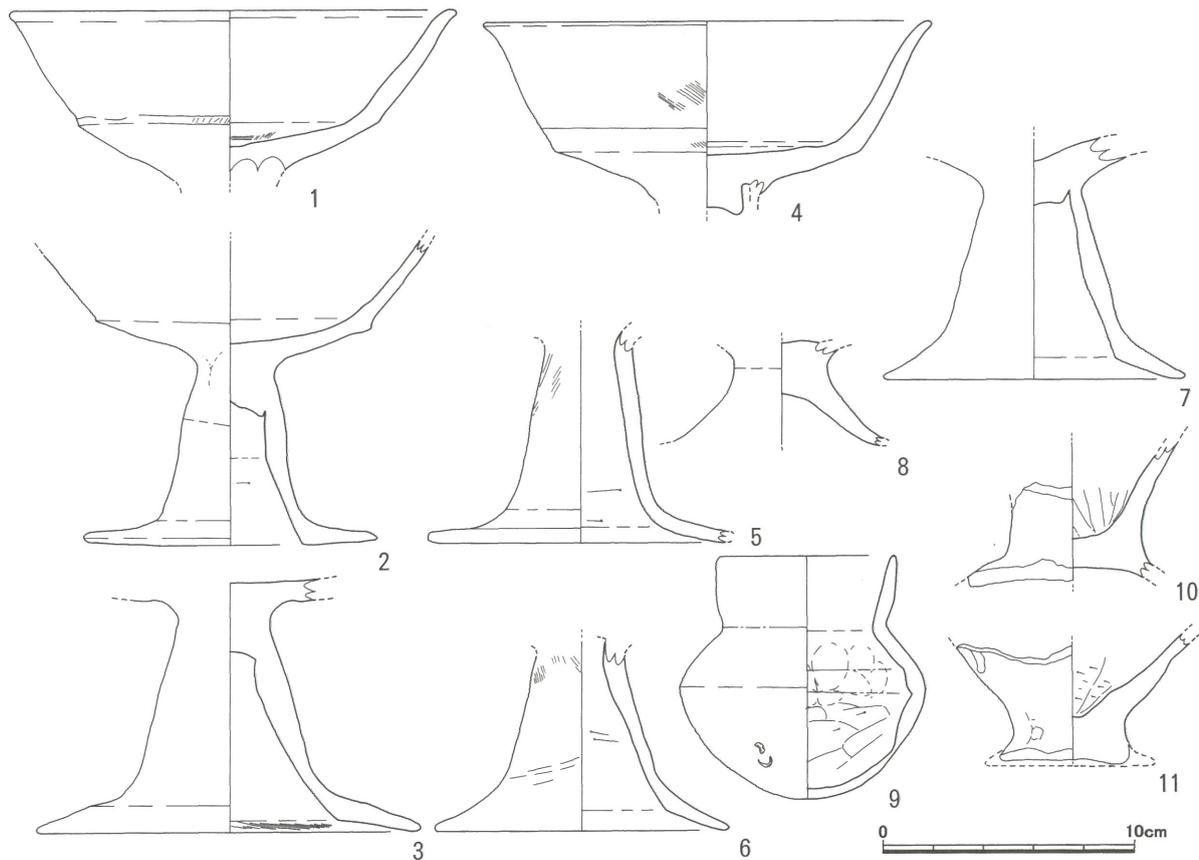
坏列（第16図及び第22図 図版10左上） 土坑1と土坑2の中間で土師器の坏列を検出した。第32図2～5に示す4点と図化できなかった破片1点の5個体分で構成されていた。それぞれ法量は微妙に違っているが、回転糸切痕を残す無高台で体部下半は内湾、上半～口縁はわずかに外反し、体部外面には幅広の凹線が巡るという共通の特徴を持つ。古市I期、11世紀後半～12世紀前半のものと思われる。



第21図 1 | 区土坑 2 実測図 (S = 1/40)



第22図 1 | 区土師器供膳具坏列実測図 (S = 1/20)



第23図 1 | 区出土遺物実測図1 (S=1/3) (土師器高坏、小形丸底壺、製塩土器)

1 | 区出土遺物について

土師器 (第23~26図 図版14~16) 第23図1~8は高坏である。坏部は中程で屈曲して稜を付け、口縁部は外反する(1・2・4)。脚部は端部近くで大きく開くものが多い(2・3・5~7)。8は「ハ」の字形に大きく開くもので、低脚の可能性もある。いずれも古墳時代中期のものと考えられる。

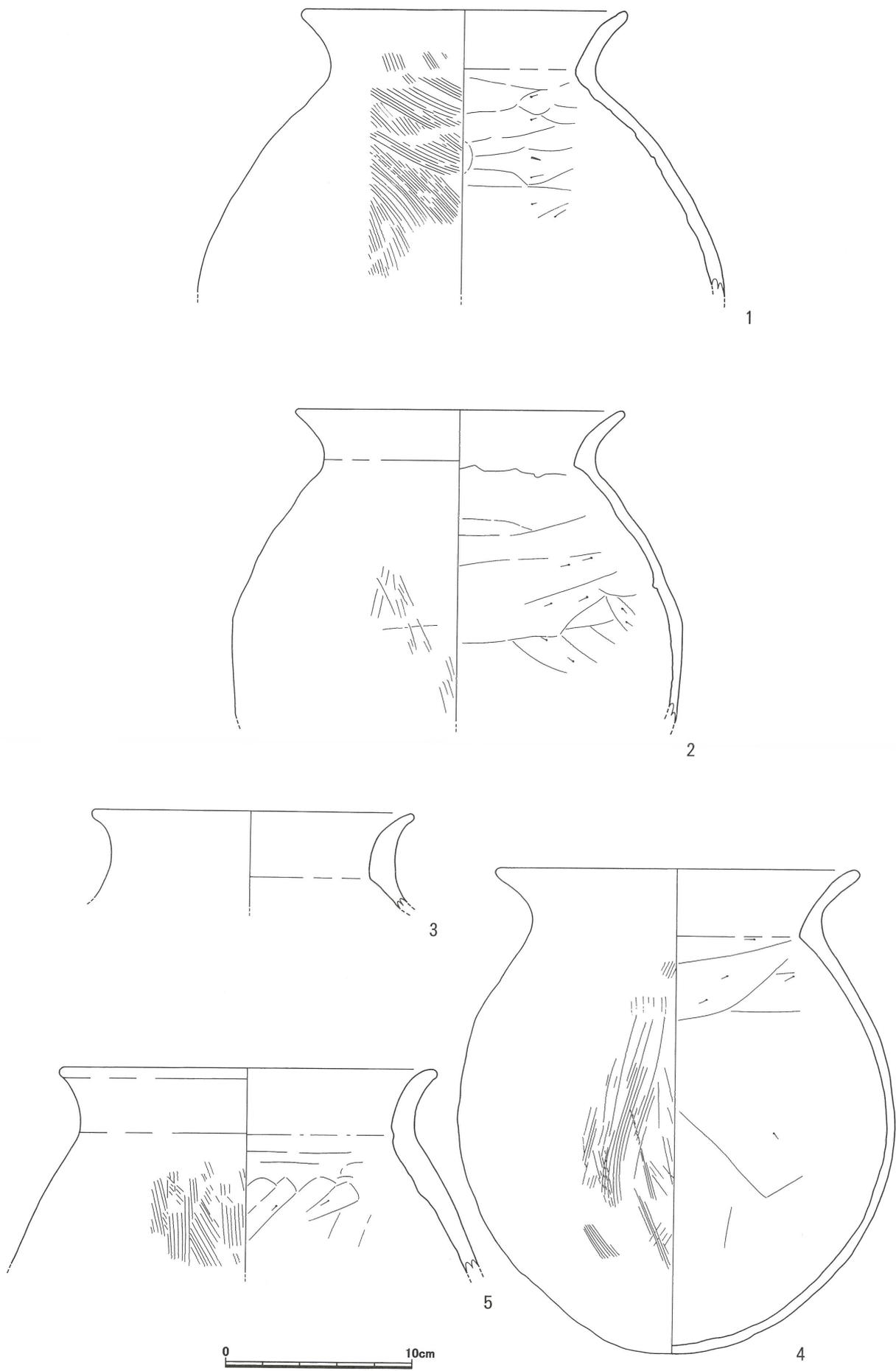
同図9は小形壺で、直立気味の口縁部である。口縁部下位でわずかに肥厚する。古墳時代中期のものと考えられる。

同図10・11は製塩土器と考えた。ともに底部が円盤状で、外側に大きく張り出す。内面は削り状の調整が施される。10の底面は凹面をなし、丁寧に調整される。10は高坏の可能性もある。

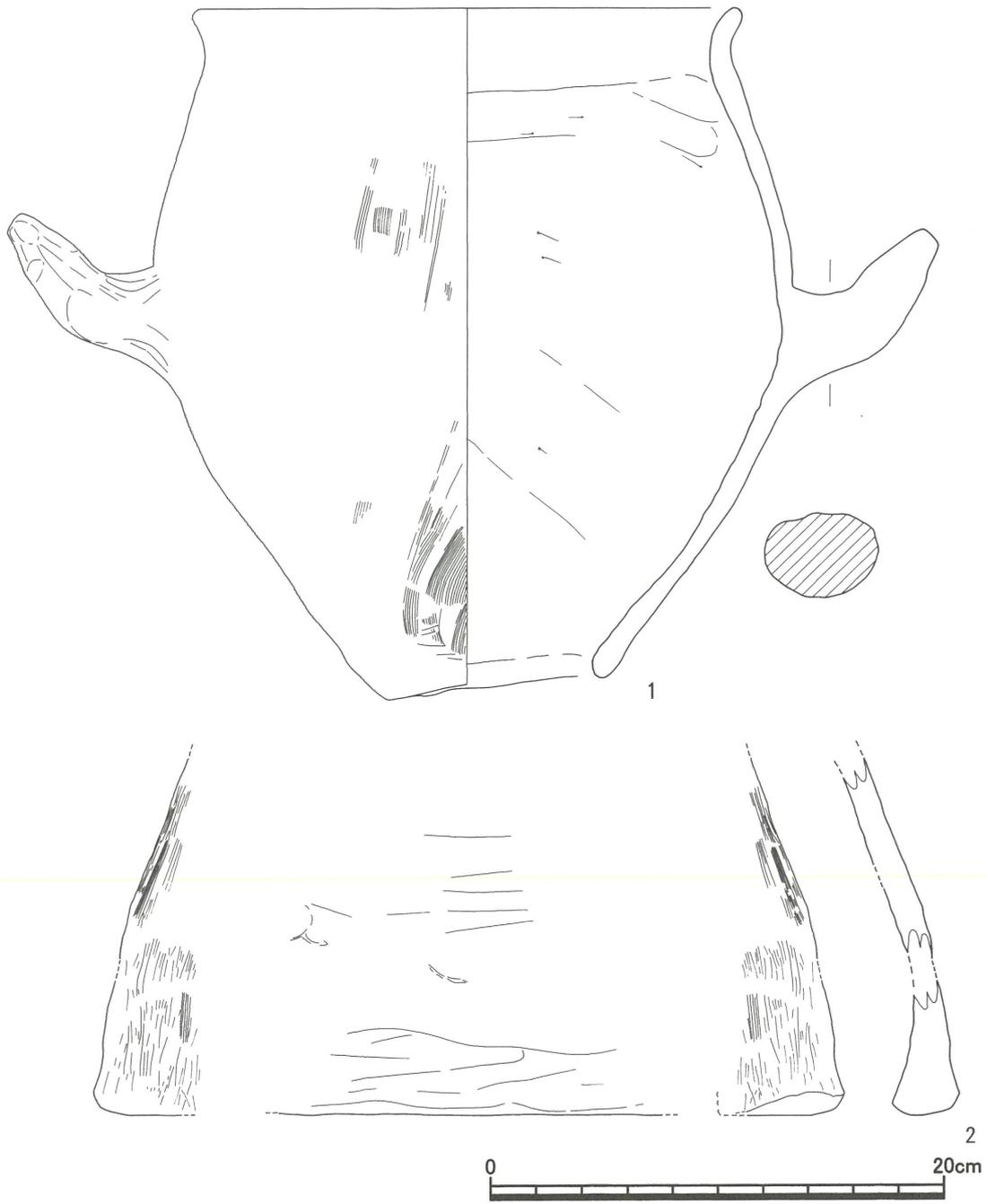
第24図は甕である。1・2・4は口頸部が屈曲し、口縁部が短く外反する。胴部は球形をなす。頸部の屈曲は比較的明瞭だが、外面弧状を描いており明瞭な「く」の字形には屈曲しない。3・5は頸部の屈曲がさらに緩い甕で、外面では口縁部と胴部の境界を捉えることができない。前者が古墳時代中期、後者が古墳時代後期から奈良時代のものと考えられる。

第25図1は甕である。口縁部は短く外反し、やや張り気味の胴部中央に把手を相対して付ける。底面は大きな円孔が1つ空くだけである。古墳時代後期から奈良時代のものと考えられる。

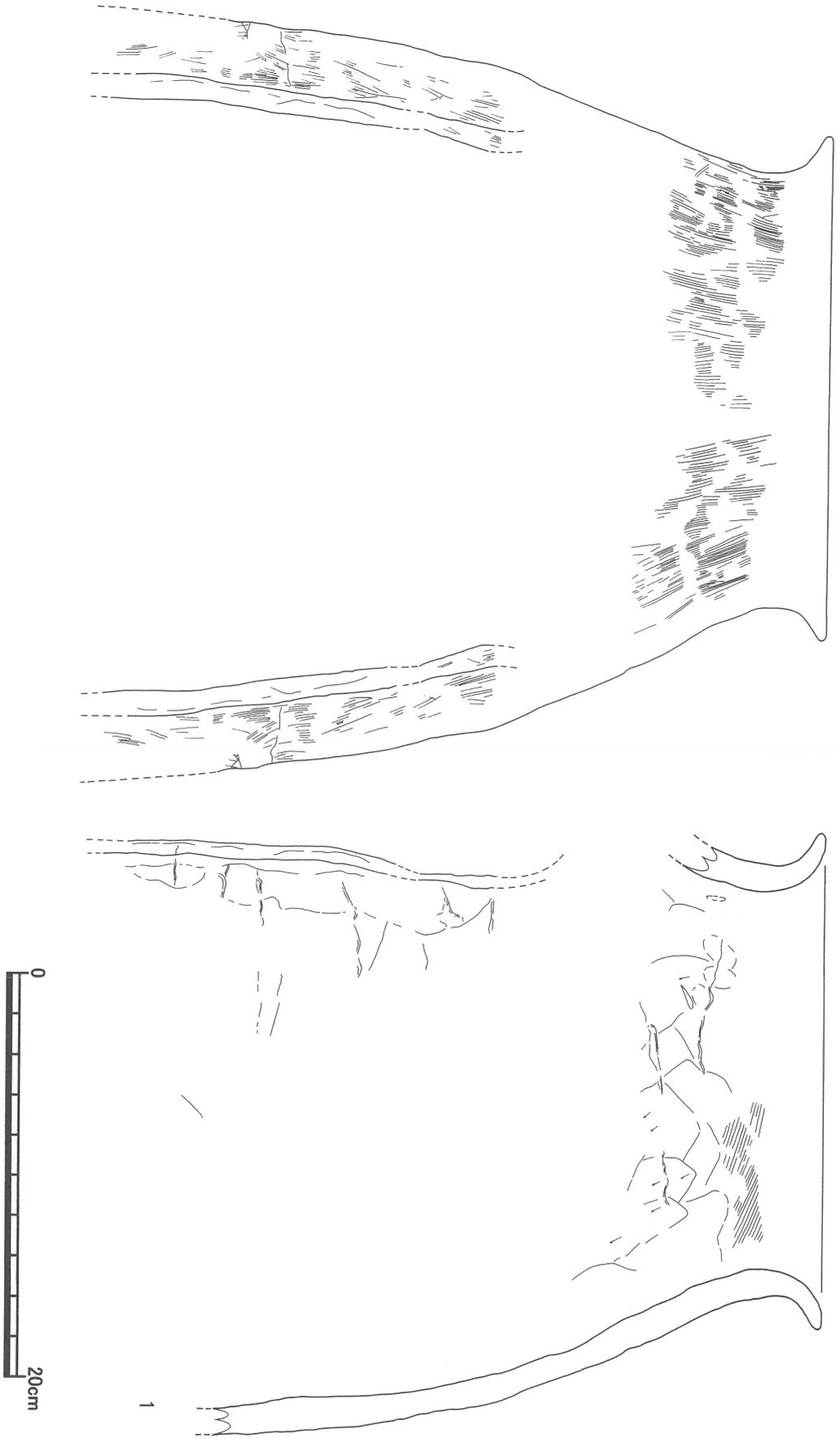
第25図2・第26図は甕である。ともに焚口に庇が付かない。口縁部は短く外反し、アーチ状に膨らみながら基底部に至る(第26図)。全体に器壁は厚く、基底部はとくに厚く作られている(第25図2)。古墳時代後期から奈良時代のものと考えられる。



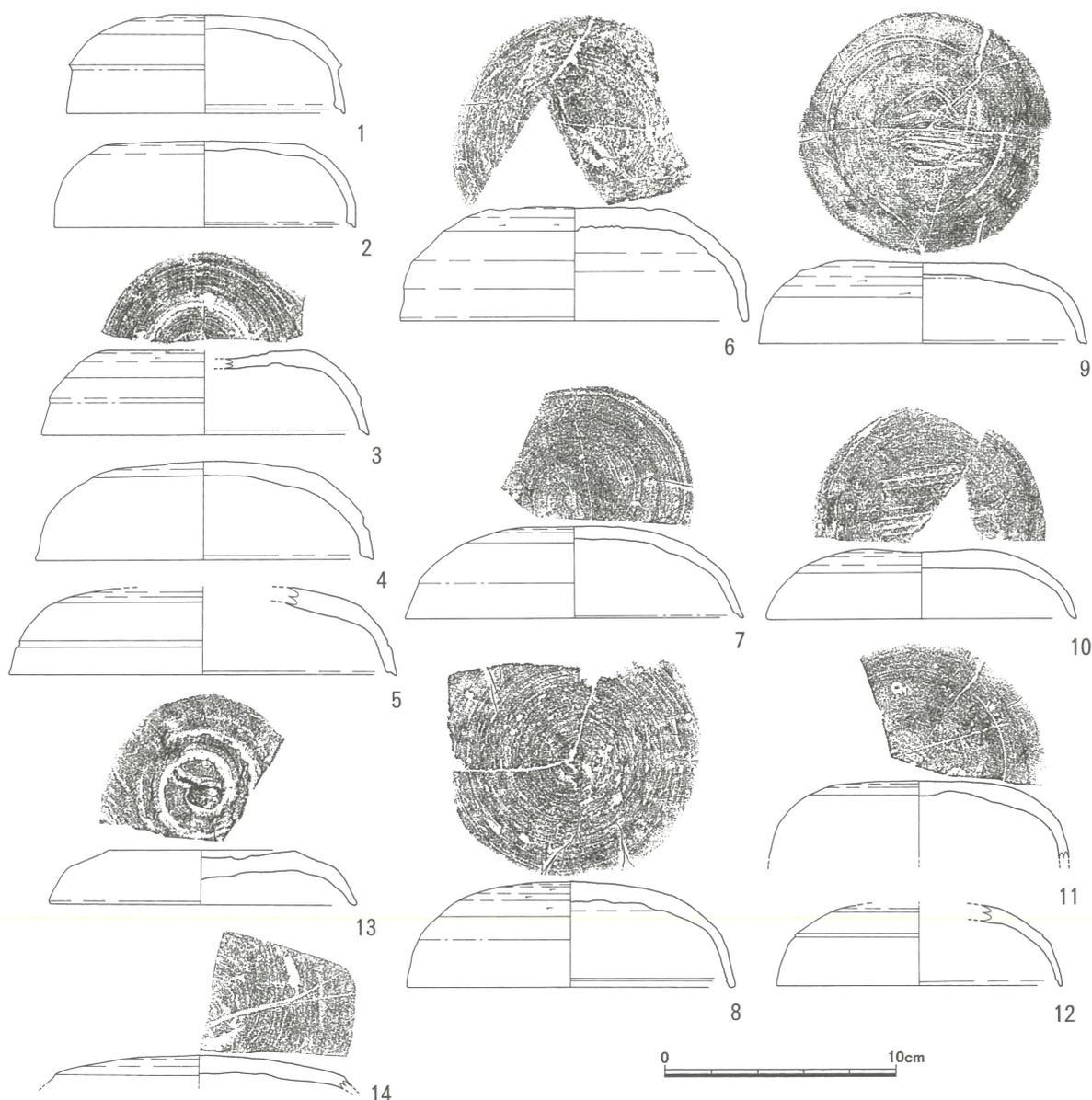
第24図 1 | 区出土遺物実測図2 (S=1/3) (土師器甕)



第25図 1 | 区出土遺物実測図3 (S=1/3) (土師器甌、移動式竈)



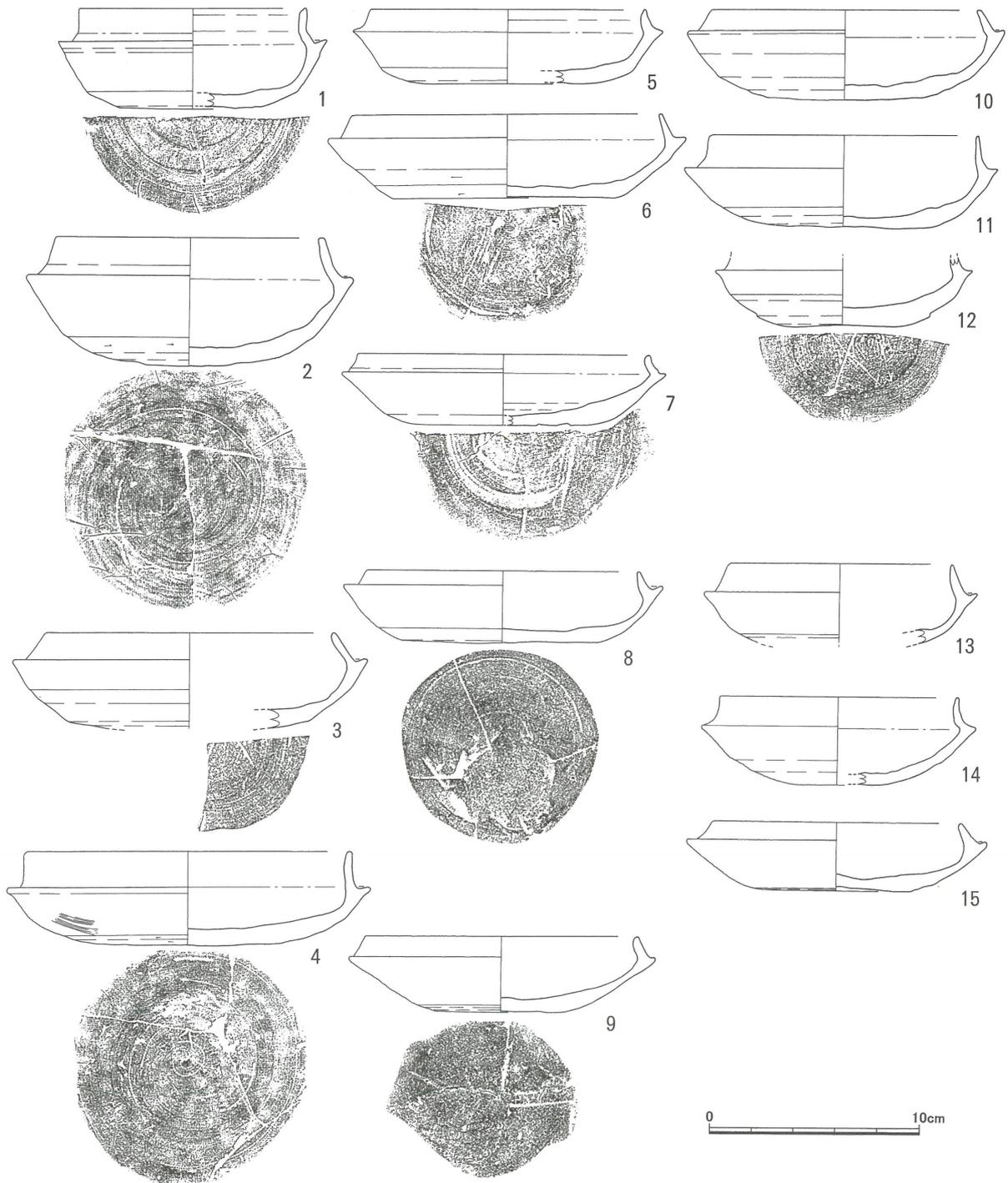
第26图 1 1区出土遺物実測図4 (S=1/3) (移動式竈)



第27図 1 | 区出土遺物実測図5 (S=1/3) (須恵器蓋坏蓋)

須恵器 (第27~30図 図版16~19) 第27図は古墳時代の坏蓋である。1は稜が明瞭に作り出され、口縁部は直立気味である。天井部の削り調整は前面丁寧に施され、口唇部は凹面をなす。5世紀末~6世紀初頭のものと考えられる。

その他は、6世紀後半~末にかけての蓋坏の蓋と考えられる。これらは、稜が甘い表現の蓋で、稜が鈍いかあるいはその痕跡がわずかに見られるもの(2~4・6・12)、沈線または凹線を1条入れることによって稜を表現するもの(5・8・11)、稜が表現されないもの(7・9・11)などがある。口縁端部は凹面をなすものが多いが、7は段に近く、8・12は沈線が1条入るだけ、6の端部は丸いままである。天井部の削り調整は、全面丁寧に削るもの(2・3・5・14)、削り調整は全面に及ぶが粗雑なもの(6・7・9・11)、周辺のみ削り調整され中央が削られないもの(4・10)、まったく調整されずにへら切り痕が明瞭に残るもの(13)、などがある。また、4・9・10の天井部中央にはカキ目状の擦痕が残り、7・14の天井部には直線状のへら記号が付けられている。

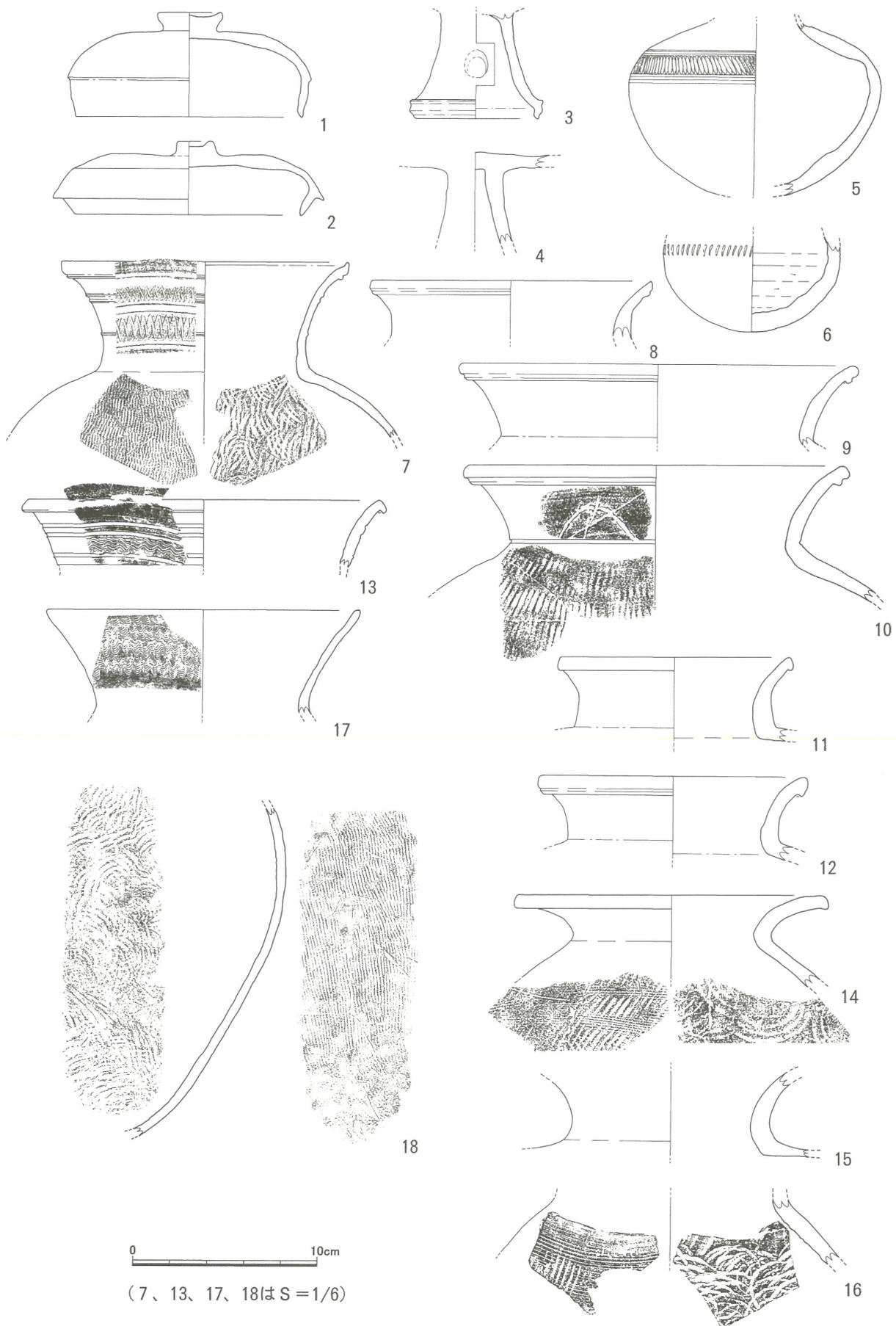


第28図 1 I 区出土遺物実測図6 (S=1/3) (須恵器蓋坏身)

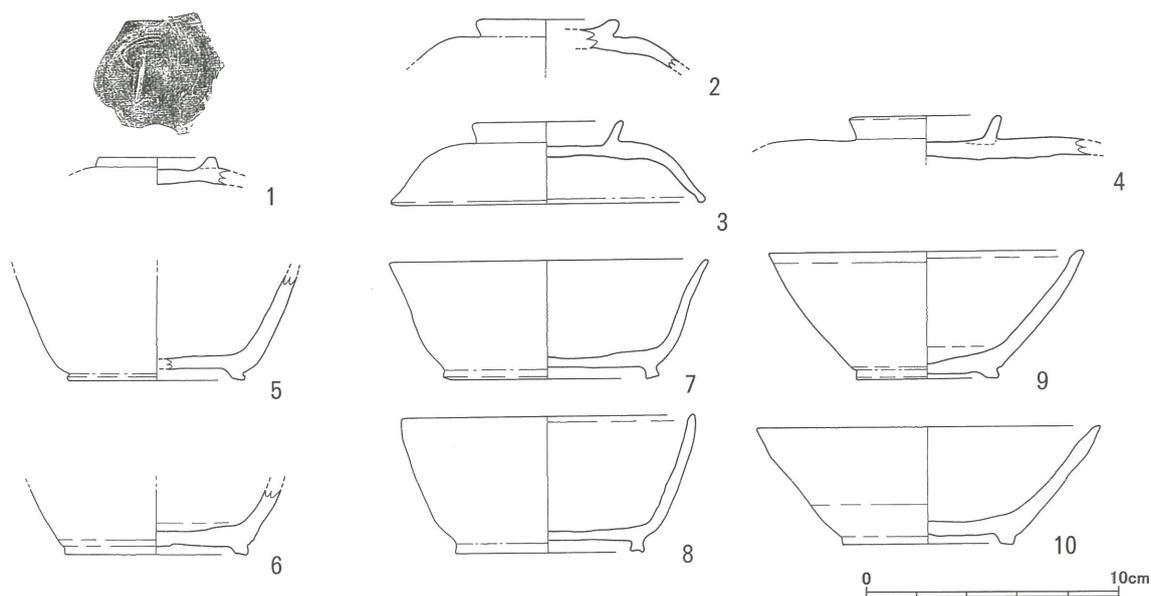
第28図は古墳時代の坏である。1は口縁部の立ち上がりが直立気味で、口縁端部が凹面をなす。底部外面は丁寧にへら削り調整が施され、5世紀末～6世紀初頭のものと考えられる。

2～4・11は、内傾するものの長い立ち上がりを持つものである。これらは口径13cm以上の大形で、底部は比較的丁寧なへら削り調整が施されている。6世紀前半のものと考えられる。

5～10は、立ち上がりが短く内傾する杯である。底部は10がやや丸底風だが、他はすべて平底化している。内面の立ち上がり基部は、7・8は明瞭に窪み体部との境界となっているが、その他の立ち上がりはなだらかに体部につながり両者の境界はあいまいとなっている。底部には比較的丁寧なケズリ調整が全面に施されるものが多いが、6・7はケズリ調整が底部周辺のみ施され、中央ま



第29図 1 | 区出土遺物実測図7 (S=1/3) (須恵器有蓋高坏、碗、甕)



第30図 1 | 区出土遺物実測図8 (S=1/3) (須恵器蓋坏、坏)

で達していない。ともに底部中央にはカキ目状の擦痕があり、7はへら切り痕が明瞭に残る。5～10は6世紀末～7世紀初頭のものと考えられる。

第29図1・2は有蓋高杯の蓋である。1は稜がしっかりと作り出され、口縁部は内傾気味に直立している。天井部には大きなボタン状のつまみが付き、全面丁寧なへら削り調整が施されている。口縁端部は丸いままである。6世紀前半かそれ以前のものと考えられる。

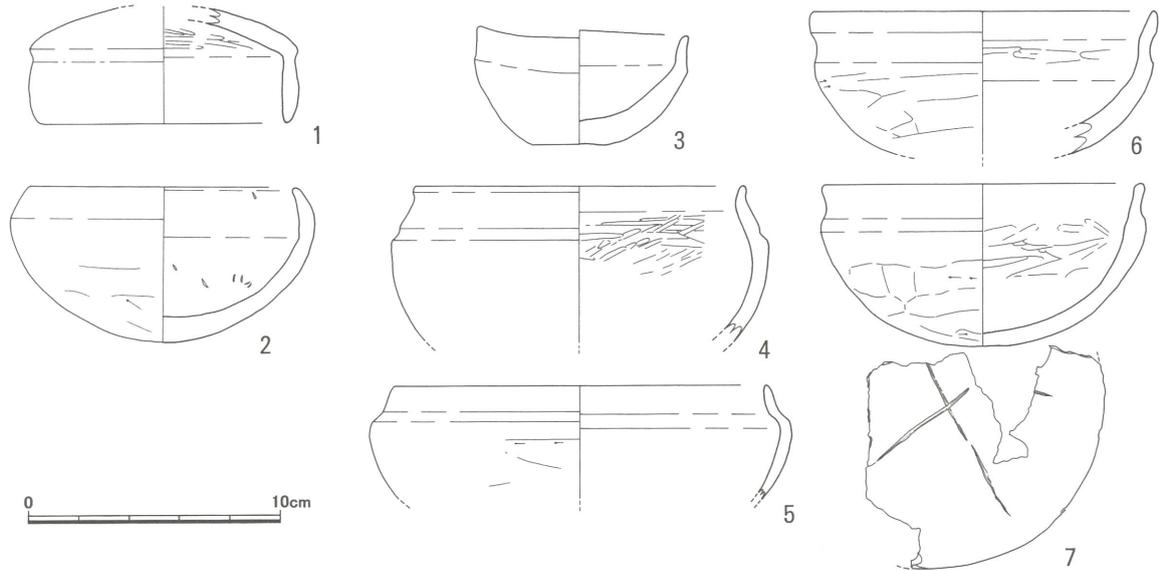
同図2も有蓋高杯の蓋である。坏を上下逆にし、底部中央につまみを付けた蓋である。そのため、稜は坏でいう受部がそのまま稜となっている。口縁部は短く内傾し、口縁端部は丸いまま終わっている。つまみは径が小さなボタン状で、中央は窪んでいる。天井部にはカキ目が全面に施され、仕上げは丁寧といえる。6世紀末～7世紀初頭のものと考えられる。

第29図3・4は高杯である。3は脚端部が内湾気味に屈曲し、その上部に突線が1条めぐっている。脚中央には、大きな円形透かしがあるが、透かしが何か所に穿たれているかは不明である。上端は杯部が剥離し、明瞭な擬口縁となっている。杯部接合のための刻線などはみられない。5世紀末～6世紀初頭のものと考えられる。

4は脚部が細い高杯で、脚部に透かしが穿たれていない。杯部内面は非常に平滑で、使用痕と思われる。7世紀代のものと考えられる。

第29図5・6は甗である。5は大形、6はやや小形の甗で、ともに胴部に櫛状工具による刺突文が施されているが、5の刺突文は2条1単位の沈線文によって区画されている。5は5世紀末～6世紀前半、6は6世紀後半のものと考えられる。

第29図7～15は壺または甕の口縁部で、7～12は口縁上部に突線を持つ。いずれも突線は両脇に凹線を入れることにより強調されている。7以外は口縁直下に突線を有すが、突線は太めで丸い。頸部はいずれも短いようである。7は突線より上位が内湾気味に立ち上がり、広い口縁部を持つ。頸部には、櫛状工具による整然とした波状文と突線が交互に2段配されている。7以外に文様を持つものはないが、10の頸部に、半円形と斜行する直線文とによるへら記号が描かれている。



第31図 1 I 区出土遺物実測図9 (S=1/3) (須恵器模倣品)

第29図13は口縁上端を折り返して垂下している。頸部には2条1単位の沈線文の間に、やや間延びした櫛描き波状文が描かれている。

第29図14は端部が若干肥厚するものの単純口縁の甕である。15も同形かと思われる。

第29図17は単純口縁の壺で、6条1単位の櫛描き波状文が4段描かれている。下端の破面は擬口縁になっている。

第29図18はこれらの胴部片である。18に限らず、8図に掲載したもので胴部のわかる破片では、いずれも外面の叩き痕が格子目風にならない平行叩きであるのが特徴である。

以上の壺または甕は、7が6世紀前半以前にさかのぼる可能性があるほかは、時期が特定できない。

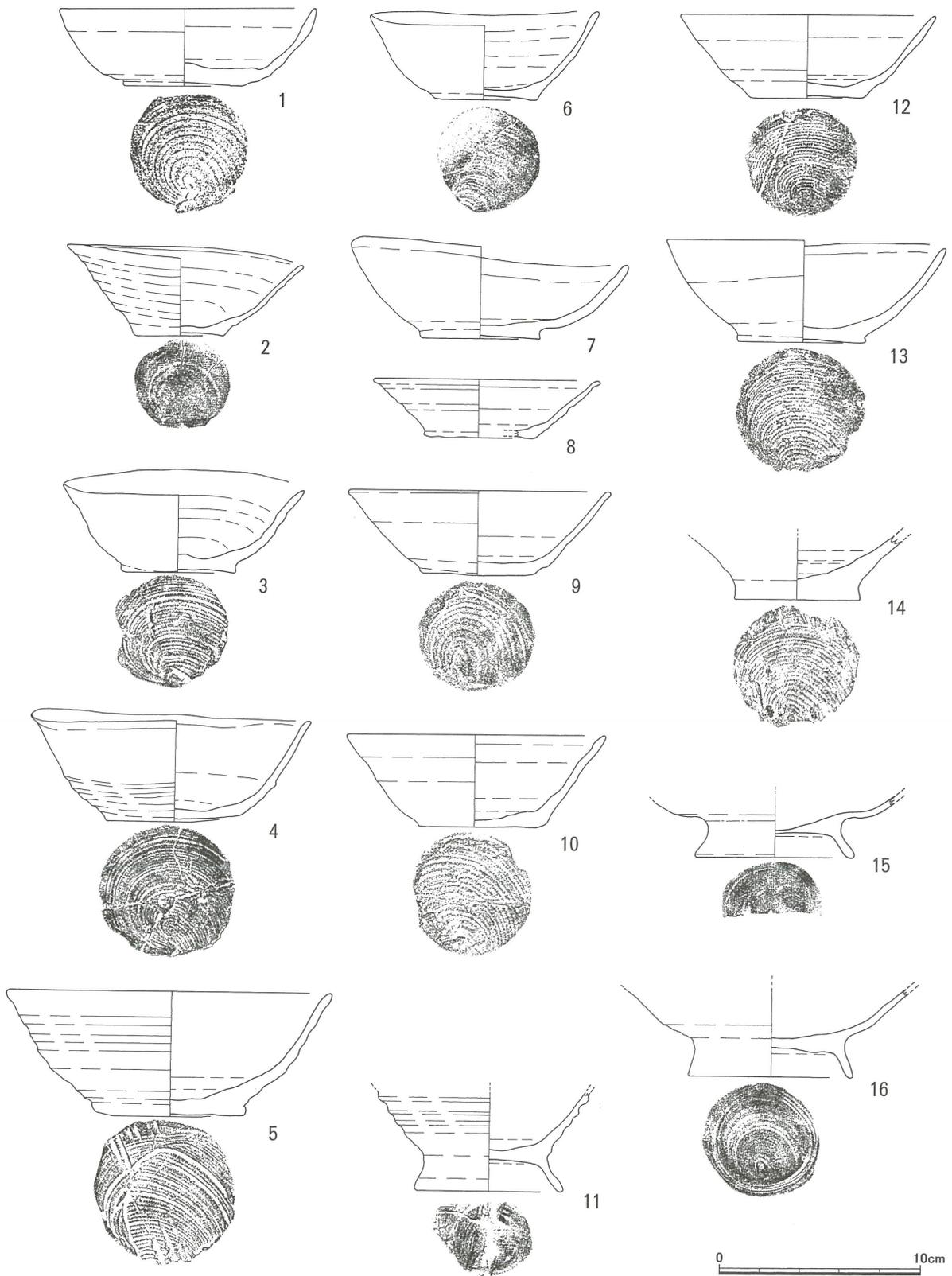
第30図に挙げた須恵器は土器溜り外の上層の包含層から出土したものである。

1～4は8世紀後半から9世紀にかけての蓋である。いずれも輪状つまみで、内面は使用により平滑になっている。全形のわかる3は口縁端部近くで「S」字状に屈曲している。1と4のつまみ内部には、ヘラ切りの痕跡がわずかに観察できる。2・3は天井部の平坦面が輪状つまみよりやや大きい程度だが、4の天井部はつまみのかなり外側まで平坦面が広がっている。

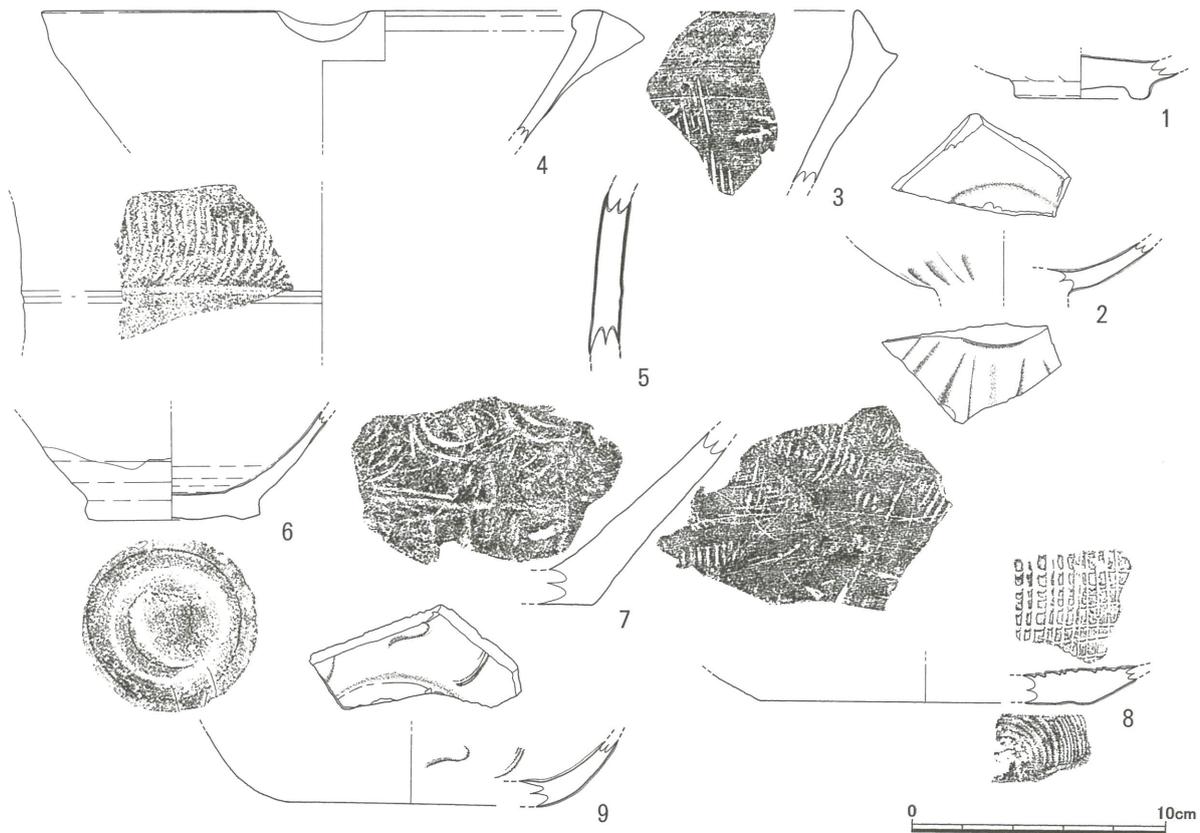
第30図5～10は8世紀後半から9世紀にかけての坏で、いずれも低い高台を持つ。5～8は口縁部が比較的急角度に伸びる器形である。口縁部は5・6・8が内湾気味、7の上半が外反している。底部はいずれも丁寧に調整が施されるが、6はヘラ切り痕がわずかに残る。9・10は口縁部が大きく開く器形で、口径に比して底径が小さい杯である。高台は底部と田口縁部の境界に付けられ、5～10に比べてかなり太い。

土師器碗 (第31図 図版16) 第31図2は口縁部が内湾する碗で、口縁部近くでわずかに内側に屈曲し、外面に稜ができる。稜から上位はヨコナデ、以下は横位の削り調整である。内面にはヨコナデ調整が施されるが、非常に丁寧な調整である。色調は白味を帯び、他の土器とは違う胎土に見える。

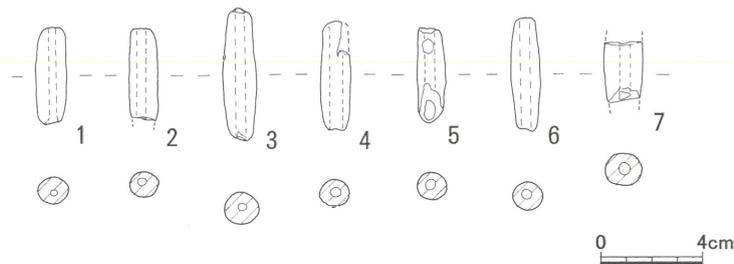
第31図1・3～7は須恵器模倣の系譜を引く土師器と思われる。1は蓋に似るが、内面に磨きが



第32図 1 | 区出土遺物実測図10 (S = 1/3) (土師器供膳具坏)



第33図 1 | 区出土遺物実測図11 (S=1/3) (陶磁器)



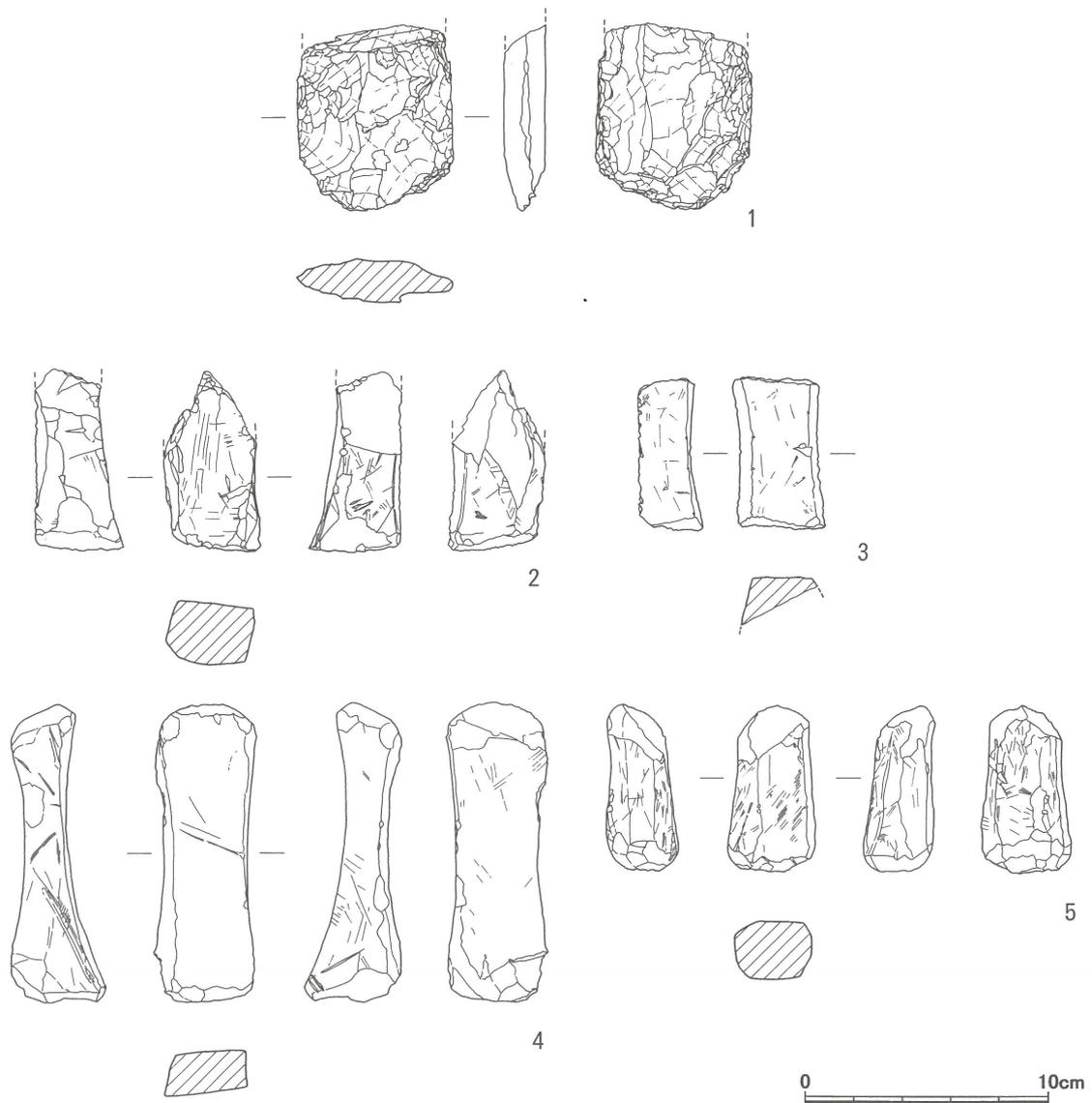
第34図 1 | 区出土遺物実測図12 (S=1/3) (土錘)

施されることを考慮すると坏の可能性もある。体部中程で稜が付き、上位は横位にヘラ削り、以下はヨコナデが施される。天井部内面は丁寧なミガキが施される。3～7はいずれも口縁部周辺を強くナデ調整を加え、口縁部は弱く外反させている。3は同形の小型品である。いずれも体部上位に稜が付き、稜から底部にかけて横位に削り調整が施されている。内面は、ミガキなどによって丁寧に仕上げられている。これらは器壁が厚い土器だが、5は器壁が薄い。いずれも色調は暗灰色を呈し、瓦質に近い焼成である。なお、7の底部には焼成前に付けられた「X」状のヘラ記号がある。

土師器供膳具 (第32図 図版20～21) 第32図に挙げたものは6層以上の上層の包含層や坏列から出土したものである。

第32図11・15・16は足高高台を持つ碗で、口縁部は大きく開く器形と思われる。口縁部外面には凹線が複数めぐり、底部は回転糸切り痕が残る。11・15に比べ、16は大形品である。11～12世紀にかけての土器と思われる。

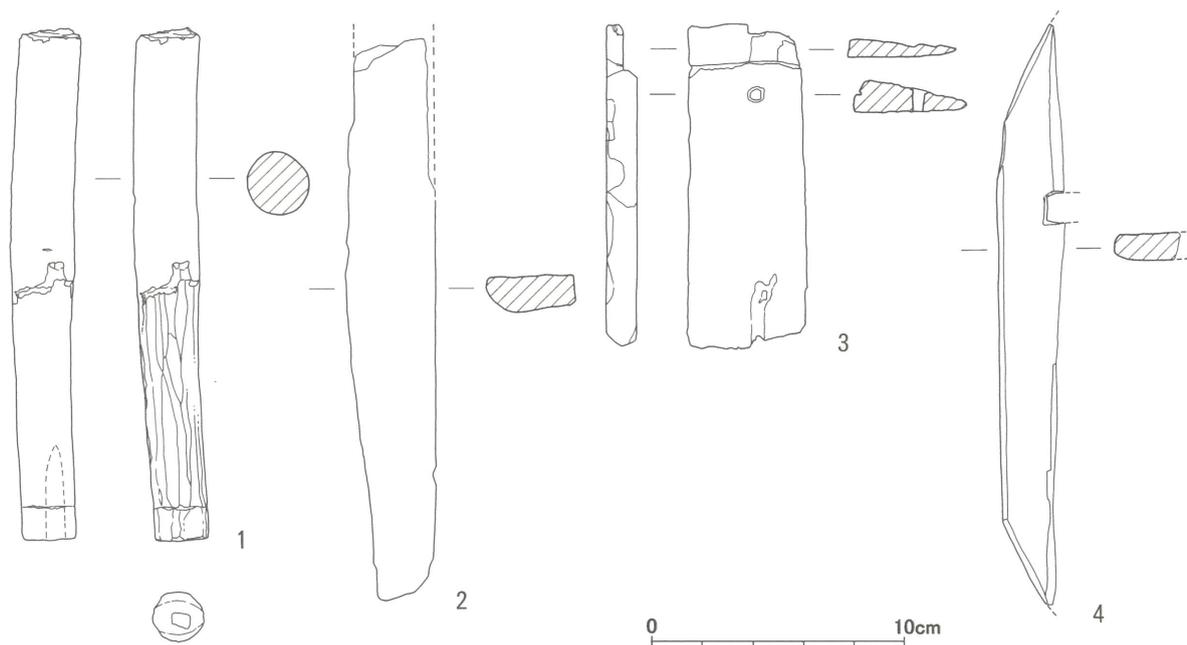
第32図1～14は無高台の坏で、いずれも底部は回転糸切り痕が残る。2～6・8・10は口縁上半



第35図 1 | 区出土遺物実測図13 (S=1/3) (石器、砥石)

が外反する器形で、口縁部外面には凹線が前面にめぐる。4・5は口径14cm以上の大形品、8は高さ約3cmの浅い器形である。1・7・12・13は口縁部が内湾する器形で、7・12は外面の凹線がナデ消されるもの、1・13は外面に凹線が施されないものである。1は焼成が良好で、胎土中の砂粒が目立たない。色調も他が白色系の中でこの土器だけが赤色系と、他の土器と様相が大きく違う。9・14は口縁が外傾して大きく開くもので、外面に凹線が施されていない。14は底部が極端に厚い。これらは、古代末から中世の土器と考えられる。

陶磁器 (第33図 図版21) 6は、11~12世紀の白磁IV類碗である。外面の口縁部下半は釉がかかっていない。1・2・9は、12~13世紀の青磁碗である。2は鎚連弁を持つ龍泉窯II類、9は内面に劃花文を描く同I類である。3は備前焼の播鉢、8は瀬戸焼のおろし皿で、14~15世紀のものである。4は瓦質の片口鉢で、時期は不詳である。5・7は古代の須恵器で、壺または甕である。5の外面には爪形文様2段と沈線1条が施文されている。内外面とも、薄く自然釉がかかっている。7は平底の底部で、内外面とも摩滅が著しい。これらの陶磁器は土器溜り以外の上層から出土した



第36図 1 I 区出土遺物実測図14 (S = 1/3) (木製品柄ほか)

ものである。

土錘 (第34図 図版21) いずれも管状の土錘で、中央がやや膨らむ器形である。7がやや太形であるほかは、径の細い土錘である。

打製石斧 (第35図1 図版22) 基部が欠失している。両面とも側縁から調整剥離が行われ、中央に礫面を残す。図示した面で、左図の面は摩滅がみられ、とくに右側縁は著しく摩滅している。それに対して、右図の面は剥離の稜線がシャープで摩滅はみられない。右図の面は刃部が再調整されていると考えられる。

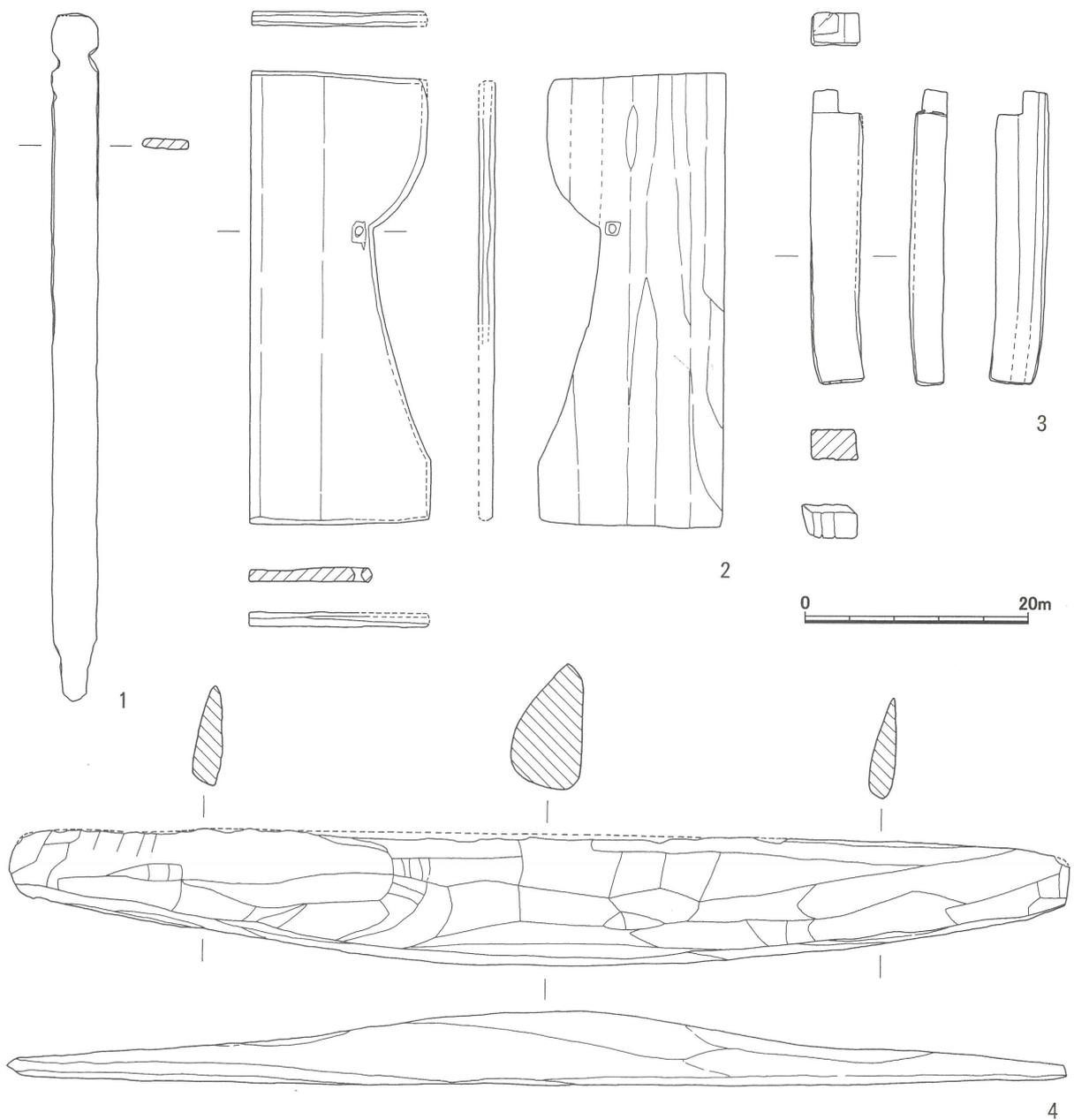
砥石 (第35図2～5 図版22) 2～4は4から5面の砥ぎ面が見られる。3は二次焼成を受けて黒色に変色し、多きく欠損している。2は下端小口面と側面は当時の面を残す。下端小口面はほとんど使用されず、主に側面を砥ぎ面としている。4は完形で、4面に明瞭な研磨痕を残す。両小口面は若干使用痕が見られる程度で、これも側縁を主に使用したと思われる。5は小形だが、完形に近い。両小口面にはそぎ落としたような小さな面が複数あり、当初からこの大きさと作られていた可能性がある。これらの石器は土器溜り以外から出土したものである。

これらはいずれもきめの細かい軟質の石材を使用している。

木製品 (第36～38図 図版22～24) 第36図1は刃物の柄と考えられる。下端小口面に長方形の孔が空けられており、刃物の茎を装着するための孔と考えられる。上端小口面にも円形の小孔が空けられているが、こちらは用途不明である。

第36図2～4・第37図3は器種不明。第36図2は鎌等の把手に見えるが、定かではない。同図3は両端に釘穴にみえる小孔があり、上部は段状に加工されている。同図4は上部に方形の孔があり、両端を尖らせている。第37図3は角材に近く、上部を臍状に作り出している。第36図3・4・第37図3は建築材等の転用材の可能性もある。

第37図4はえぶりと考えられる。一側縁が厚く、刃部に相当する部分は薄く作られている。中央

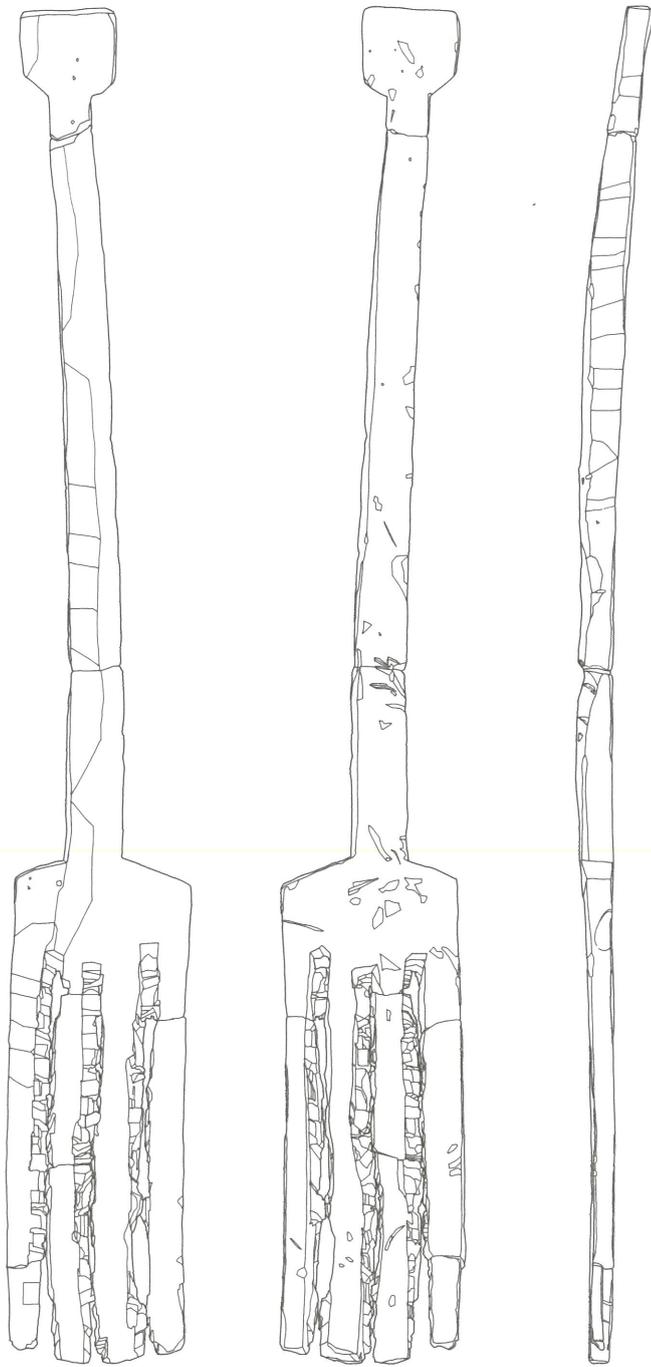


第37図 1 | 区出土遺物実測図15 (S=1/6) (木製品齧串、えぶり未成品ほか)

は特に厚く、盛り上がった形状である。孔がなく、未成品の可能性もある。

第37図1は齧串で、頭部に小さな抉りが入れられ、下端は尖らせている。齧串は土器溜り以外の第9層から出土したものであり古代以降のものと思われる。同図2は机等の脚の可能性もある。

第38図は全長109cm、身の長さ40.5cm、身幅14cm、厚さ2~3.5センチの鋤未成品である。歯の加工は両面から行われており、4本歯を作り出そうとしている。把手は台形で、孔を空けようとした痕跡はみられない。各歯間には加工痕が明瞭に残っている。また、踏み込まれるはずの鋤の肩であるが、確かに右側を幅広く加工しているがそれでも脚の幅と比較して狭すぎるのではないかとと思われる。樹種はコナラである。



1



第38図 1 I 区出土遺物実測図16 (S = 1/6) (木製鋤未成品)

第4表 1 | 区出土遺物観察表

挿図 番号	図版 番号	種別	器種	出土 地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
23-1	14	土師器	高坏	1 区 土器溜り		17.50	(6.9)		外:ヨコナデ、ハケメ、ナデ 内:ヨコナデ、ハケメ	1~3.5mm程度 の砂粒を含む	やや 不良	外 灰黄~にぶ 内 灰黄~にぶ	古墳時代中期	
23-2	14	土師器	高坏	1 区 土器溜り		-	12.2	11.7	外:ヨコナデ、指押圧痕、ヨコナデ 内:ナデ、ヘラケズリ	1~3mm程度 の砂粒を含む	良	外 にぶい黄橙 内 橙	古墳時代中期	
23-3	14	土師器	高坏	1 区 土器溜り			(10.1)	14.9	外:ヨコナデ 内:ハケメ、ヘラケズリ	1mm程度 の砂粒 を含む	やや 不良	外 橙 内 にぶい黄橙	古墳時代中期	
23-4	14	土師器	高坏	1 区 土器溜り		17.6	(7.8)		外:ハケメ 内:ヨコナデ、ハケメ	1~2mmの砂粒 を含む	やや 不良	外 浅黄橙~橙 内 にぶい黄橙~橙	外面に凹線? 古墳時代中期	
23-5	14	土師器	高坏	1 区 土器溜り	4層		(8.5)	(12.1)	外:ハケメ、ヨコナデ 内:ヘラケズリ、ヨコナデ	1~2mmの砂粒 を多く含む	良好	外 橙 内 橙~浅黄橙	内外面に赤彩 古墳時代中期	
23-6	14	土師器	高坏	1 区 土器溜り			(7.6)	11.4	外:ハケメ、ヨコナデ 内:ヘラケズリ	1mm程度 の砂粒 を少量含む	やや 不良	外 灰黄 内 灰黄~黄灰	古墳時代中期	
23-7	14	土師器	高坏	1 区 土器溜り			(9.7)	11.6	外:ナデ 内:ナデ、ヘラケズリ	1mm程度 の砂粒 を多く含む	不良	橙	古墳時代中期	
23-8	14	土師器	高坏	1 区 土器溜り	3層		(4.2)		外 ナデ 内 風化により不明	1mm程度 の砂粒 を多く含む	不良	外 橙 内 にぶい黄橙	古墳時代中期	
23-9	14	土師器	小形壺	1 区 土器溜り		7.0	9.8	1.0	外:ヨコナデ、ナデ 内:ヨコナデ、指押圧痕、ヘラケズリ	1~2mmの砂粒 を多く含む	良好	にぶい黄橙	外面に竹管文の ような文様あり 古墳時代中期	
23-10	14	土師器	製塩土器	1 区 土器溜り			(4.5)		外: 内:ヘラ状工具による調整	砂粒を少量含む		にぶい黄橙	全体的に二次焼 成をうける	
23-11		土師器	製塩土器	1 区 土器溜り			(5.2)		外 指押圧痕 内:ヘラケズリ	1mm前後 の砂粒 をまばらに含む		淡黄褐	全体的に二次焼 成をうける	
24-1	15	土師器	甃	1 区 土器溜り		17.0	(15.5)		外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1~5mmの砂粒 を多量に含む	良好	外 淡黄~にぶ 内 にぶい黄橙	古墳時代中期	
24-2	15	土師器	甃	1 区 土器溜り		17.4	(17.0)		外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度 の砂粒を 大量に含み、2~ 6mmの砂粒を含む	良好	外 橙~浅黄橙 内 明赤褐~褐灰	口縁部、胴部外 面に煤付着 古墳時代中期	
24-3	15	土師器	甃	1 区 土器溜り		17.0	(5.2)		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度 の砂粒 を少量含む	良好	外 暗褐~にぶ 内 褐~暗褐	古墳時代後期~ 奈良時代	
24-4	15	土師器	甃	1 区		19.0	26.4		外:ヨコナデ、ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度 の砂粒を多 量に含み、3~5mm の砂粒も僅かに含む	やや 不良	外 橙色~赤褐色 ~灰褐色 内 灰褐色~橙色	胴部外面に煤付 着、焼痕あり 古墳時代中期	
24-5	15	土師器	甃	1 区 土器溜り		19.8	(11.1)		外:ハケメ 内:ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度 の砂粒 を多量に含む	良好	橙色~にぶい 橙 色	古墳時代後期~ 奈良時代	
25-1	16	土師器	甗	1 区 土器溜り		23.5	31.0	9.6	外:ヨコナデ、ハケメ、ナデ 内 ヨコナデ、ヘラケズリ	1~5mmの砂粒 を多量に含む	やや 不良	外 黄灰~にぶ 内 にぶい黄橙	底部~胴部外 面に煤付着 古墳時代後期~ 奈良時代	
25-2	15	土製品	移動式甗	1 区 土器溜り			(15.9)	33.2	外:ハケメ 内:ヘラケズリ、指押圧痕、ナデ	1mm程度 の砂粒 を含む	良好	外 赤褐~にぶ 内 明赤褐~褐灰	古墳時代後期~ 奈良時代	
26-1	15	土製品	移動式甗	1 区 土器溜り		24.5	(35.3)		外:ハケメ 内:ヘラケズリ、指押圧痕、ナデ、ハケメ	1mm程度 の砂粒 を含む	良	外 褐灰~にぶ 内 褐灰~にぶ	古墳時代後期~ 奈良時代	
27-1	16	須恵器	坏蓋	1 区 土器溜り		12.0	4.3		外:ヘラケズリ、回転ナデ 内:回転ナデ	白色砂粒を多く 含む	良好	黒灰	5 C末~6 C初 頭	
27-2	16	須恵器	坏蓋	1 区 土器溜り		13.0	3.8		外 ヘラケズリ、回転ナデ 内:回転ナデ、ナデ	白色砂粒を多く 含む	良好	灰白	6 C後半~末	
27-3	16	須恵器	坏蓋	1 区 土器溜り		14.2	3.7		外:ヘラケズリ、回転ナデ 内:回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	6 C後半~末	
27-4	16	須恵器	坏蓋	1 区 土器溜り		14.6	4.3		外:ヘラケズリ、回転ナデ 内:ナデ、回転ナデ	白色砂粒を含む	良好	灰	6 C後半~末	
27-5	16	須恵器	坏蓋	1 区 土器溜り		16.8	(3.8)		外:回転ナデ、ケズリ 内:ナデ、回転ナデ	砂粒を少量含む	良好	外 青灰 内 灰白	外面に凹線が一 条巡る 6 C後半~末	
27-6	16	須恵器	坏蓋	1 区 土器溜り		15.0	4.9		外:ヘラケズリ、回転ナデ 内:ヘラケズリ、回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	6 C後半~末	
27-7	17	須恵器	坏蓋	1 区 土器溜り		14.6	4.0		外:ヘラケズリ、回転ナデ 内:回転ナデ	白色砂粒を多く 含む	良好	黒灰	天井部に一直線 へら記号あり 6 C後半~末	
27-8	16	須恵器	坏蓋	1 区 土器溜り		14.2	4.6		外:ヘラケズリ、回転ナデ 内:回転ナデ	石英を含む	良好	灰白	6 C後半~末	
27-9	16	須恵器	坏蓋	1 区 土器溜り		14.2	3.6		外:ヘラケズリ、回転ナデ 内:回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	天井部へら切り 6 C後半~末	
27-10	16	須恵器	坏蓋	1 区 土器溜り		13.4	3.0		外:ヘラケズリ、回転ナデ 内:ナデ、回転ナデ	白色砂粒を含む	良好	茶色混じりの灰	天井部へら切り 6 C後半~末	

挿図番号	図版番号	種別	器種	出土地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
27-11	17	須恵器	坏蓋	1 I 区 土器溜り			(3.3)		外：ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ	1～2mmの砂粒を含む	良好	灰	天井部に一直線へら記号あり 6 C後半～末	
27-12	16	須恵器	坏蓋	1 I 区 土器溜り	12.4		(3.5)		外：ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	灰	6 C後半～末	
27-13	16	須恵器	坏蓋	1 I 区 土器溜り	13.4	2.4	8.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	黒色・白色砂粒を含む	良好	灰	天井部の調整があまく、粘土粒の単位が明瞭に残る 6 C後半～末	
27-14	16	須恵器	坏蓋	1 I 区 土器溜り			(1.3)		外：ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ、ナデ	白色砂粒を含む	良好	灰	天井部に二条直線へら記号あり 6 C後半～末	
28-1	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	10.8		4.8		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	5 C末～6 C初頭	
28-2	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	12.8		6.2		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	灰白	6 C前半	
28-3	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	12.8		(4.6)		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	白色砂粒・角閃石を含む	良好	灰～灰白	底部に二条のへら記号あり 6 C前半	
28-4	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	15.60		4.5		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	6 C前半	
28-5	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	13.0		(3.6)		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰	6 C末～7 C初頭	
28-6	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	14.8		4.0		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	底部へら切り 6 C末～7 C初頭	
28-7	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	13.8		3.4		外：回転ナデ、回転ナデ後工具ナデ 内：回転ナデ	密。1mm程度の砂粒を少量含む	やや不良	外 黄灰～浅灰 内 灰	底部へら切り 6 C末～7 C初頭	
28-8	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	13.0		(3.5)		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	黒色砂粒を含む	良好	灰白	6 C末～7 C初頭	
28-9	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	13.0		3.6		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	白色砂粒を含む	やや不良	外 黒灰 内 灰白	底部に一直線へら記号あり 6 C末～7 C初頭	
28-10	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	12.8		4.3		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰	6 C末～7 C初頭	
28-11	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	12.8		4.4		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	白色砂粒を含む	良好	灰	6 C前半	
28-12	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り			(3.3)		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	黒色・白色砂粒を含む	良好	青灰	底部に「×」へら記号あり	
28-13	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	10.6		(3.8)		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ、ナデ	砂粒を少量含む	良好	青灰		
28-14	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	11.4		(4.2)		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰	外面に自然釉付着	
28-15	17	須恵器	坏身	1 I 区 土器溜り	11.8		3.3		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	白色砂粒を含む	良好	灰白		
29-1	18	須恵器	有蓋高坏蓋	1 I 区 土器溜り	12.3		5.7		ボタン状摘み 外：ヘラケズリ、回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	灰	外面に自然釉付着 6 C前半まで	
29-2	18	須恵器	有蓋高坏蓋	1 I 区 土器溜り	12.2		4.0		ボタン状摘み 外：回転ナデ 内：回転ナデ	黒色・白色砂粒を含む	良好	灰	6 C末～7 C初頭	
29-3	18	須恵器	高坏	1 I 区 土器溜り			(5.8)	6.7	透かしの方向は不明 外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	不良	外 灰黄 内 灰黄～黄灰	焼成が甘く、土師質 7 C末～6 C初頭	
29-4	18	須恵器	高坏	1 I 区 土器溜り			(5.0)		外：回転ナデ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	7 C	
29-5	18	須恵器	甕	1 I 区 土器溜り			(9.3)		肩部に二条沈線が施され、その間に刺突文あり 外：回転ナデ 内：回転ナデ	白色砂粒を多く含む	良好	青灰	内面の一部と外面に自然釉付着 5 C末～6 C前半	
29-6	18	須恵器	甕	1 I 区 土器溜り			(5.2)		肩部にへらによる刺突文あり 外：回転ナデ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	6 C後半	
29-7	18	須恵器	甕	1 I 区 土器溜り	31.0		(19.2)		頸部に突線で区画された2条の波状文 外：回転ナデ、タキ 内：回転ナデ、タキ	精良	良好	外 黒灰 内 灰	外面の一部に自然釉付着	
29-8	18	須恵器	壺	1 I 区 土器溜り	15.0		(3.2)		外：回転ナデ 内：回転ナデ	白色砂粒を含む	良好	灰	頸部外面に自然釉付着	
29-9	18	須恵器	甕	1 I 区 土器溜り	21.2		(4.3)		外：回転ナデ 内：回転ナデ	小砂粒を多く含む	良好	黒灰		
29-10	18	須恵器	甕	1 I 区 土器溜り	20.4		(7.4)		タキの痕跡がみられない 外：回転ナデ、ナデ、タキ 内：回転ナデ	白色砂粒を含む	良好	灰	頸部に複合的へら記号あり。	
29-11	18	須恵器	壺	1 I 区	10.4		(4.6)		外：回転ナデ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰		
29-12	18	須恵器	壺	1 I 区 土器溜り	14.4		(4.5)		外：回転ナデ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰		

挿図 番号	図版 番号	種 別	器 種	出土 地点	層位	寸 法 (cm)			形態・文様の特徴	調 整	胎 土	焼成	色 調	備 考
						口径	器高	底径						
29-13	18	須恵器	甗	1 I 区 土器溜り		38.0	(7.3)		頭部に沈線で区画された波状文	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	灰	
29-14	19	須恵器	甗	1 I 区		10.6	(5.3)			外：回転ナデ、タタキ 内：回転ナデ、タタキ	黒色・白色砂粒を含む	良好	灰白	口縁部内面に自然釉付着
29-15	19	須恵器	甗	1 I 区 土器溜り			(4.5)			外：回転ナデ、タタキ 内：回転ナデ、タタキ	黒色・白色砂粒を含む	良好	灰	
29-16	19	須恵器	甗	1 I 区			(3.4)			外：回転ナデ、カキメ、タタキ 内：回転ナデ、タタキ	石英を含む	良好	青灰	
29-17	18	須恵器	壺	1 I 区 土器溜り		34.0	(11.5)		頭部に4条の波状文	外：回転ナデ 内：回転ナデ	精良	良好	灰	
29-18	19	須恵器	甗	1 I 区						外：タタキ 内：タタキ	石英を含む	良好	青灰	
30-1	19	須恵器	坏蓋	1 I 区			(1.1)		輪状摘み	外：回転ナデ 内：ナデ	精良	良好	灰	天井部へラ切り 8 C後半～9 C
30-2	19	須恵器	坏蓋	1 I 区			(1.6)		輪状摘み	外：回転ナデ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	8 C後半～9 C
30-3	19	須恵器	坏蓋	1 I 区		12.2	(3.3)		輪状摘み	外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	8 C後半～9 C
30-4	19	須恵器	坏蓋	1 I 区			(1.7)		輪状摘み	外：ナデ 内：ナデ	黒色砂粒を含む	良好	灰白	8 C後半～9 C
30-5	19	須恵器	高台付坏	1 I 区			(4.2)	7.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	白色砂粒・角閃石を含む	良好	白灰	8 C後半～9 C
30-6	19	須恵器	高台付坏	1 I 区			(3.1)	7.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	外面に自然釉付着 8 C後半～9 C
30-7	19	須恵器	高台付坏	1 I 区		12.6	4.8	8.6		外：回転ナデ 内：回転ナデ	白色砂粒を含む	良好	青灰	8 C後半～9 C
30-8	19	須恵器	高台付坏	1 I 区		11.6	5.5	7.4		外：回転ナデ、ヘラケズリ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	外面底部付近に自然釉付着 8 C後半～9 C
30-9	19	須恵器	高台付坏	1 I 区		12.4	5.1	5.6		外：回転ナデ 内：回転ナデ	石英を含む	良好	青灰	8 C後半～9 C
30-10	19	須恵器	高台付坏	1 I 区		13.6	4.7	6.9		外：回転ナデ 内：回転ナデ	黒色・白色砂粒を含む	良好	白灰	8 C後半～9 C
31-1	16	土師器	蓋か坏	1 I 区 土器溜り		9.9	(4.6)			外：ナデ、回転ナデ 内：回転ナデ、ヘラミガキ	密	不良	外 黄灰～灰 内 黒	焼成が甘く、土師質
31-2	16	土師器	碗	1 I 区 土器溜り		10.6	6.2			外：ヨコナデ、ケズリ 内：ヨコナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を多く含む	やや不良	外 におい黄橙 内 浅黄橙	
31-3	16	土師器	小形坏	1 I 区 土器溜り		8.3	4.8	3.4		外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を多く含む	やや不良	外 におい黄橙 内 黄灰～黒色	
31-4	16	土師器	坏	1 I 区 土器溜り		13.1	(6.2)			外：ヨコナデ、ナデ 内：ヘラミガキ	密。1mm以下の砂粒を僅かに含む	良好	外 灰～黒 内 灰黄～黒	
31-5	16	土師器	坏	1 I 区 土器溜り		14.9	(4.5)			外：ヨコナデ、ヘラケズリ？ 内：ヨコナデ	密。1mm以下の砂粒を少量含む	やや不良	黄灰～灰	内面に燻しの痕跡
31-6	16	土師器	坏	1 I 区 土器溜り		13.6	(5.8)			外：ヨコナデ、ナデ 内：ヘラミガキ	密	やや不良	黄灰～暗黄灰	内面に燻しの痕跡
31-7	16	土師器	坏	1 I 区 土器溜り		12.5	6.5			外：ヨコナデ、ヘラケズリ 内：ヨコナデ、ヘラミガキ	2～3mmの砂粒を多く含む	良好	外 灰黄～浅黄 内 におい黄橙～暗褐	底部外面に「×」ヘラ記号あり
32-1	20	土師器	坏	1 I 区		12.8	4.0	6.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm程度の砂粒を多量に含む	良好	外 橙～におい黄橙 内 橙	底部は回転糸切り～11 C
32-2	20	土師器	坏	1 I 区	4層	11.9	4.6	4.5		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	やや不良	外 浅黄橙 内 浅黄橙～灰	12 C中～後葉
32-3	20	土師器	坏	1 I 区	4層	12.1	5.2	5.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1～3mmの砂粒を僅かに含む	良	灰白～橙	底部は回転糸切り 12 C中～後葉
32-4	20	土師器	坏	1 I 区	4層	14.1	5.6	6.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良	灰白	底部は回転糸切り 12 C中～後葉
32-5	20	土師器	坏	1 I 区	4層	16.1	6.3	7.3		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	灰黄	底部は回転糸切り 12 C中～後葉
32-6	20	土師器	坏	1 I 区		11.3	4.5	5.1		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密。1mm以下の砂粒を僅かに含む	やや不良	灰白～浅黄橙	底部は回転糸切り 12 C中～後葉
32-7	20	土師器	坏	1 I 区	4層	13.7	5.1	5.9		外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ	密。2mmの砂粒を僅かに含む	良好	外 灰黄～黄灰 内 浅黄橙	12 C中～後葉
32-8	20	土師器	坏	1 I 区	4層	11.1	2.9	5.5		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	やや不良	灰白～浅黄橙	底部は回転糸切り 12 C中～後葉

押図 番号	図版 番号	種 別	器 種	出土 地点	層位	寸 法 (cm)			形態・文様の特徴	調 整	胎 土	焼成	色 調	備 考
						口径	器高	底径						
32-9	20	土師器	坏	1 I 区	5 層	12.8	4.3	5.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	外 灰黄褐 内 浅黄橙～灰黄	底部は回転糸切り 12C中～後葉
32-10	20	土師器	坏	1 I 区	4 層	12.7	4.7	6.3		外：回転ナデ 内：回転ナデ	2～3mm程度の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙	底部は回転糸切り 12C中～後葉
32-11	20	土師器	高台付坏	1 I 区	4 層		(5.0)	7.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	灰白～浅黄橙	坏部底部は静止糸切り 11C後半～12C前半
32-12	20	土師器	坏	1 I 区	6 層	12.5	4.2	5.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	外 浅黄～にぶい橙 内 灰黄～黒褐	底部は回転糸切り 12C中～後葉
32-13	21	土師器	坏	1 I 区	6 層	13.9	5.1	6.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1～2mmの砂粒を多く含む	やや不良	外 淡黄～浅黄 内 浅黄	底部は回転糸切り 12C中～後葉
32-14	21	土師器	坏	1 I 区	6 層		(3.0)	6.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密。1mm程度の砂粒を僅かに含む	良好	茶褐	底部は回転糸切り 12C中～後葉
32-15	21	土師器	高台付坏	1 I 区	6 層		(3.1)	7.8		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	やや不良	外 橙 内 橙～にぶい黄橙	底部は静止糸切りの後回転ナデ 11C後半～12C前半
32-16	21	土師器	高台付坏	1 I 区	6 層		(4.5)	8.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	浅黄橙	底部は回転糸切り 11C後半～12C前半
33-1	21	青磁	碗	1 I 区			(5.3)	1.7		外： 内：	密	良好	オリーブ灰	12～13C
33-2	21	青磁	碗	1 I 区			(2.2)		鎬蓮弁文	外： 内：	密	良好	灰オリーブ	龍泉窯Ⅱ類
33-3	21	陶器	擂鉢	1 I 区						外：回転ナデ 内：回転ナデ、カキメ	1～4mm程度の砂粒を僅かに含む	良好	暗赤褐	備前焼
33-4	21	瓦質土器	片口鉢	1 I 区		22.4	(5.3)			外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm程度の砂粒を多量に含む	良好	灰白	口縁部外面に炭化物付着
33-5	21	須恵器	壺か甕	1 I 区			(6.4)		爪形文様2段、沈線文	外：回転ナデ 内：回転ナデ	1mm程度の砂粒を少量含む	良好	外 灰白～灰オリーブ 内 オリーブ灰	
33-6	21	白磁	碗	1 I 区			(4.4)	6.8		外：回転ナデ、ナデ 内：回転ナデ	密	良好	外 灰白 内 灰白～明黄灰	白磁Ⅳ類
33-7	21	須恵器	壺か甕	1 I 区			(7.0)			外：タタキ、ケズリ、ナデ 内：タタキ	石英を含む	良好	青灰	
33-8	21	陶器	おろし皿	1 I 区			(1.5)	13.3		外：回転ナデ 内：	密	良好	外 淡黄 内 灰白	底部は回転糸切り、瀬戸系 14～15C
33-9	21	青磁	碗	1 I 区			(2.8)	10.0	劃花文	外： 内：	密	良好	灰オリーブ	龍泉窯Ⅰ類
34-1	21	土製品	土錘	1 I 区		現存長 3.9	最大幅 1.2	孔径 0.3	管状土錘 中央がふくらむ		1mm以下の砂粒を少量含む	良好	浅黄橙～橙	赤彩？
34-2	21	土製品	土錘	1 I 区		現存長 3.7	最大幅 1.2	孔径 0.4	管状土錘 中央がふくらむ		密	良好	灰白	
34-3	21	土製品	土錘	1 I 区		現存長 5.3	最大幅 1.4	孔径 0.4	管状土錘 中央がふくらむ		1mm以下の砂粒を含み、3mmの砂粒を僅かに含む	良	にぶい橙～橙	
34-4	21	土製品	土錘	1 I 区		現存長 4.4	最大幅 1.2	孔径 0.5	管状土錘 中央がふくらむ		1mm程度の砂粒を含む	良	灰黄～橙	赤彩？
34-5	21	土製品	土錘	1 I 区		現存長 3.8	最大幅 1.2	孔径 0.5	管状土錘 中央がふくらむ		1mm以下の砂粒を含む	良	灰黄	
34-6	21	土製品	土錘	1 I 区		現存長 4.6	最大幅 1.2	孔径 0.4	管状土錘 中央がふくらむ		1mm以下の砂粒を少量含む	良	にぶい黄	
34-7	21	土製品	土錘	1 I 区		現存長 2.5	最大幅 1.6	孔径 0.5	管状土錘 中央がふくらむ やや大形		1mm以下の砂粒を少量含む	良	灰黄～黒	
35-1	22	石器	打製石斧	1 I 区		現存長 7.7	最大幅 6.4	最大厚 2.7						
35-2	22	石器	砥石	1 I 区		現存長 7.5	最大幅 4.0	最大厚 2.6						
35-3	22	石器	砥石	1 I 区		現存長 6.4	最大幅 3.2	最大厚 1.7						
35-4	22	石器	砥石	1 I 区		現存長 12.4	最大幅 4.1	最大厚 1.7						
35-5	22	石器	砥石	1 I 区		現存長 6.9	最大幅 3.7	最大厚 2.6						

1 I 区出土木製品観察表

挿図 番号	図版 番号	出土 地点	出土 層位	用 途	形 状	樹 種	寸 法 (cm)			備 考
							長辺	短辺	厚さ	
36-1	23	1 I 区 土器溜り	10層	柄	棒状	イヌガヤ	20.4	2.6	2.6	
36-2	23	1 I 区 土器溜り	10層	不明	板状	ヤマグワ	22.5	3.6	1.5	
36-3	23	1 I 区 土器溜り	10層	雑具・箱部材	薄い板状	スギ	13.0	4.7	1.3	穿孔あり。側面の一部に鋸の痕跡あり。
36-4	23	1 I 区 土器溜り	10層	不明	薄い板状	スギ	23.2	2.7	1.1	
37-1	24	1 I 区	9層	斎串	薄く細長い板状	スギ	62.4	4.2	1.2	
37-2	24	1 I 区 土器溜り	10層	部材	薄い板状	スギ	41.2	16.5	1.4	机脚の可能性あり
37-3	24	1 I 区	6層	部材	角材	スギ	26.7	4.7	2.9	机脚もしくは建築部材、ホゾ孔あり
37-4	24	1 I 区 土器溜り	10層	えぶり		アカガシ 亜属	95.4	14.0	6.3	未成品の可能性あり
38-1	22	1 I 区 土器溜り	10層	鋤		コナラ	109.0	14.4	2.9	未成品。工具痕が多数残る

第6章 2区の調査

第1節 2B区の調査

2B区の様相について

浜寄・地方遺跡2B区と名づけた区画は近年まで商業施設、宅地及び畠地として利用されてきた区域である。古墳時代以降陸地化して中世以降は安定的に土地利用がなされてきたようすがうかがわれる。

2B区の土層堆積の状況は第40図に示したとおりである。1層は耕土である。第7図土層概念図(2区)の基本1層にあたる。2～4層までは比較的しまりの強い砂質土層で特に4層は硬くしまっている。古代から中世にかけての遺物が出土する。後述する中世の柱穴群が掘り込まれている。これらの土層中には、まるで浮遊しているかのように円礫が散在している。円礫を包む主体となる土には細かい砂が入り込んでおり、古代以来、人々が繰り返し土地を耕し、掘り返してきた人間の活動痕跡であるという。第7図土層概念図(2区)の基本2・3層にあたる。5～7層は砂層である。洪水に由来すると思われる。弥生土器をも含み、古墳時代前期～中期までの遺物が多く出土する。特に古墳時代中期の土器を中心とする。第7図土層概念図(2区)の基本4層にあたる。7層以下には基本4層で含まれるレンズ上に堆積した礫層の存在がある。この礫層は2D区の竪穴式建物跡の床面直下に厚く堆積する礫層あるいは2E区の流路跡の基盤をなす礫層と思われる。

2B区の遺構について

検出された遺構は、1～3棟の掘立柱建物跡を構成するとみられる柱穴95、土坑1である。

柱穴群はそれぞれのまとまりによって、3群に分けられるものと思われる。いずれも出土した土師器坏等遺物の様相から14世紀のものと考えられる。これらの柱穴群のうち、南東隅柱穴群と南壁沿い柱穴群は、調査区内の南あるいは南東に偏って位置しており、調査区内においてひとつとして完結する柱穴列がない。調査区外南側の現畠地の地下に遺構群が広がっていることは明らかである。

柱穴群の概要

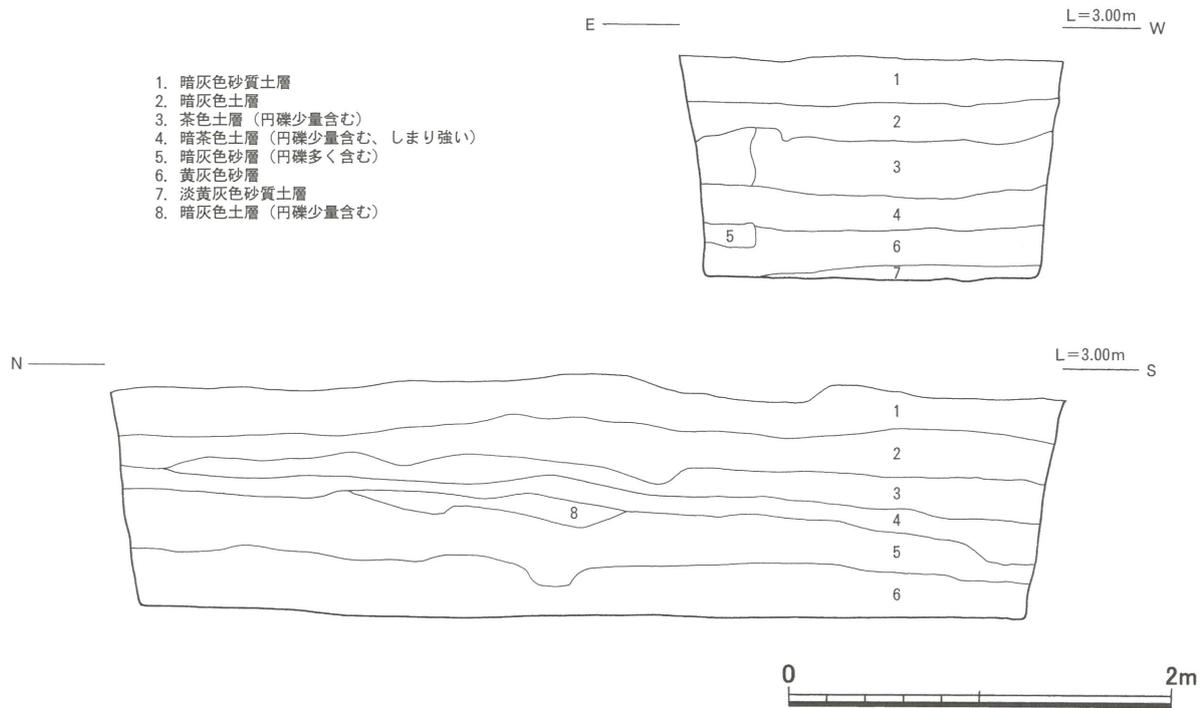
調査区南東隅柱穴群 (第41図 図版27～29) 南東隅柱穴群では柱穴群に混じって3基の比較的平面の大きいピットが検出された。三角形に配列された扇の要に当たる位置のピット1は内面に灰色系の粘質土、外縁に黒灰色系の砂質土という二重構造があった。ピット2によって切られている。ピット1からは奈良・平安時代の須恵器が出土しており、柱穴群から出土する土器が中世の土師器に限定されるのとは様相が違い、古代のものである可能性が高い。このピット群をかすめて南北に配列される柱穴列は直線的であるが、組み合う列や遺構はないように思われる。

調査区南壁沿い柱穴群 (第42図 図版27～29) 南壁沿い柱穴群は多彩な様相を見せているが、南に隣接する畠地に遺構が続くことがうかがわれるほかは得られる情報は少ない。

調査区中央柱穴群 (第43図 図版27～29) 中央柱穴群は東西に連なる柱穴列が直線的な配列で比較的まとまっている。その南北両側に散在する柱穴群については不明な点が多いと言わざるを得ない。ただ、東西に連なる柱穴列のすぐ南に位置する柱穴65(図版29中段)は古代の須恵器を包含する層を掘り込んで柱穴が掘られているようすを示している。また、同柱穴列の南に南北に散在するものうち柱穴75は穴の底に埋設された土師器皿があった。



第39図 2 B区遺構配置図 (S = 1/300)



第40図 2 B区トレンチ4土層断面実測図 (S = 1/40)

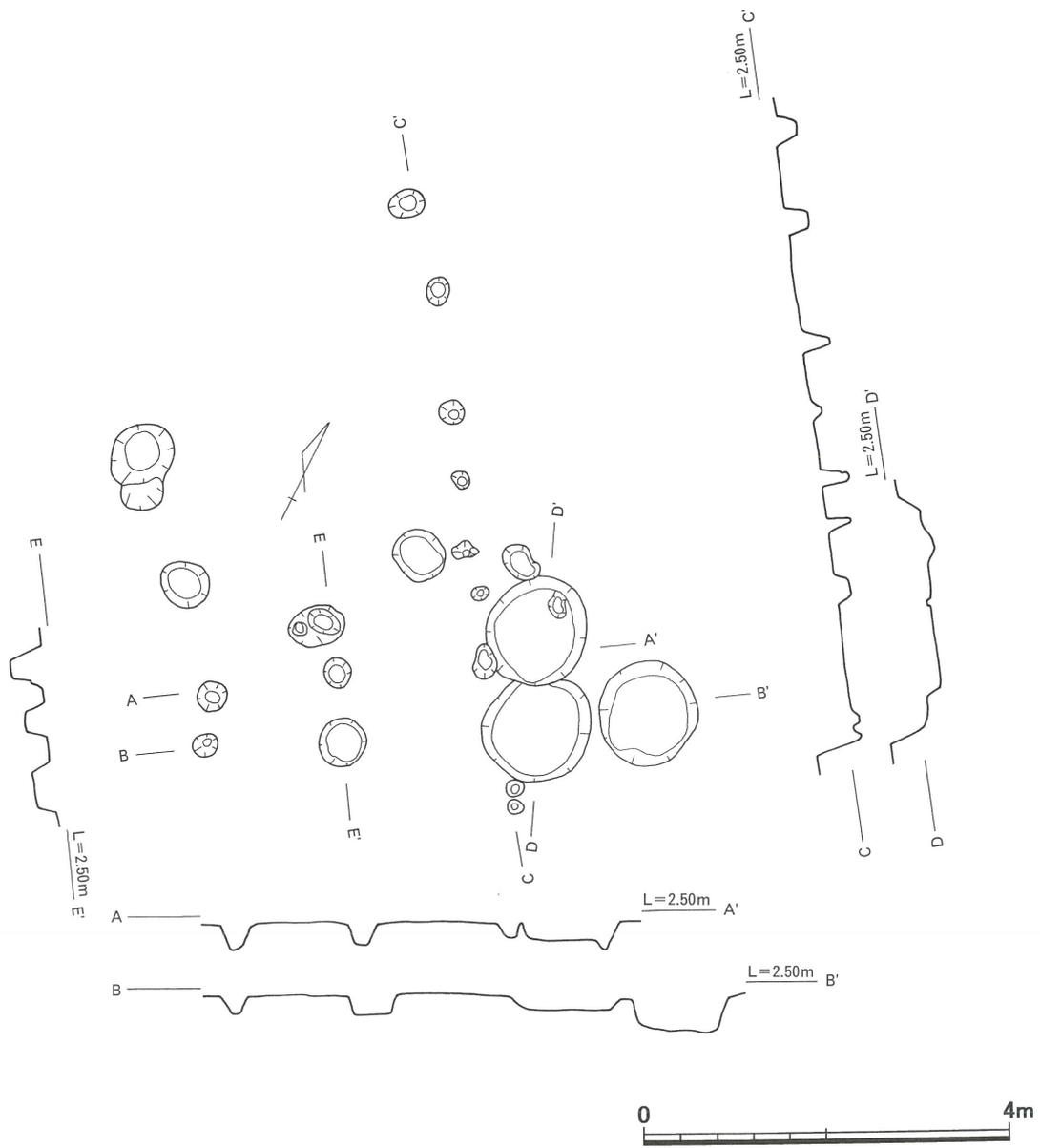
土坑 (第44図 図版30)

土坑は調査区の西側で検出され、柱穴群とは20m以上離れている。径約1m、深さ18cmの規模で、掘り込みの壁沿いに白色粘土を貼りめぐらせており、土坑の中には近世陶磁器、甕などが埋められていた。また、調査区外から持ち込まれた角張った石が出土している。

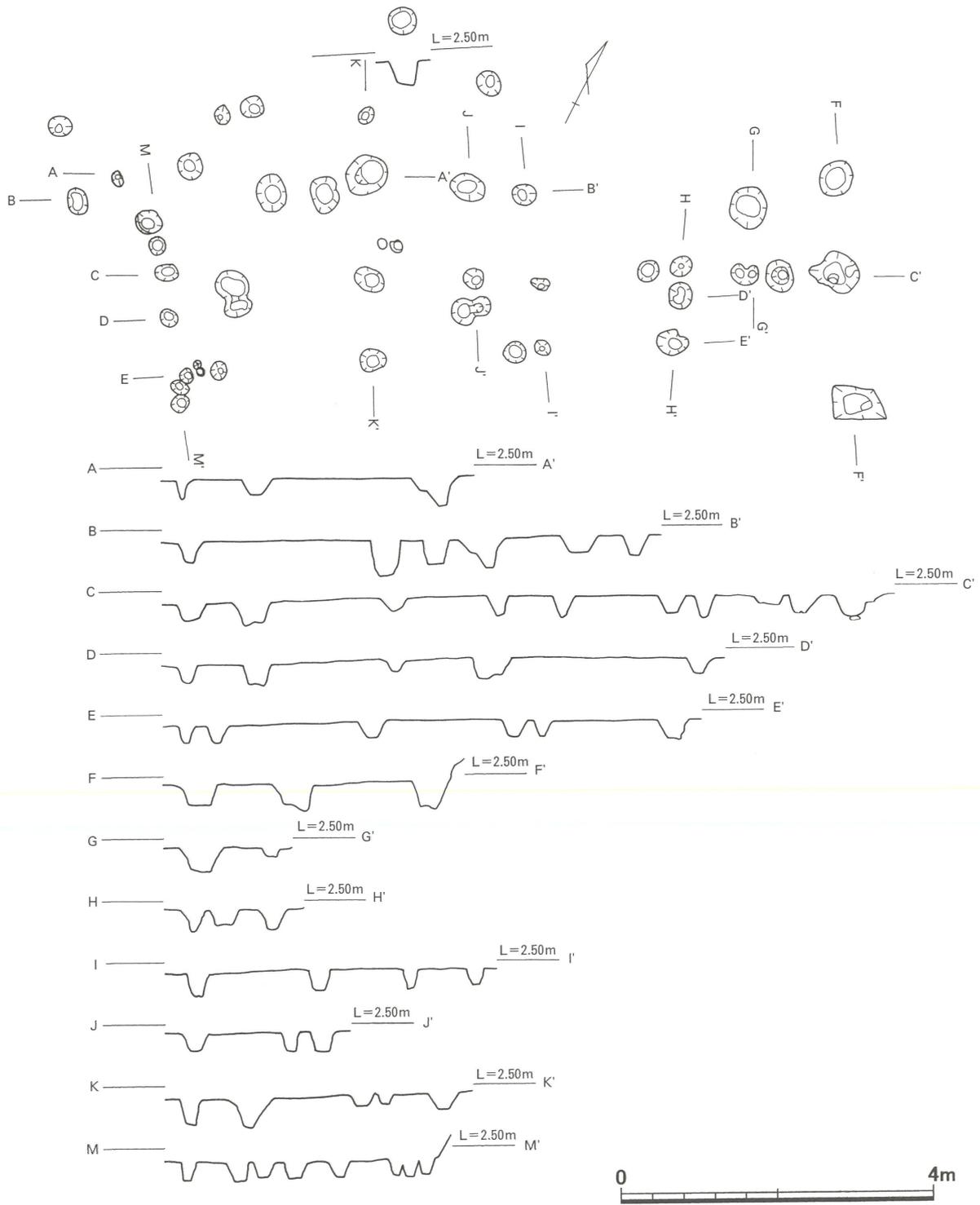
遺物の概要 出土遺物は総数47箱 (プラスチック製遺物収納用コンテナ540mm×340mm×148mm) であった。量的に主要なものは、第40図に示す2 B区土層の5層以下 (基本4層以下) から出土した古墳時代中期を中心とする土師器である。5層以下 (基本4層以下) には第47～48図に挙げたような相当量の弥生土器の混入が見られる。3・4層 (基本2・3層) からは第54図に挙げた須恵器や黒色土器、中世の土師器供膳具が出土している。

第45図及び図版31 (上段及び中段) に示したのは第49図に挙げた3点の土器の出土状況である。出土した層位は5層以下 (基本4層以下) であった。

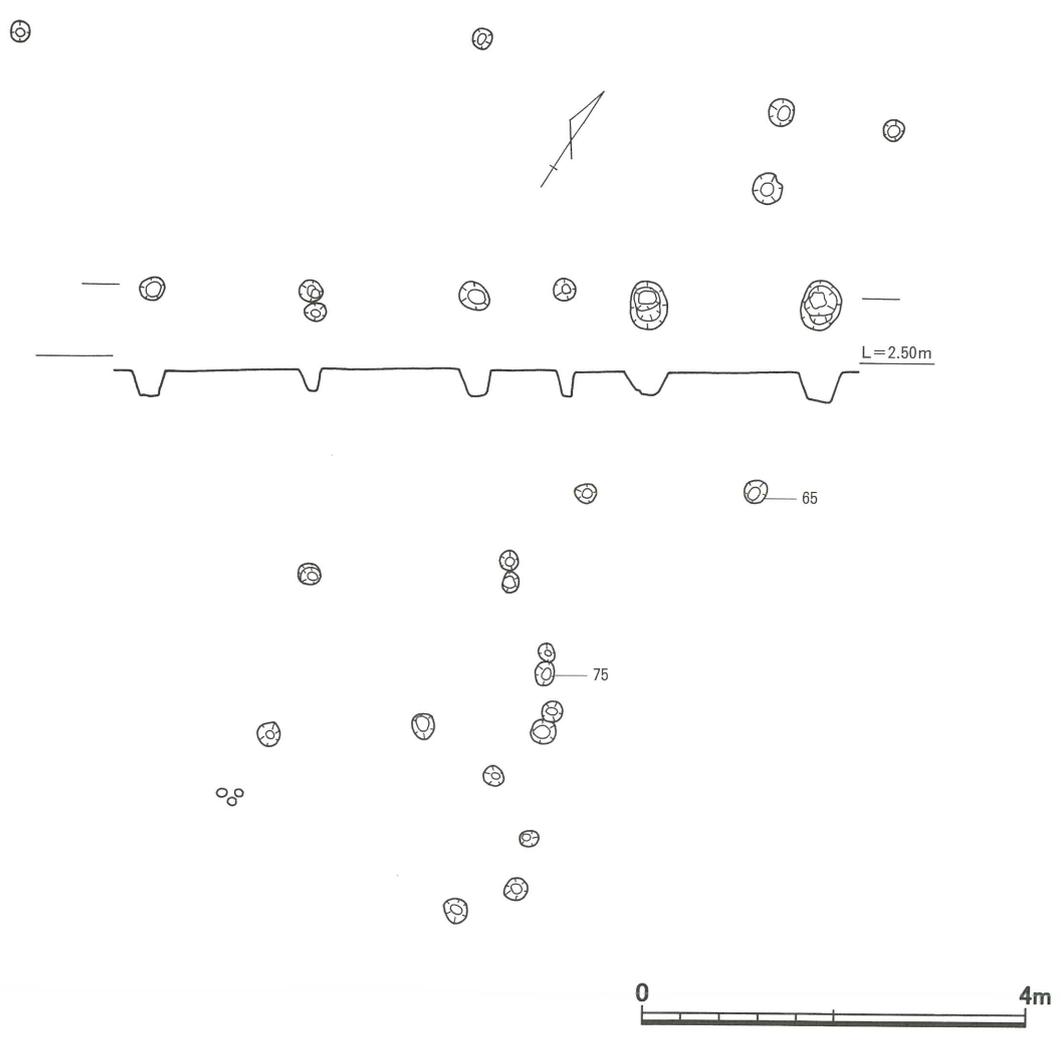
第49図2、3は高坏である。坏部は、体部中ほどで屈曲し、口縁部が外傾するという特徴から古墳時代中期のものと考えられる。第49図1は、底部に3個の円孔が穿たれており、甗と考えられる。全体にいびつで、口縁部と底部は平行となっていない。器壁も均一ではなく、凹凸が著しい。内面には削り調整、外面には粗いミガキ調整が施されている。弥生時代の可能性もあるが、器高の低い器形であることから、古墳時代のものと考えられる。共伴した高坏の特徴から古墳時代中期のものと考えられる。



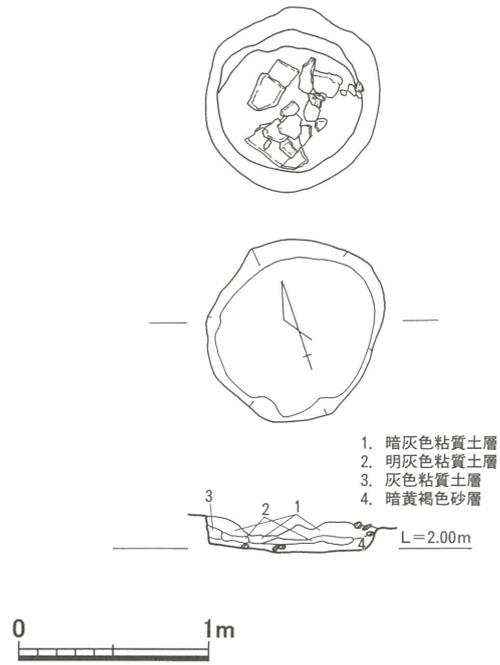
第41图 2B区柱穴群（南東隅）実測図（S=1/80）



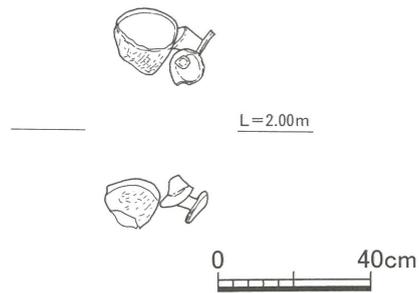
第42図 2 B区柱穴群（南壁沿い）実測図（S=1/80）



第43图 2 B区柱穴群（中央）实测图（S=1/80）



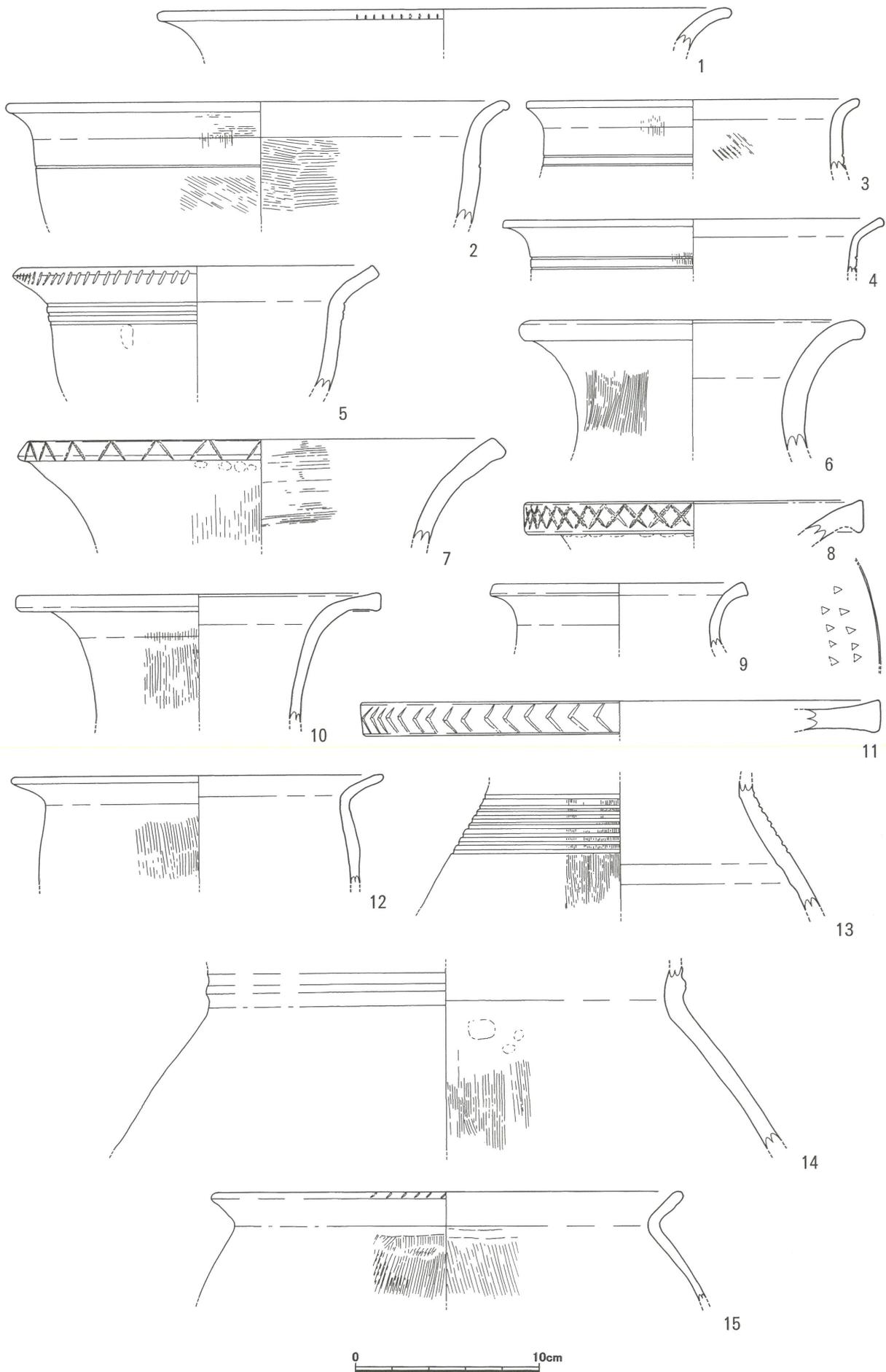
第44図 2 B区土坑実測図 (S = 1/40)



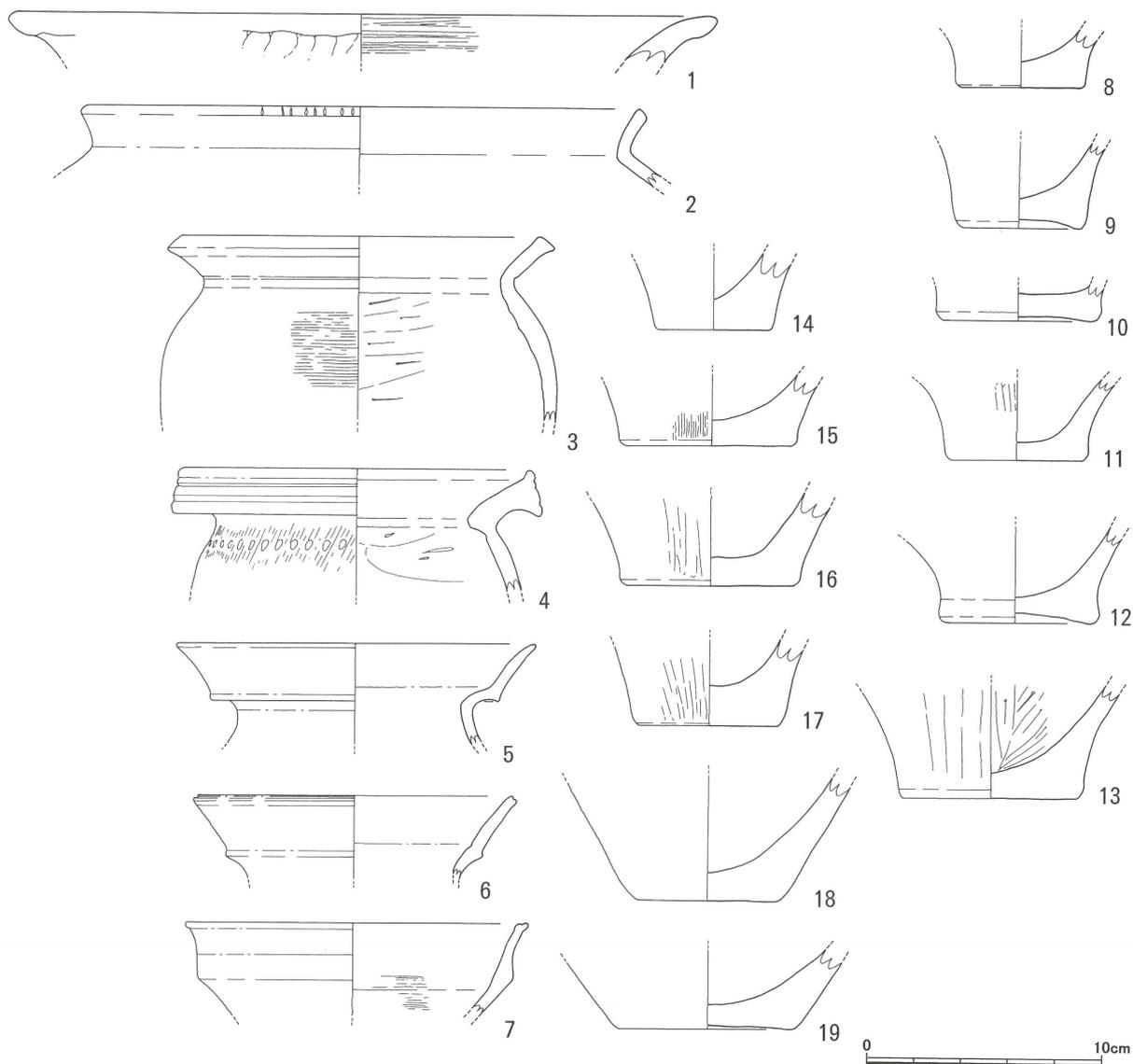
第45図 2 B区遺物出土状況実測図 (S = 1/20)



第46图 2 B区完掘测量图 (S = 1/300)



第47图 2 B区出土遺物実測图1 (S=1/3) (弥生土器)



第48図 2 B区出土遺物実測図2 (S=1/3) (弥生土器)

2 B区の出土遺物について

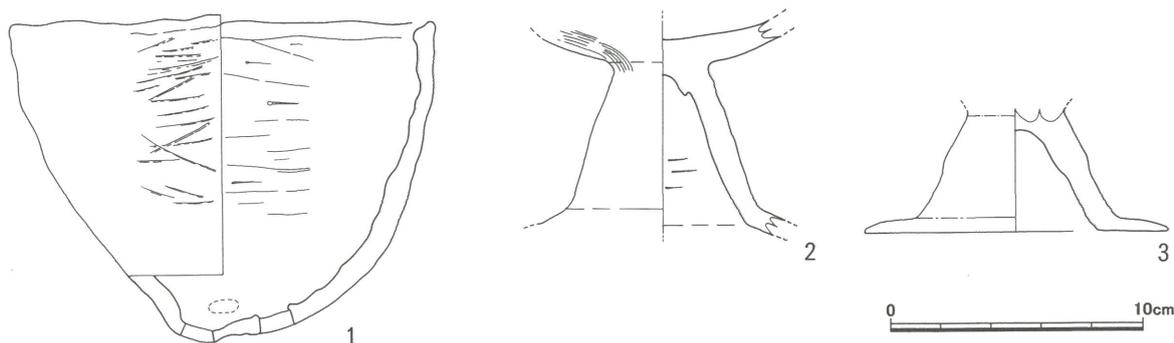
弥生土器 (第47~48図 図版33~34) 弥生時代前期から後期の土器が出土している。

第47図2~5は石見第I-2・3様式の甕である。胴部に1~3条のヘラ描きによる直線文が描かれ、5の口縁端部には刻み目文が施されている。1・12も甕であるが、胴部が無文のため詳細な時期は不明である。2~5と同様な器形であることから、I~II-1様式と思われる。1の口縁端部には、刻み目文が施されている。

同図6~11・13は、石見I~II様式の壺である。13は頸部から肩部にかけてヘラによる8条の沈線文が描かれており、石見第I-3様式である。6~11はI~II様式であるが、標致となる特徴がなく時期の特定ができない。口縁端部には、7に鋸歯文、8に格子文、11に羽状文が描かれている。また、11の内面には三角形刺突文が2列に配されている。

同図14は石見第III様式の壺である。頸部から肩部にかけての破片で、頸部には貼り付け突帯が付されている。

第47図15・第48図2は石見第III様式の甕である。ともに器壁は薄く、口唇部に刻み目を施す。



第49図 2 B区出土遺物実測図3 (S=1/3) (土師器甑、高坏)

第48図1は、第Ⅰ～Ⅱ様式に属すると推定されるが、時期不詳の土器である。甕あるいは壺の口縁部と思われるが、器種も不明である。胎土は白味を帯びており、黄色味の胎土である他の土器とは明らかに違う。搬入土器と考えられるが、産地は不明である。口縁直下に指押圧痕が規則的に並んでいるのが特徴的である。

第48図3～7は、石見第Ⅴ様式の土器である。3・4は甕で、ともに内面の削り調整が頸部まで施されていることから第Ⅴ-1様式と考えられる。3は単純口縁で、口縁端部がやや幅広に平坦面をなす。4は広く拡張された口縁部に、沈線文が3条施文される甕である。肩部には、刺突文が1列施されている。5は複合口縁の甕で、口縁端部が先細に作られていることから、第Ⅴ-4様式と判断される。6・7も複合口縁だが、口縁端部が平坦に作られていることから、古墳時代初頭の可能性もある。6は甕、7は壺である。

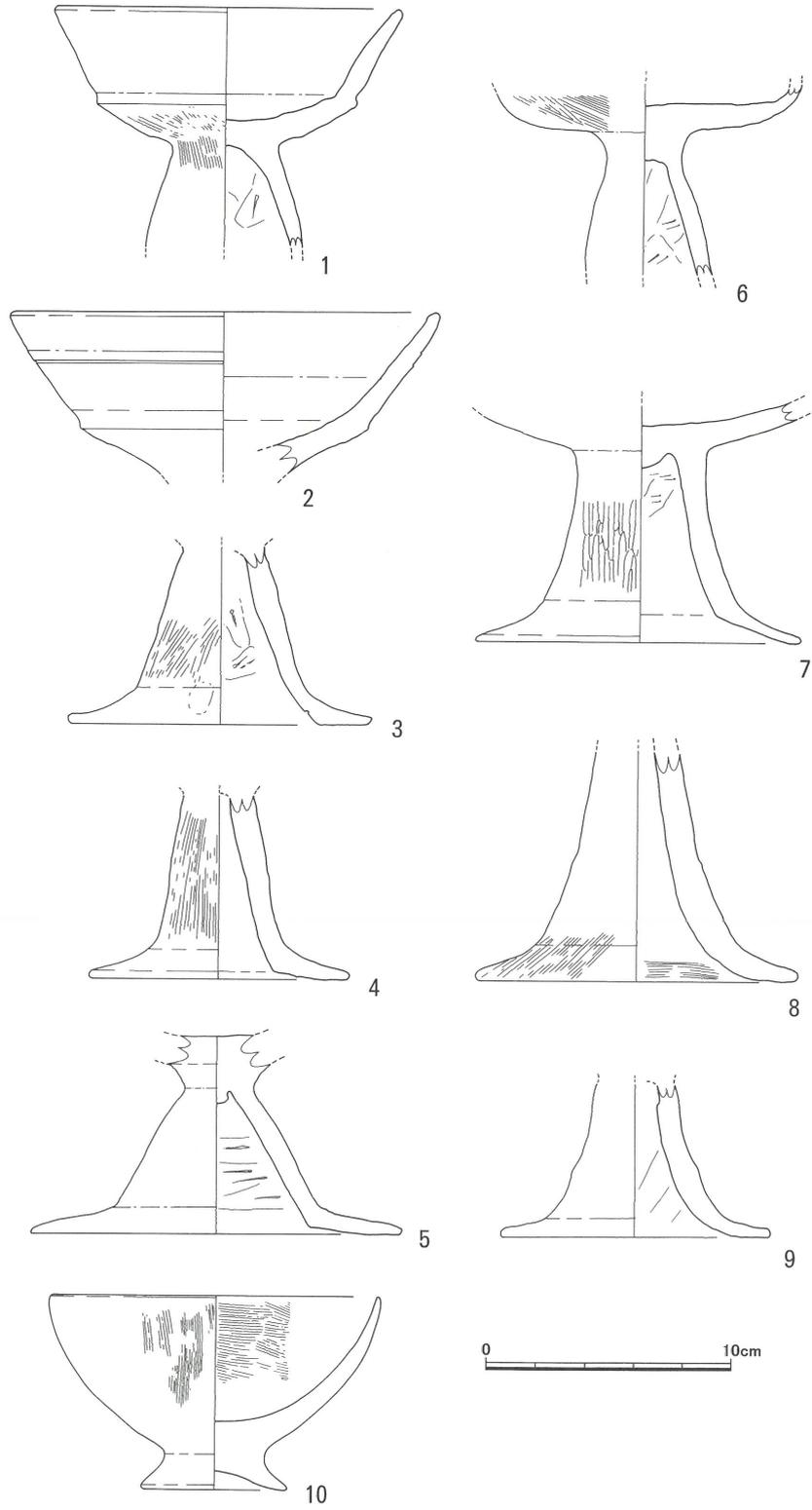
第48図8～19は、壺または甕の底部である。いずれもしっかりした平底で、上記の壺・甕の底部であろう。14は胎土が第47図2～4などと似ているので、第Ⅰ様式の可能性がある。8～12・15～19は内面に削り調整が施されていないことから第Ⅲ様式の可能性がある。13は内面に削り調整が施され、第Ⅴ様式と考えられる。

土師器 (第49～53図 図版34～38、40) 第49図1は、底部に3個の円孔が穿たれており、甑と考えられる。全体にいびつで、口縁部と底部は平行となっていない。器壁も均一ではなく、凹凸が著しい。内面には削り調整、外面には粗いミガキ調整が施されている。弥生時代の可能性もあるが、器高が低い器形であることから、古墳時代のものと考えた。

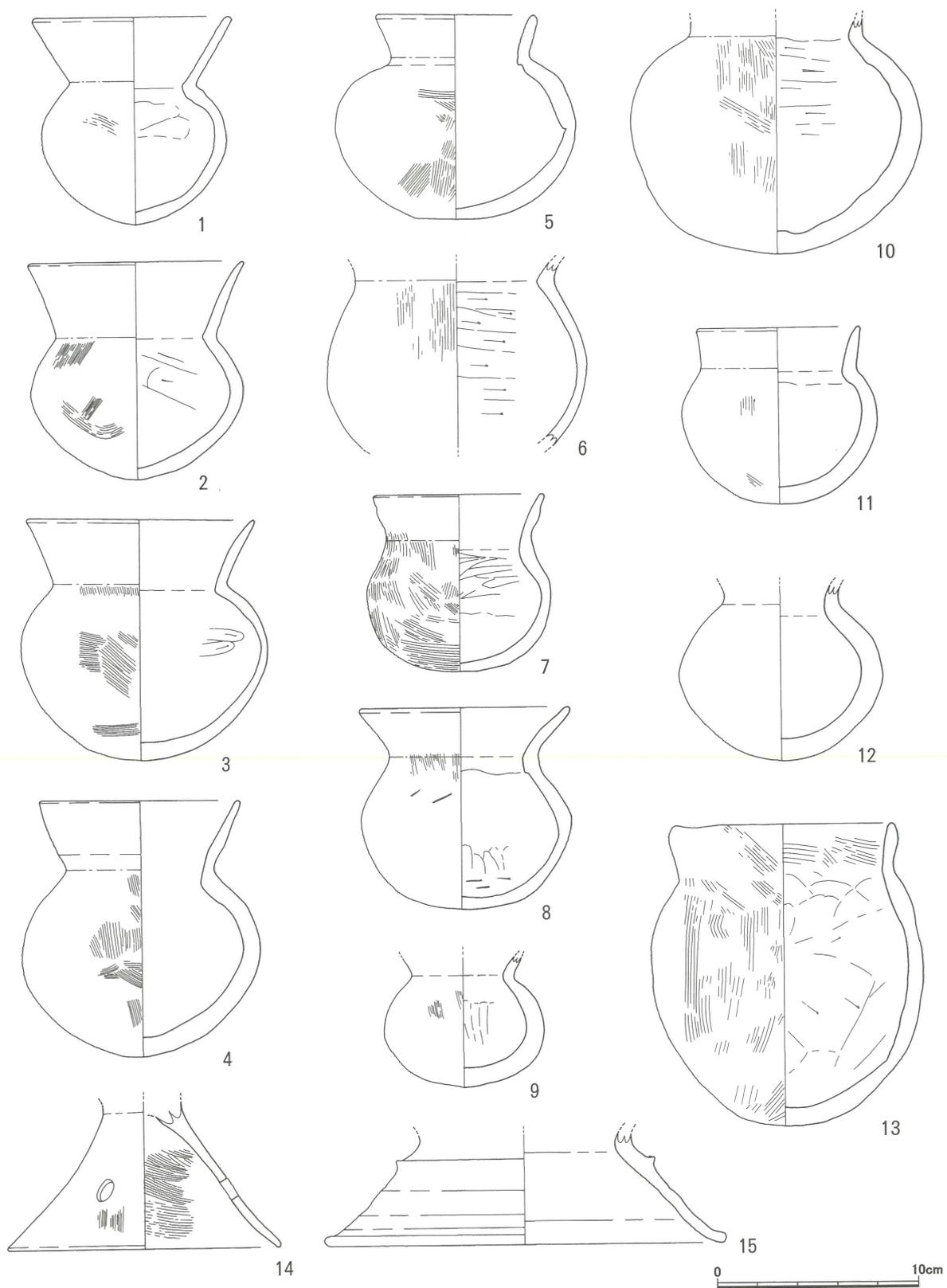
第49図2～50図9は高坏である。坏部は、体部中ほどで屈曲し、口縁部が外傾する(第40図1・2)。脚部は、脚端部が屈曲して大きく開く(第49図2・3、第50図3～9)。脚部の高さが低いもの(第49図3)、脚部上部径と下部径が極端にちがうもの(第50図5)、筒部径が太いもの(第50図7)など、バラエティに富んでいる。これらは古墳時代中期のものと考えられる。

第50図10は低脚坏である。口縁部が内湾する深身の坏に、「ハ」の字形に開く低い脚が付く。杯部内外面にはハケ目調整が施される。古墳時代前期から中期のものと思われる。

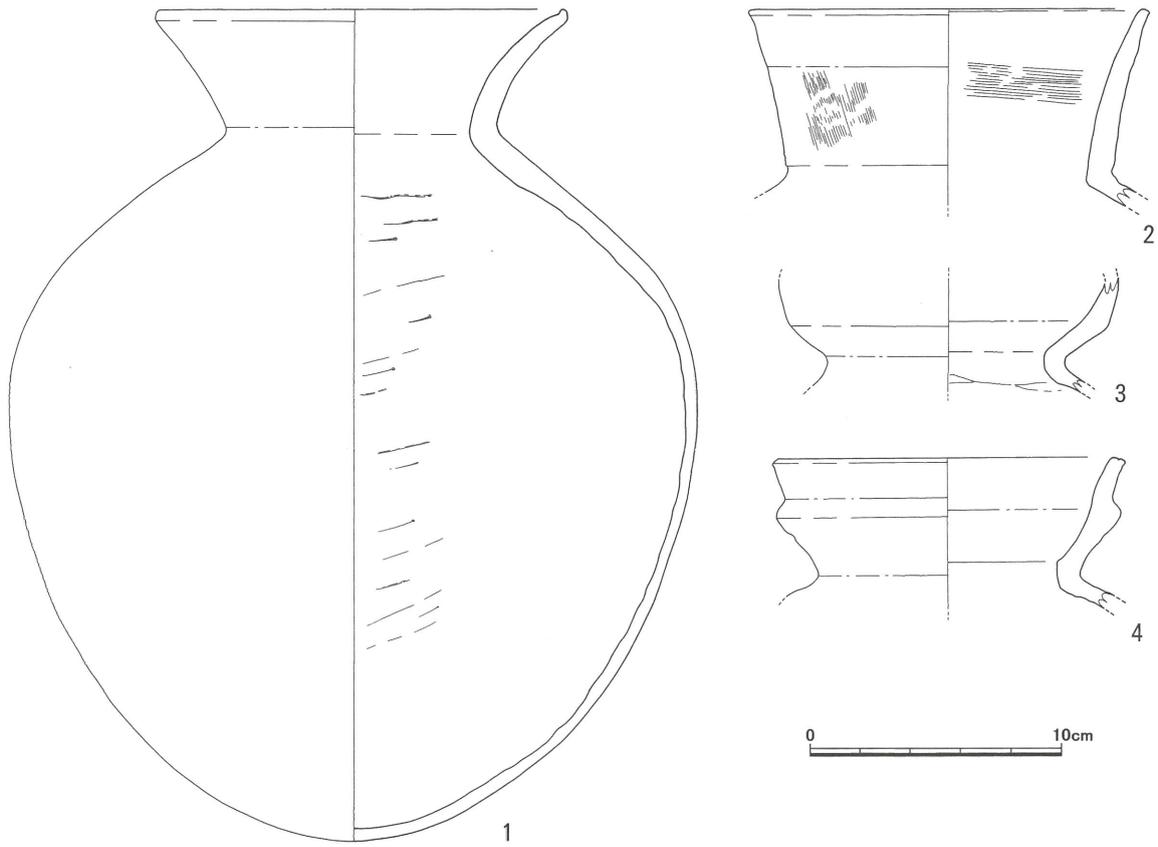
第51図1～13は小形壺で、いずれも丸底である。1は頸部が締め、口縁部がやや長く伸びる。2～4は頸部径が大きく口縁部はやや長く広がる器形、5～13は口縁部が短く伸びる器形である。1が古墳時代前期、その他は同中期のものと考えられる。



第50图 2 B区出土遺物実測図4 (S = 1/3) (土師器高坏、低脚坏)



第51図 2B区出土遺物実測図5 (S=1/3) (土師器小形丸底壺、壺、器台)

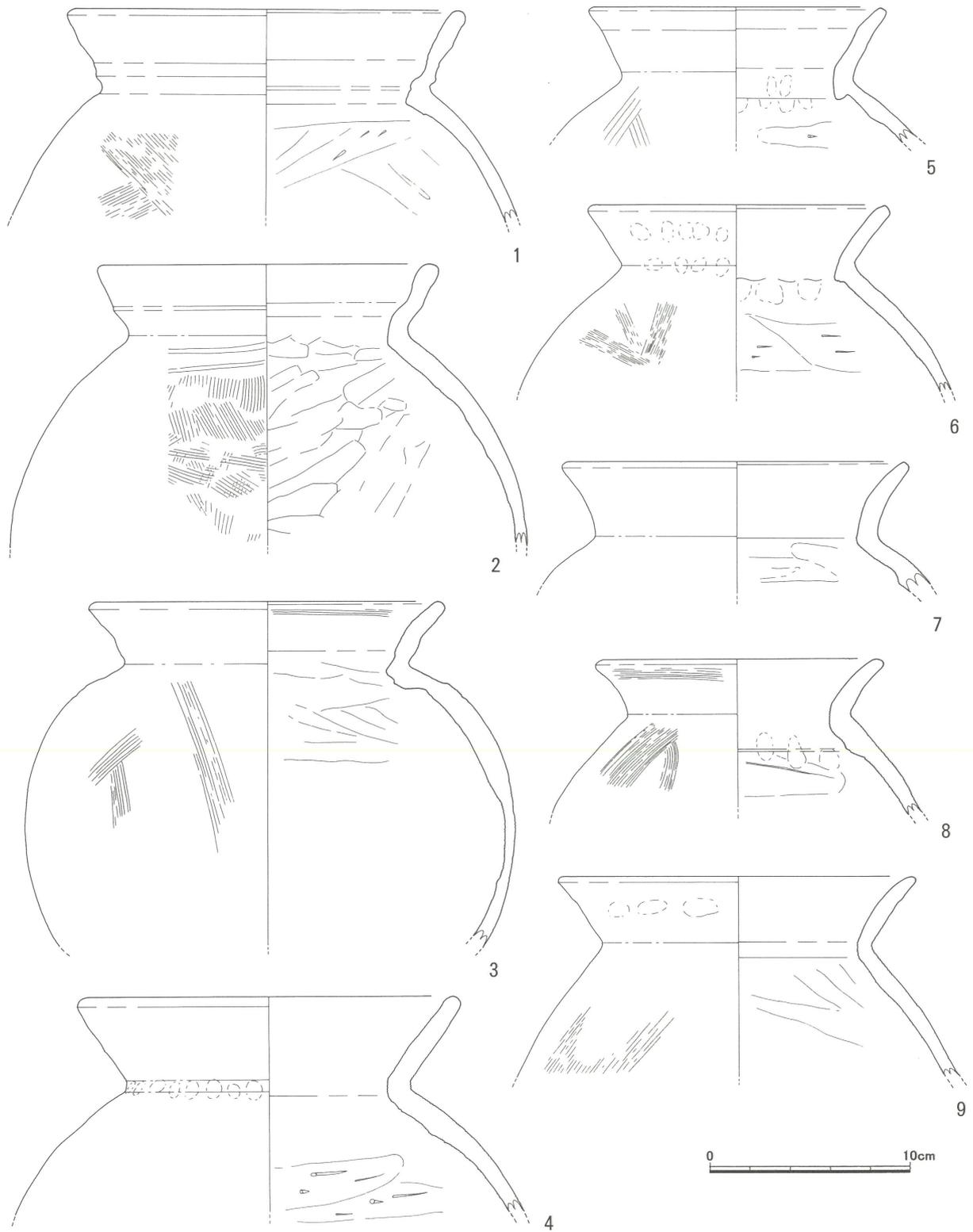


第52図 2 B区出土遺物実測図6 (S = 1/3) (土師器壺)

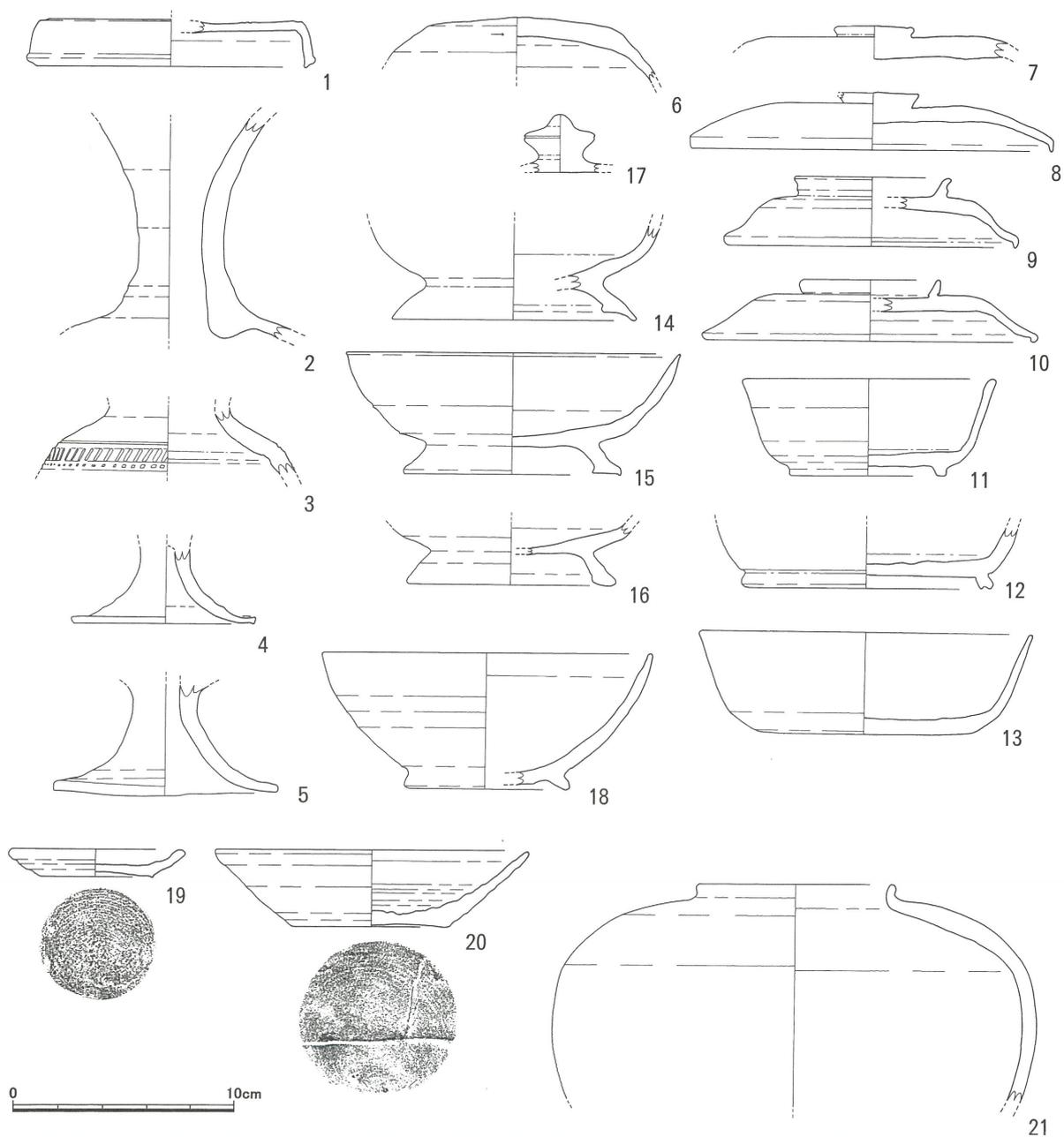
第51図14・15は器台である。14は脚部が「ハ」の字形に開き、3方に円形透かしが穿たれている。外面は縦位に細かいミガキ調整が、内面にはハケ目調整が施されている。15は、筒部が短い鼓形器台で、古墳時代前期のものと考えられる。

第52図1・2は単純口縁の壺である。口縁部は1が外反、2が直口気味に広がる。1はほぼ完形の土器で、やや長胴で丸底である。ともに古墳時代前期から中期にかけての土器である。

第52図3～第53図は甕である。第52図3～第53図1・2は複合口縁の甕で、いずれも屈曲部稜線が鈍くあいまいな表現となっている。第53図3～9は単純口縁の甕で、同図4が内湾気味に開くほかはいずれも外反する口縁である。胴部は同図3が強く張る器形だが、同図1・2・6・9などは3ほどには張らないようである。頸部内面には指押圧痕が残るもの(同図5・6・8)があり、内面の削りは頸部屈曲部よりやや下位の位置以下に施されている。第52図3～第53図1・2は古墳時代中期のもので、単純口縁の甕もほぼ同時期のものと考えられる。



第53図 2 B区出土遺物実測図7 (S=1/3) (土師器甕)

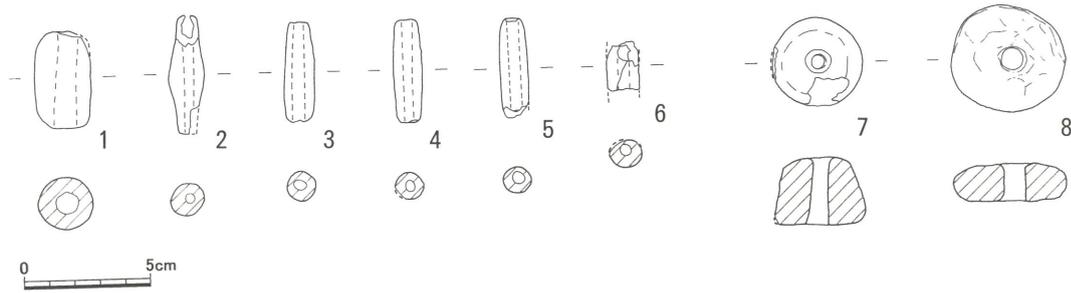


第54図 2 B区出土遺物実測図8 (S=1/3) (須恵器、黒色土器、土師器供膳具、陶器)

須恵器 (第54図1~17・21 図版39~40) 1は壺の蓋で、奈良時代のものであろう。天井部はほぼ平坦で、口縁部は直角に近く垂下する。端部は外傾する平坦面をなす。屈曲部は2条の凹線によって突線が作り出されている。天井部には2条の圈線が描かれ、中央に宝珠つまみが付けられた痕跡がある。

2は長頸壺である。頸部の接合痕は不明瞭だが、頸屈曲部の内面やや上位に接合部らしい痕跡が観察できる。肩部下端の破面は擬口縁のようにもみえ、3段接合の可能性もある。頸部の接合が3段接合なら、古墳時代後期までさかのぼる可能性がある。

3は礎である。肩部に凹線とそれに挟まれる形でヘラ状工具による刺突文が施文される。6世紀後半ごろのものと思われる。



第55図 2B区出土遺物実測図9 (S=1/3) (土錘)

4・5は無蓋高坏の脚部である。この直上に坏部が載ると考えられる。ともに径の小さな筒部から次第に開きつつ脚端部に至る器形で、透かしは穿たれていない。7世紀代のものと考えられる。

6は古墳時代の蓋で、天井部には比較的丁寧な回転ヘラ削り調整が施されている。6世紀後半のものと考えられる。

7～10は蓋である。7・8は天井部にボタン状の宝珠つまみをつける。8は全形を窺うことができる資料で、天井部から口縁端部近くにかけて緩やかに湾曲する。口縁端部は若干つまみ出され、断面嘴状を呈す。17は宝珠つまみで、比較的祖形をとどめている。これらは、7世紀末～8世紀前半までさかのぼるものである可能性がある。

9・10は輪状つまみがつく蓋である。8などに比べて器高が高く、口縁端部近くで「S」字状に屈曲する。口縁端部は若干つまみ出され、断面嘴状を呈す。8世紀後半～9世紀前半のものと考えられる。

14～16は坏で、高台は高く外方に踏ん張り、接地面は幅広に平坦面・凹面をなす。口縁部は内湾しながら大きく開く器形である。7世紀末～8世紀前半のものと考えられる。

11・12も有高台の坏だが、高台が低いものである。ともに高台は底部のやや内側に付き、口縁部は比較的急角度で直線的に外傾する。8世紀後半～9世紀前半のものと考えられる。

13は無高台の坏である。底部はヘラ切り痕が観察できるが不明瞭で、これが調整によるか、使用による摩滅かは不明である。また、底部外縁に削り様の平坦面があり、削りによる再調整の可能性がある。8世紀前半ころのもの可能性がある。

21は短径壺である。肩部は強く張り、口縁部は短く直口する。非常に丁寧な作りである。8世紀後半～9世紀前半のものと考えられる。

黒色土器・土師器 (第54図18～20 図版39) 18は、内黒の黒色土器である。底部には低い高台を付け、口縁部は内湾して大きく開く。内面および外面の口縁上半は磨き調整が施され、口縁下半は粗いナデ調整である。底部外面は削り調整が施されている。9～10世紀のものと考えられる。

19は土師器皿、20は同坏である。ともに口縁部は直線的に大きく開き、底部は回転糸切り未調整である。内面はロクロ目が顕著。中世のものと考えられる。

土製品 (第55図 図版40) 1～6は土錘である。いずれも管状土錘で、1が太形、2が中膨らみのほかは、細い円柱形をしている。7・8は土製の紡錘車である。7は断面形が台形をなす厚みのあるもので、8は円盤状の紡錘車である。

浜寄・地方遺跡砂丘上宅地部分（第5図2F区の北にあたる）工事中立会調査について

浜寄・地方遺跡で調査対象地としていた砂丘宅地部分については考古学的なデータを得るためにボーリング調査を浜寄会館隣接地で実施した。その結果2D区で検出された弥生時代から中世にかけての遺物包含層（第7図2区土層概念図基本2層～6層）がこの砂丘の地下まで続いていることがわかった。ボーリング調査地点においては、地表から当該包含層への到達まで9.43mを測る。

砂丘上のしかも宅地内という発掘調査にとって技術的に非常に困難を伴ううえ、橋脚の設置が予定されている道路計画幅の中で、包含層に到達するまで9m以上を掘削する必要があることから、本調査の実施は実質的に不可能であると思われ文化財課に協議したところ、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターに対し工事中立会調査の支持があった。文化財課から事業者である国土交通省に対して、平成16年10月25日付島教文財第518号文書でこの区画の工事施工前に協議して、橋脚工事施工中に島根県教育庁埋蔵文化財調査センター職員が立ち会って調査することを申し入れた。

その後この部分の工事受注者が大畑建設株式会社に決定し、平成17年1月5日から実質的な施工が開始されるに当たり事前に協議が行われた。島根県教育庁埋蔵文化財調査センターからは浜寄・地方遺跡の範囲内において前述の基本2層以下にある遺物包含層に施工が及ぶ場合、必要となることを伝え、橋脚工事の工程等を問い合わせた。大畑建設からは橋脚の施工位置等以下の3点が示された。

- ① 浜寄・地方遺跡の範囲とされるJR山陰線までと2F区の間には3か所の橋脚工事が予定されていること。
- ② それぞれの橋脚工事の工程がまちまちなので、そのつど立会が必要なこと。
- ③ 工事全体の概要と工程を示した地元説明用のパンフレットと詳細な工事図面を提供すること。

これにより、JR山陰線に近い浜寄・地方遺跡の東端から順に平成17年2月3日、7日、14日の3日間にそれぞれの橋脚の施工について立会調査することが決まった。調査は橋脚設置工事の初期工程で行われる大規模なボーリングで排出される噴出物を調査することを主に実施された。その結果各回の調査ともに遺物や遺構の断片などは検出されなかった。これをもって浜寄・地方遺跡の現地調査をすべて終了した。

第5表 2B区出土遺物観察表

挿図 番号	図版 番号	種別	器種	出土 地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
47-1	33	弥生土器	甕	2B区	5層	38.0	(2.9)		口縁部にキザミ 外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡茶褐	石見Ⅰ～ 石見Ⅱ-1	
47-2	33	弥生土器	甕	2B区	5層	26.8	(6.6)		外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	淡茶	石見Ⅰ-2・3	
47-3	33	弥生土器	甕	2B区	5層	17.7	(3.9)		外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	淡茶褐	石見Ⅰ-2・3	
47-4	33	弥生土器	甕	2B区	5層	20.2	(2.9)		外：ナデ 内：ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	淡白褐	石見Ⅰ-2・3	
47-5	33	弥生土器	甕	2B区	5層	19.2	(7.9)		口縁部にキザミ、 頸部に3条の沈線文 外：ナデ 内：ナデ	1～2mm程度の 砂粒を含む	良	黄褐	石見Ⅰ-2・3	
47-6	33	弥生土器	壺	2B区	5層	18.3	(7.2)		外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	1～4mm程度の 砂粒を含む	良	外黒 内淡褐	石見Ⅰ～Ⅱ	
47-7	33	弥生土器	壺	2B区	6層	25.2	(5.8)		口縁部に鋸歯文 外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	淡茶褐	石見Ⅰ～Ⅱ	
47-8	33	弥生土器	壺	2B区	5層	19.00	(1.8)		口縁部に斜格子文 外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	赤茶	内外面に赤彩 石見Ⅰ～Ⅱ	
47-9	33	弥生土器	甕	2B区	5層	13.3	(3.4)		外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡黒褐	石見Ⅰ～Ⅱ	
47-10	33	弥生土器	壺	2B区	6層	19.5	(7.1)		外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡黒茶	石見Ⅰ～Ⅱ	
47-11	33	弥生土器	壺	2B区	1層	28.0	(1.8)		口縁部外面に鋸歯 文、口縁部上面に 刺突文 外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡茶褐	石見Ⅰ～Ⅱ-1 様式	
47-12	33	弥生土器	甕	2B区		20.0	(6.0)		外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡褐	石見Ⅰ～Ⅱ	
47-13	33	弥生土器	壺	2B区	5層		(6.8)		体部に8条の沈線 文 外：ハケメ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	淡茶褐	石見Ⅰ-3	
47-14	33	弥生土器	壺	2B区	5層		(10.1)		外：ナデ、ハケメ？ 内：ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	淡茶褐	石見Ⅲ	
47-15	33	弥生土器	甕	2B区	5層	25.0	(5.8)		口縁部にキザミ 外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	淡茶	石見Ⅲ	
48-1	34	弥生土器	甕か甕	2B区	5層	29.0	(2.0)		口縁部直下に指頭 圧痕がめぐる 外：ナデ 内：ナデ、ハケメ	1mm前後の砂粒 を多く含む	良	白	石見Ⅰ～Ⅱ？	
48-2	34	弥生土器	甕	2B区	5層	23.0	(2.8)		口縁部にキザミ 外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡白褐	石見Ⅲ	
48-3	34	弥生土器	甕	2B区	5層	15.0	(8.0)		外：ナデ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	淡白褐	石見Ⅴ-1	
48-4	34	弥生土器	壺	2B区	5層	14.8	(5.2)		口縁部に凹線3条、 頸部に列点文 外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ケズリ	1～3mm程度の 砂粒を含む	良	黄褐	石見Ⅴ-1	
48-5	34	弥生土器	壺	2B区	5層	15.0	(4.3)		外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	茶褐	石見Ⅴ-4	
48-6	34	弥生土器	甕	2B区	5層	13.2	(3.7)		口唇部に凹線が1 条めぐる 外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡茶褐	古墳時代初頭？	
48-7	34	弥生土器	壺	2B区	5層	14.00	(4.1)		口唇部に凹線が21 条めぐる 外：ナデ 内：ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	淡白褐	古墳時代初頭	
48-8		弥生土器	甕か壺	2B区	5層		(2.5)	5.0	外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡赤茶	底部のみ 石見Ⅲ？	
48-9		弥生土器	甕か壺	2B区	5層		(3.5)	5.0	外：ナデ 内：ナデ	密	良	淡茶褐	底部のみ 石見Ⅲ？	
48-10		弥生土器	甕か壺	2B区	5層		(1.6)	6.3	外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡赤褐	内面に煤付着 底部のみ 石見Ⅲ？	
48-11		弥生土器	甕か壺	2B区	5層		(3.5)	5.6	外：ヘラミガキ？ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡黒褐	底部のみ 石見Ⅲ？	
48-12		弥生土器	甕か壺	2B区	5層		(4.1)	6.0	外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡黒茶	底部のみ 石見Ⅲ？	
48-13		弥生土器	甕か壺	2B区	5層		(4.8)	7.4	外：ケズリ、ナデ 内：ケズリ	微粒子を含む	良	淡褐	煤が付着 底部のみ 石見Ⅴ	
48-14		弥生土器	甕か壺	2B区	5層		(3.3)	4.7	外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡赤茶	底部のみ 石見Ⅰ？	

挿図 番号	図版 番号	種別	器種	出土 地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
48-15		弥生土器	甕か壺	2 B区	5層		(3.1)	7.0		外：ハケメ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡黒褐	底部のみ
48-16		弥生土器	甕か壺	2 B区	5層		(4.1)	7.0		外：ヘラミガキ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡黒褐	底部のみ
48-17		弥生土器	甕か壺	2 B区	5層		(3.2)	5.9		外：ヘラミガキ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡茶	底部のみ
48-18		弥生土器	甕か壺	2 B区	5層		(5.3)	6.0		外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	淡茶褐	底部のみ
48-19		弥生土器	甕か壺	2 B区	5層		(3.3)	7.4		外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	外 淡赤茶 内 淡茶褐	底部のみ
49-1	34	土師器	甕	2 B区	5層	15.3~ 17.0	13.0		底部に穿孔あり	外：ナデ、粗いハケメ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	赤茶	古墳時代中期
49-2	34	土師器	高坏	2 B区	5層		(8.6)			外：ハケメ、ナデ 内：ナデ、ケズリ、ハケメ	1mm程度の砂粒を含む	良	黄褐	古墳時代中期
49-3	34	土師器	高坏	2 B区	5層		(5.0)	11.9		外：ナデ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	褐	古墳時代中期
50-1	35	土師器	高坏	2 B区	5層	13.9	(19.9)			外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	淡赤褐	古墳時代中期
50-2	35	土師器	高坏	2 B区		17.2	(6.6)			外：ヨコナデ、ナデ 内：ナデ	1~3mm程度の砂粒を含む	良	外 淡黒褐 内 黄褐	古墳時代中期
50-3	35	土師器	高坏	2 B区	5層		(7.3)	13.3		外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	黄褐	古墳時代中期
50-4	35	土師器	高坏	2 B区			(7.7)	10.5		外：ハケメ、ナデ 内：ケズリ後ナデ	微粒子を含む	良	黄褐	古墳時代中期
50-5	35	土師器	高坏	2 B区			(8.1)	15.0		外：ナデ 内：ナデ、ケズリ	1~3mm程度の砂粒を含む	良	黄褐	古墳時代中期
50-6	35	土師器	高坏	2 B区			(7.9)			外：ナデ、ハケメ 内：ケズリ	微粒子を含む	良	明褐	古墳時代中期
50-7	35	土師器	高坏	2 B区	5層		(9.9)	13.4		外：ナデ、ヘラミガキ、ハケメ 内：ナデ、ケズリ	1~2mmの砂粒を含む	良	明褐	古墳時代中期
50-8	35	土師器	高坏	2 B区			(9.4)	12.9		外：ナデ、ハケメ 内：ケズリ後ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	黄褐	古墳時代中期
50-9	35	土師器	高坏	2 B区	5層		(6.3)	10.9		外：ナデ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	暗黄褐	古墳時代中期
50-10	35	土師器	低脚付碗	2 B区	5層	13.3	8.0	5.8		外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	淡黒茶	古墳時代前期~ 中期
51-1	36	土師器	小形壺	2 B区		10.0	10.4		丸底	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	明褐	古墳時代前期
51-2	36	土師器	小形壺	2 B区		10.80	11.0		丸底	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ヘラケズリ	微粒子を含む	良	淡赤褐	古墳時代中期
51-3	36	土師器	小形壺	2 B区		11.4	12.1		丸底	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ヘラケズリ、ハケメ	1~2mm程度の砂粒を多く含む	良	橙	古墳時代中期
51-4	36	土師器	小形壺	2 B区		10.0	12.9		丸底	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒を多く含む	良	橙	古墳時代中期
51-5	36	土師器	小形壺	2 B区		7.9	10.2	3.0	丸底	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ハケメ	1~3mm程度の砂粒を含む	良	橙	古墳時代中期
51-6	36	土師器	小形甕	2 B区			(9.3)		丸底	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	淡黒茶	煤が付着 古墳時代中期
51-7	36	土師器	小形壺	2 B区		8.2	8.9		丸底	外：ヨコナデ、ハケメ 内：ヨコナデ、ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良	橙	古墳時代中期
51-8	36	土師器	小形壺	2 B区		10.4	10.2		丸底	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	明茶褐	古墳時代中期
51-9	37	土師器	小形壺	2 B区			(6.4)		丸底	外：ナデ 内：ナデ	微粒子を含む	良	茶	古墳時代中期
51-10	37	土師器	小形壺	2 B区			(12.8)		丸底	外：ナデ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	淡茶褐	古墳時代中期
51-11	37	土師器	小形壺	2 B区		7.8	8.9		丸底	外：ナデ 内：ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	淡茶	古墳時代中期
51-12	37	土師器	小形壺	2 B区			(8.8)		丸底	外：ナデ 内：ケズリ	微粒子を含む	良	赤茶	古墳時代中期
51-13	37	土師器	小形甕	2 B区		11.1	15.1			外：ハケメ 内：ハケメ、ケズリ	1~4mm程度の砂粒を多く含む	良	外 明赤褐~橙 内 橙	雑な成形

挿図 番号	図版 番号	種 別	器 種	出土 地点	層位	寸 法 (cm)			形態・文様の特徴	調 整	胎 土	焼成	色 調	備 考
						口径	器高	底径						
51-14	37	土師器	器台	2 B区	3層		(7.4)	13.5	円形透かし (3方向)	外: ナデ、ハケメ 内: ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	淡白褐	古墳時代前期
51-15	37	土師器	器台	2 B区	3層		(5.6)	19.9	筒部が短いタイプ	外: ナデ 内: ケズリ後ナデ	微粒子を含む	良	黄褐	古墳時代前期
52-1	40	土師器	壺	2 B区		16.0	33.4			外: ナデ 内: ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	茶褐	古墳時代前期～ 中期
52-2	40	土師器	壺	2 B区		15.9	7.9			外: ナデ、ハケメ 内: ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	赤褐	古墳時代前期～ 中期
52-3	40	土師器	壺	2 B区			(4.6)			外: ナデ 内: ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	淡茶褐	古墳時代中期
52-4	40	土師器	壺	2 B区		13.90	(6.1)			外: ナデ 内: ナデ、ケズリ	1～2mm程度の 砂粒を含む	良	黄褐	古墳時代中期
53-1	38	土師器	甗	2 B区		19.9	(10.7)			外: ナデ、ハケメ 内: ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	淡黒褐	古墳時代中期
53-2	38	土師器	甗	2 B区		16.8	(14.3)			外: ヨコナデ、ハケメ 内: ヨコナデ、ヘラケズリ	1mm程度の砂粒 を含む	良好	橙～明赤褐	古墳時代中期
53-3	38	土師器	甗	2 B区		18.7	(17.4)			外: ナデ、ハケメ 内: ハケメ、ケズリ、ナデ	微粒子を含む	良	黄褐	古墳時代中期
53-4	38	土師器	甗	2 B区		18.9	(10.8)		頸部に指押圧痕が 巡る	外: ナデ 内: ナデ	2～3mmの砂粒 を含む	良	黄褐	古墳時代中期
53-5	38	土師器	壺	2 B区		14.7	(7.8)			外: ナデ、ハケメ 内: ナデ、ケズリ	1～4mm程度の 砂粒を含む	良	褐	古墳時代中期
53-6	38	土師器	壺	2 B区		15.1	(9.4)			外: ナデ、ハケメ 内: ナデ、ケズリ	1～3mm程度の 砂粒を含む	良	黄褐	古墳時代中期
53-7	38	土師器	甗	2 B区		17.3	(7.6)			外: ナデ 内: ナデ、ハケメ	微粒子を含む	良	黄褐	古墳時代中期
53-8	38	土師器	壺	2 B区		14.3	(7.8)			外: ハケメ 内: ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	明褐	煤が付着 古墳時代中期
53-9	38	土師器	壺	2 B区		17.7	(10.0)			外: ナデ、ハケメ 内: ナデ、ケズリ	微粒子を含む	良	赤褐	煤が付着 古墳時代中期
54-1	39	須恵器	壺の蓋	2 B区	2・ 3層	12.1	2.1		天井部に圏線が入 る	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	1mm程度の砂粒 を含む	良好	灰	奈良時代
54-2	39	須恵器	長頸壺	2 B区			(10.1)			外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	良	青灰	古墳時代後期～
54-3	39	須恵器	甗	2 B区	3層		(3.0)		体部に刻み目と3 条の沈線が入る	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	良	青灰	6世紀後半
54-4	39	須恵器	無蓋高坏	2 B区			(3.4)	8.4		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	良	黒	7世紀代
54-5	39	須恵器	無蓋高坏	2 B区	3層		(5.0)	10.2		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	1mm以下の砂粒 を多く含む	不良	灰白	7世紀代
54-6	39	須恵器	坏蓋	2 B区	3層		(3.0)			外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	1～2mmの砂粒 を多く含む	やや 不良	灰白	6世紀後半
54-7	39	須恵器	蓋	2 B区	3層		(1.5)		ボタン状摘み	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	1～2mm程度の 砂粒を含む	良	青灰	7世紀末～ 8世紀前半
54-8	39	須恵器	蓋	2 B区	3層	16.2	2.6		ボタン状摘み	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	1mm以下の砂粒 を多く含む	良好	外 灰白～緑 内 灰白	外面に自然釉が付着 7世紀末～8世紀前 半
54-9	39	須恵器	蓋	2 B区	3層	12.9	3.2		輪状摘み	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ、ナデ	密	良好	外 青灰～黒 内 青灰	8世紀後半～ 9世紀前半
54-10	39	須恵器	蓋	2 B区	3層	14.8	2.8		輪状摘み	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ、ナデ	密	良好	灰	8世紀後半～ 9世紀前半
54-11	39	須恵器	高台付坏	2 B区		11.0	4.4	7.0		外: 回転ナデ、ナデ 内: 回転ナデ、ナデ	1mm以下の砂粒 を多く含む	良好	灰白～灰	8世紀後半～ 9世紀前半
54-12	39	須恵器	高台付坏	2 B区	3層		(2.8)	11.3		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	やや良	灰青	8世紀後半～ 9世紀前半
54-13	39	須恵器	坏	2 B区		14.8	4.7	9.8		外: 回転ナデ 内: 風化により不明	1mm以下の砂粒 を多く含む	不良	灰白	8世紀前半
54-14	39	須恵器	高台付坏	2 B区			(4.3)	10.9		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	良	黒灰	7世紀末～ 8世紀前半
54-15	39	須恵器	高台付坏	2 B区		15.0	5.5	9.6		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	1～3mm程度の砂 粒を含む	良	暗青灰	7世紀末～ 8世紀前半
54-16	39	須恵器	高台付坏	2 B区	3層		(2.9)	9.1		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	1～2mmの砂粒を 含む	不良	灰白	7世紀末～ 8世紀前半

挿図 番号	図版 番号	種別	器種	出土 地点	層位	寸法 (cm)			形態・文様の特徴	調整	胎土	焼成	色調	備考
						口径	器高	底径						
54-17	39	須恵器	蓋摘み	2 B区	3層		(2.7)		宝珠摘み	外：ナデ 内：回転ナデ	密	良	青灰	7世紀末～ 8世紀前半
54-18	39	黒色土器	高台付碗	2 B区	3層	14.8	6.2	7.2		外：回転ナデ 内：回転ナデ	1～3mmの砂粒を 含む	良	外 淡黄褐 内 黒	9～10世紀
54-19	40	土師器	皿	2 B区		7.6	1.3	5.1		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良	明褐	底部は回転糸切り 13 C代
54-20	40	土師器	坏	2 B区	3層	13.9	3.5	7.0		外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良	淡褐	底部は回転糸切り 13 C代
54-21	40	須恵器	短頸壺	2 B区	3層	8.7	(9.8)			外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	良好	外 褐灰～黒褐 内 暗褐 灰	8 C後半～9 C 前半
55-1	40	土製品	土錘	2 B区	3層	現存長 4.0	最大幅 2.3	孔径 0.9	管状土錘 太形		1mm程度の砂粒を多 く含む、2mm程度の 砂粒を僅かに含む	良	灰白～にぶい橙	
55-2	40	土製品	土錘	2 B区	2層	現存長 4.8	最大幅 1.4	孔径 0.4	管状土錘 中膨み		1mm以下の砂粒を 少量含む	良	橙	
55-3	40	土製品	土錘	2 B区	3層	現存長 4.1	最大幅 1.2	孔径 0.6	管状土錘 細い円柱形		1mm以下の砂粒を 含む	良好	にぶい黄橙～に ぶい橙	
55-4	40	土製品	土錘	2 B区	2層	現存長 4.2	最大幅 1.2	孔径 0.5	管状土錘 細い円柱形		1mm程度の砂粒を 多く含む	良	にぶい黄橙	
55-5	40	土製品	土錘	2 B区	3層	現存長 4.1	最大幅 1.2	孔径 0.6	管状土錘 細い円柱形		1mm以下の砂粒を 含む	良好	灰白	赤彩あり
55-6	40	土製品	土錘	2 B区	2層	現存長 2.0	最大幅 1.4	孔径 0.5	管状土錘 細い円柱形		1mm未満の砂粒を 多く含む、2～4mm の砂粒を少量含む	良	橙	
55-7	40	土製品	紡錘車	2 B区	2層	最大幅 3.6	最大厚 2.8	孔径 0.7	断面台形		1～4mmの砂粒を 多く含む	良好	浅黄橙	
55-8	40	土製品	紡錘車	2 B区	1層	最大幅 4.3	最大厚 1.5	孔径 0.9	円盤状		1mm程度の砂粒を 僅かに含む	良好	明赤褐	

第2節 2D区の調査

1. 調査の概要

2D区は市道蟠竜湖高津線より北東側の平坦地に設定した調査区である。調査前は主に宅地・畑地として利用されていた。

調査は平成15年8月より開始した。調査期間は当初5ヶ月を予定していたが、その途中で想定していたよりさらに深い地点にも遺物が存在することが確認されたため、期間を延長することとなった。最終的に調査が終了したのは平成16年9月である。

調査の結果、弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器などが多量に出土したほか、木製品もわずかながら出土した。また顕著な遺構はほとんど確認できなかったが、調査区を東西方向に伸びる、河道跡などが検出された。

基本層序

2D区では最終面と判断した面まで、5層の基本的な層が認められた。基本的な層序の概要は以下のとおりである。

- 1層 —— 主に褐色系の土。調査前には畑等の耕作土としての利用がされていた。
- 2層 —— 主に暗褐色系の土で、小礫を含む。
- 3層 —— 主に暗褐色系の土で、小礫を含む。
- 4層 —— 主に灰色系の砂質土・礫・砂から形成される。過去の洪水に由来すると考えられる層。
- 5層 —— 主に黒褐色系の砂質土。肌理の細かな砂質土からなる層で、ほとんど礫を含まない。

なお、当初6層と判断した主に黒色系の土については、最終面である礫層の上で一部確認できるものの、基本的には河道跡に堆積した層であることが判明したため、河道跡の報告のところで行うこととする。

2. 1層の調査の概要

1層は前述のとおり耕作土などの層であり、基本的に重機により除去した。顕著な遺構は確認できなかった。また出土遺物はそのほとんどが明治以降のものであった。

3. 2・3層の調査

調査の概要

2・3層は別の時期の層と判断していたが、色調の違いは認められるものの、最終的に同時期と判断した層である。2・3層からは主に土師器・須恵器・陶器・磁器が出土した。遺構は調査区の中央付近で建物跡の可能性のあるピット群を確認した。

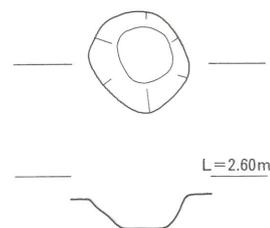
検出遺構とそれに伴う遺物

ピット群

調査区中央付近で建物跡の可能性のあるピット群を検出した。ピットは全部で11基確認したが、主に検出した範囲より西側については、トレンチ調査を行った際に検出し損なった可能性が高い。ピットは径が15cm前後のもの20cm前後のものとの2つの大きさのものがある。これらのうちP1からは土師器及び銭貨が出土した。P1はトレンチ調査の際に上半を失ってしまったためその規模は明らかにしえないが、ほかと大きく異なるものではないと考えられる。出土遺物は、ピットの底

部近くで錢貨のうゑに土師器皿が重ねて置かれた状態で検出された。

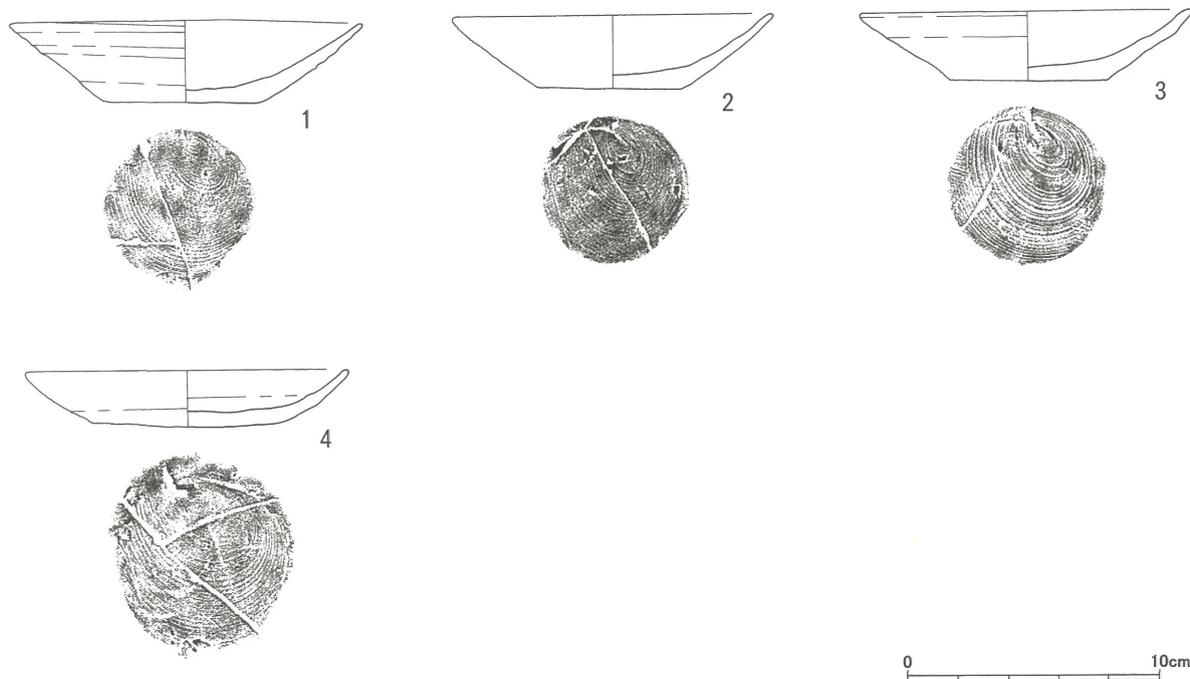
第58図-1~4は土師器皿である。1~3は体部が直線気味に開く形態のもので、器高が3cm前後のものである。4は体部が湾曲気味に立ち上がるもので、器高はほかの3点よりもやや低く12.8cmである。底部はいずれも糸切痕が認められる。錢貨は計測できたもので92点あるが、計測できたもの以外にも細かな破片があることから本来はもう少しあるものと考えられる。錢文は、「洪武通寶」「永樂通寶」「開元通寶」「景德元寶」「元祐通寶」「治平元寶」「大觀通寶」が確認できるが、多くは無文錢である。



第57図 2D区P1実測図 (S=1/20)

遺構に伴わない遺物 (第63図)

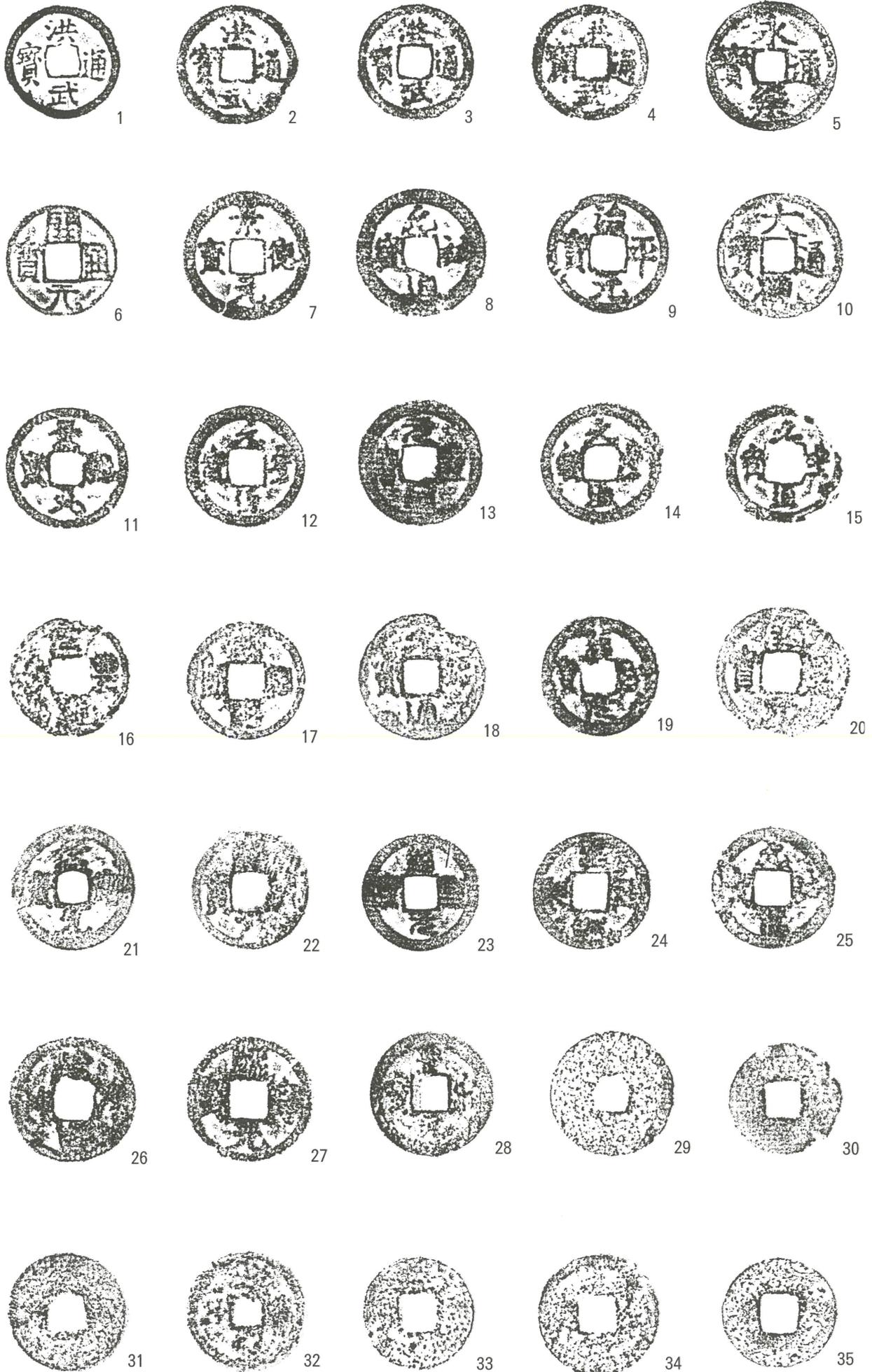
2・3層からは土師器・須恵器・磁器・陶器などが出土した。その一部を第63図に掲載した。1~6は須恵器である。1は蓋で輪状のつまみを持つもの。2・3は坏の底部である。ともに高台を持つが、体部以上は失っている。4~6も坏の底部と考えられるものである。体部以上を失っており全形は明らかでないが、底部は平底で糸切痕が確認できる。7は陶器で、備前焼の播鉢と考えられる。8・9は磁器である。10は陶器の徳利。ほぼ完形品で器高9.5cmを測る。11は瓦質土器の羽釜である。約1/3を失っているが器形はほぼ復元が可能である。口径14.6cm、器高16.4cmを測る。胴部中位よりやや下位に鐙が巡らされ、上位には二耳を伴う。12・13も瓦質土器で播鉢である。口縁端部の断面形は三角形を呈し、内面には播目が施される。14~17は土錘である。いずれもほぼ完形で、細めの円柱状を呈している。



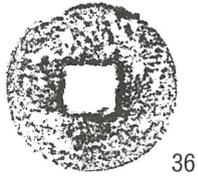
第58図 2D区P1出土土師器供膳具実測図 (S=1/3)



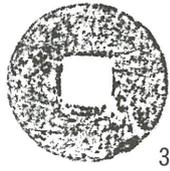
第59図 2D区2・3層遺構配置図 (S=1/300)



第60図 2 D区 P 1 出土銭貨拓影 1 (等倍) (表のみ)



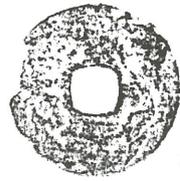
36



37



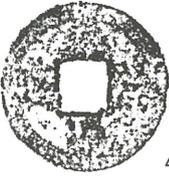
38



39



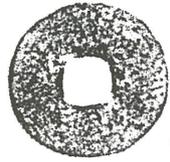
40



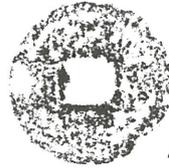
41



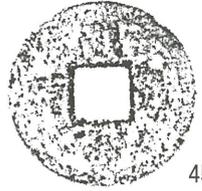
42



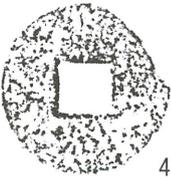
43



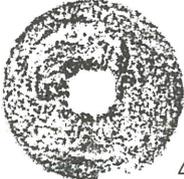
44



45



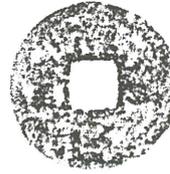
46



47



48



49



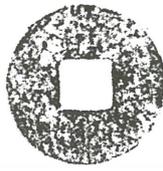
50



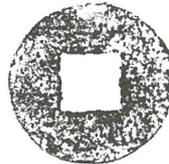
51



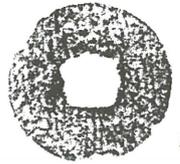
52



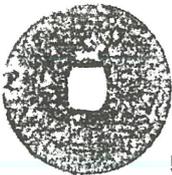
53



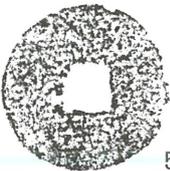
54



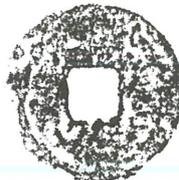
55



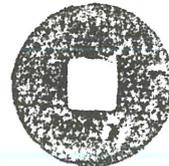
56



57



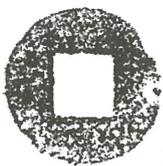
58



59



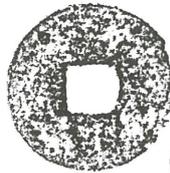
60



61



62



63



64



65



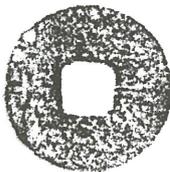
66



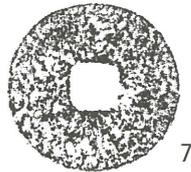
67



68

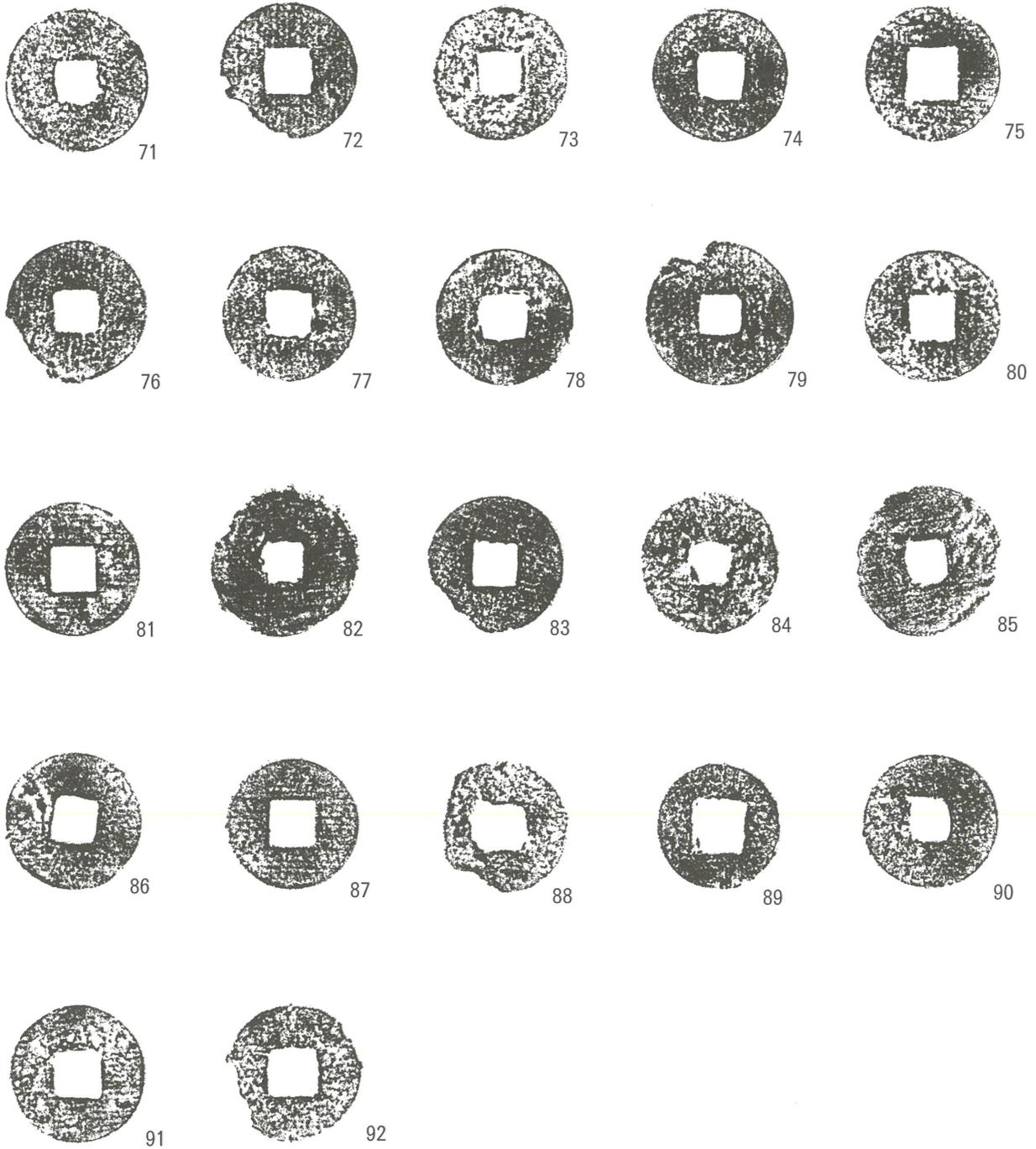


69

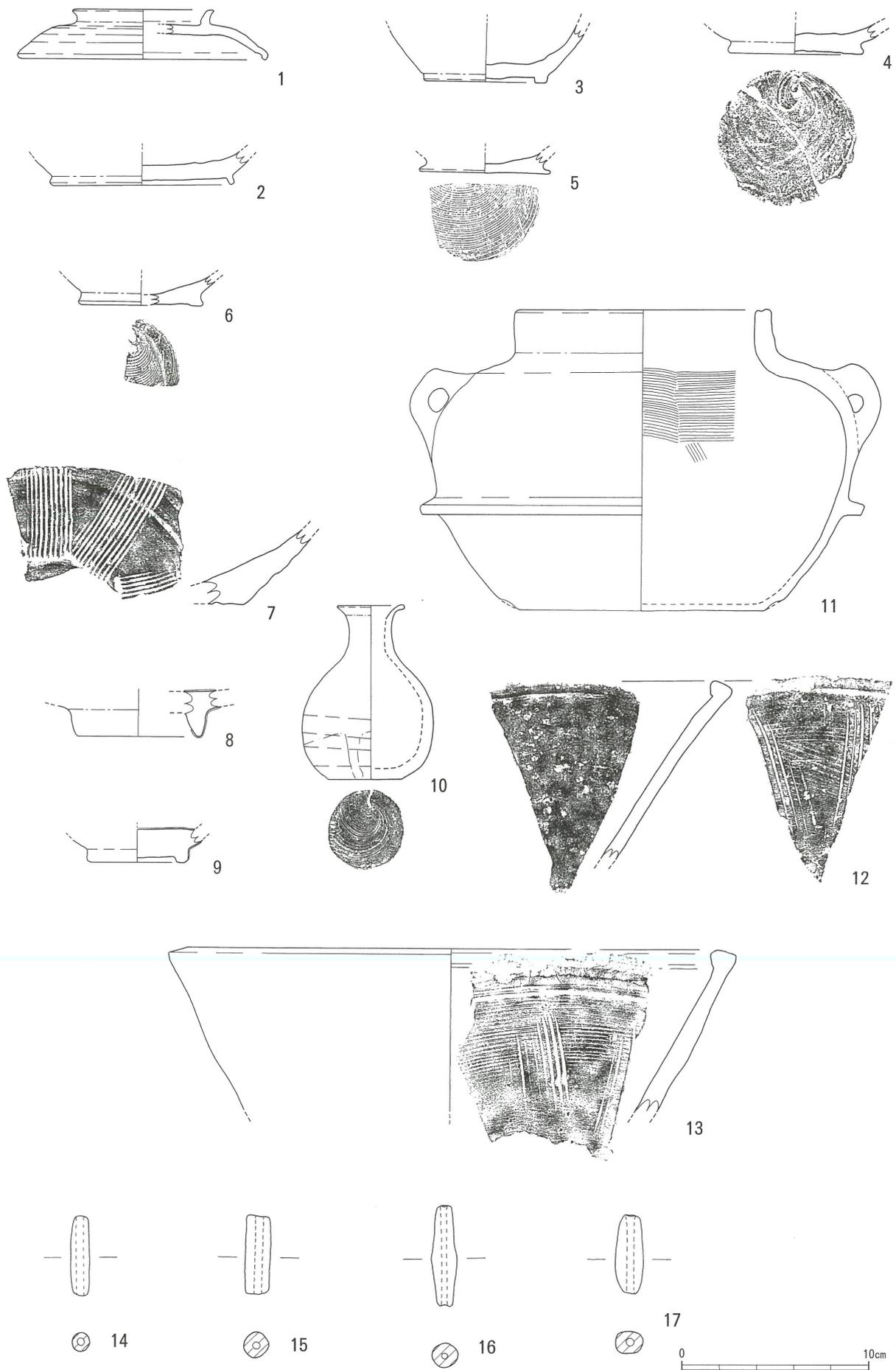


70

第61図 2 D区P 1 出土銭貨拓影 2 (等倍) (表のみ)



第62図 2 D区P 1 出土銭貨拓影3 (等倍) (表のみ)



第63図 2 D区 2・3層出土遺物実測図 (S=1/3) (須恵器蓋坏、瓦質土器釜、播鉢 陶器 土錘)

3. 4層の調査

調査概要

4層は上から礫・粗い砂の主に2つの層からなる層である。洪水により堆積したと考えられる層で、約1mの厚さを測るところもある。

遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器などが出土した。基本的には2・3層と4層の境付近から礫部分にかけて須恵器や瓦質土器が、礫から粗い砂にかけて弥生土器・土師器の出土がみられる。

遺構に伴わない遺物

弥生土器（第64図・第65図1～14・17 図版50～51・63） 第64図1・5は胴部にヘラによる沈線文が描かれる甕である。5の口縁端部には同じ工具による刻み目が施されている。ともに胴部の沈線文は、1～3条が確認されるだけだが、下位にも多条に施文されている可能性がある。石見Ⅰ-3様式と考えられる。弥生前期の土器にしては、胎土に大粒の砂粒が顕著ではない。

同図2～4・6は壺である。4は頸部から肩部にかけての破片で、櫛状工具による多条沈線文と波状文が描かれ、最下部に小さな三角形刺突文が施文されている。石見Ⅱ-1様式のである。

同図2・6は小形の壺である。ともに口縁部が短い器形だが、6の口縁部はとくに短く、頸部は「く」の字形に屈曲している。3は口頸部が長く外反する大型の壺で、口縁端部は平坦面をなす。これらはいずれも石見Ⅱ-1様式のものと考えられる。

同図7～9は底部である。7は甕、8・9は壺の可能性がある。8の内面はとくに丁寧に仕上げられ、9の内面には指押圧痕がみられる。これらは石見Ⅰ-3様式～Ⅱ-1様式にかけてのものと考えられる。

第65図1～12はいずれも後期の土器で、1～3・6は壺、4・5・10は甕、11・12は高坏、7～9は壺または甕の底部である。

壺のうち1・6は、口縁上部が短い複合口縁である。ともに口縁部は直立気味だが、1はやや外反し、6はやや内傾する器形である。1の頸部は断面形「コ」の字形に近い形状で、胴部はかなり張ると考えられる。2は口縁上半が大きく外反する複合口縁である。3は単純口縁で、口縁部が大きく開き、口縁端部は面を持つ。

甕（第65図4・5・10）は、いずれも複合口縁で、4・10は肩部が強く張る器形である。口縁端部は4がやや厚くなり、5・10が先細になる。

7～9は壺または甕の底部であると思われるが、器種の特定は困難である。いずれも平底で、9は比較的急な角度で胴部が立ち上がるが、7・8は開き気味の胴部である。

高坏（第65図11・12）は、11が坏部中程で屈曲する器形、12は坏部中程が丸味を持つ器形で、ともに口縁部は大きく外反する。11の脚部は筒部から緩やかに広がる。12の底部外面中央には小円孔が穿たれている。

以上の弥生土器は、1・11がV-2～3様式、4～6・10・12がV-4様式と考えられる。

土師器（第66図13～第77図5・第78図 図版52～63） 古墳時代前期から中期にかけての土師器がまとめて出土した。器種は、壺・甕・高坏・器台・碗などである。

器台

第65図15は器台で筒部が短い器形である。受部内面にミガキ、脚部内面にケズリが施される。古墳時代前期のものと考えられる。

第76図12・15・16は器台である。15は受部で、浅い皿形を呈す。口縁端部は平坦に面取りされる。受部底面は中空にならない。12・16は脚部で、ともに受部底面が中空になっている。古墳時代前期までさかのぼる可能性がある。

壺

壺のうち、第65図13・14・18、第78図5・6は複合口縁の壺である。第65図13の外面には竹管文が鋸歯状に配されており、弥生時代後期までさかのぼるものかもしれない。同図14・18は14の頸部には「人」字状のヘラ線刻がある。18は稜から上半の屈曲が弱く14より新しいものと考えられる。第78図5・6は複合口縁の壺であるが、口縁部・頸部が外反せずに直線的に立ち上がる特異な器形である。5は大形品、6は小形品である。古墳時代前期のものと考えられる。

第65図17は、口縁直下に太い突帯を貼り付けた、特異な土器である。口唇部は平坦に面取りされている。器種・時期の判断が難しいが、調整等から古墳時代の壺の断片と考えられた。

第65図16・第66図1～7・第67図1～2は、中・大形の単純口縁の壺である。いずれも頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部が外反する。古墳時代中期のものと思われる。第66図6・7は全形が窺える資料で、胴部は球形で底部は丸底である。最大径は胴部中程よりやや高い位置にある。第65図16の口縁端部は、内側に巻き込むように肥厚している。第66図3の頸部は屈曲が緩く、双曲線状の形状を呈する。同図6の頸部は直立気味で、口縁上半が外反する。同図7は他に比べ口縁が長く伸びて長大化している。第66図2は、口縁部がやや内湾し、口縁端部に平坦面を形成している。

第66図8・9・第67図3・5～12は小形の壺である。第66図8・9・第67図3は中でもやや大形で、口縁部が長く伸びるタイプである。第67図5～12は小形で、口縁部が短いものである。同図5～7・9・11は比較的器壁が薄い、その他は器全体の大きさに比べて器壁の厚さが厚く、つくりが粗雑である。同図8のみ口縁部が外反しており、同図9～11の口縁部は内湾気味である。同図6・7・11は肩部が強く張るやや扁平な胴部で、そのほかは球形を呈する。底部はすべて丸底である。いずれも古墳時代中期のものと考えられる。

甕

第67図13・14と第68～71及び第72図1～11に挙げたものは甕である。第67図13・14・第68図1～2・第72図11は古墳時代前期のもの、第68図3～第72図6は古墳時代中期のもの、第72図7～10は古墳時代後期から奈良時代のものと考えられる。

第67図13・第68図1・2は古墳時代前期の典型的な複合口縁の甕である。いずれも口縁端部は平坦面を作り、胴部はほぼ球形をなす。第67図13は胴部に櫛状工具による波状文と平行線文を施している。出雲部でいう小谷式に相当する。同図14は複合口縁であるが、屈曲部の稜が鈍く、第67図13・第68図1・2の例よりもやや新しく位置づけられる。

第68図3～5は、頸部よりやや高い位置で肥厚する口縁で、複合口縁の稜の痕跡にもみえる。3は口縁上半が直立しており、4・5は内湾気味に開く口縁である。

第68図11・第69図1～7は口縁が内湾して開く甕である。第68図11や第69図1・2などは、第68図3～5に似た器形だが、稜の部分が不明瞭で、複合口縁の組列になるか不明である。

第68図6～第72図6、第78図9～11は、口縁が外傾または外反する甕である。器高が20cmを超える大形品（第69図5～7・第70図11など）と、15センチ未満の小形品（第70図3・5第78図9～11など）がある。いずれも頸部は「く」の字形に強く屈曲し、底部は丸底と考えられる。胴部は、胴部最大径が口径を凌ぐものが多く、球形のもの（第68図10・第69図7・第70図3など）、長胴気味のもの（第69図5・6・第70図11など）、上下に扁平気味なもの（第69図4・第70図5など）がある。口縁形態は、第68図7～10、第78図9～11が短く外傾、第69図8～第70図が短く外反、第71図～第72図1～5がやや長く外反、第72図6、第78図7が長めで直口気味である。口縁端部は丸く納めるものが多いが、第69図7・8は端部を若干上方に摘み上げており、第70図4・13及び第72図4は端部を外方にめくるような形状をしている。文様はほとんど施されていないが、第69図7・第71図5の肩部にへら状工具による斜位の刺突文が見られる。また、第78図7の胴部には、非常に疎なハケ目がみられる。

第72図7～10は、頸部の屈曲が不明瞭で、口縁部が外反する甕である。古墳時代後期から奈良時代にかけての土器と考えられる。第72図7は口縁部が直立気味に長く外反し、胴部が強く張る器形で、同図8～10よりやや古いかもしい。同図8～10は口頸部が短く外反し、胴部はあまり張らない器形と考えられる。

第72図11は壺または甕の胴部片である。櫛状工具による刺突文と平行沈線文が描かれており、古墳時代前期か、あるいは弥生時代後期までさかのぼるものかもしれない。櫛状工具による刺突文と見えるものはタタキ目の可能性もあると思われる。そうであれば須恵器の技法との関係も想定される。

第72図12～14は、壺または甕の底部で、いずれも丸底である。大きさからみると、第68図4～第72図6のような器形の甕底部かもしれない。12は底部外面に木葉の葉脈痕が残っている。

低脚坏・碗

第72図18・第78図4は低脚坏である。口縁部は皿形に大きく開き、脚は「ハ」の字形に広がる。古墳時代前期のものと考えられる。

第72図15～17、第73図1～6、第77図4、第78図1～3・12は碗である。第72図15～17、第73図1～6、第78図1～3は脚付で、脚部は「ハ」の字状に大きく開く。第73図1・3、第78図1～3は、坏部口縁部・体部が内湾する深身の器形である。第72図15の口縁端部は外反している。第72図17は粗雑な作りである。第77図4、第78図12は脚が付かない碗である。第77図4の底部はわずかに平底となっており、底部外面にはタタキが見られる。第78図12の底部は尖り気味であり、自立しない。2つとも口縁部は内湾する単純な器形である。これらは古墳時代中期のものと考えられるが、それ以前にさかのぼるものの可能性もあると考えられる。

高坏

第73図7～第76図11・13～14は高坏である。いずれも古墳時代中期のものと考えられる。第73図7～第74図15は、坏部の体部中程で屈曲し口縁部が外反するものである。これらはさらに、体部屈

曲部に突線状に稜がつくもの（第73図7～13）、体部屈曲部に鈍い稜がつくもの（第73図14～22・第74図1～15）、体部に稜がつかない皿形の坏部（第74図16～19）に分類できる。脚部はいずれも脚端部が大きく広がる器形だが、筒部が細めで長いもの（第73図20・第74図15・第75図11～22など）と、筒部が太めで短く脚端部の広がり極端に大きいもの（第74図19・第76図7・8・13・14）がある。坏部と脚部の接合部分は、底面からみて凹面または平坦面をなすもの（第73図20・第74図9・10・13・19ほか）、半球状に盛り上がるもの（第73図8～14・第74図2・3・14・18・ほか）などがある。

鉢

第76図17～19・第77図1～3・第78図8は鉢である。第76図17や第78図8は、頸部が「く」の字形に屈曲する器形で、甕の可能性はあるが、全体に寸詰まりであることから鉢と判断した。第76図18・19・第77図1～3は、高さに比して口径が大きく広がり、底部は平底である。第76図18は頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部が短く開く。そのほかは体部から口縁にかけて内湾気味に外傾する単純な器形である。第77図1は他に比べてやや深身で、口縁端部がわずかに外反する。第76図18の底部には木葉の葉脈痕が付いている。第77図1・2の底部にはヘラによる線刻が見られ、とくに1には縦横に重複してつけられている。